

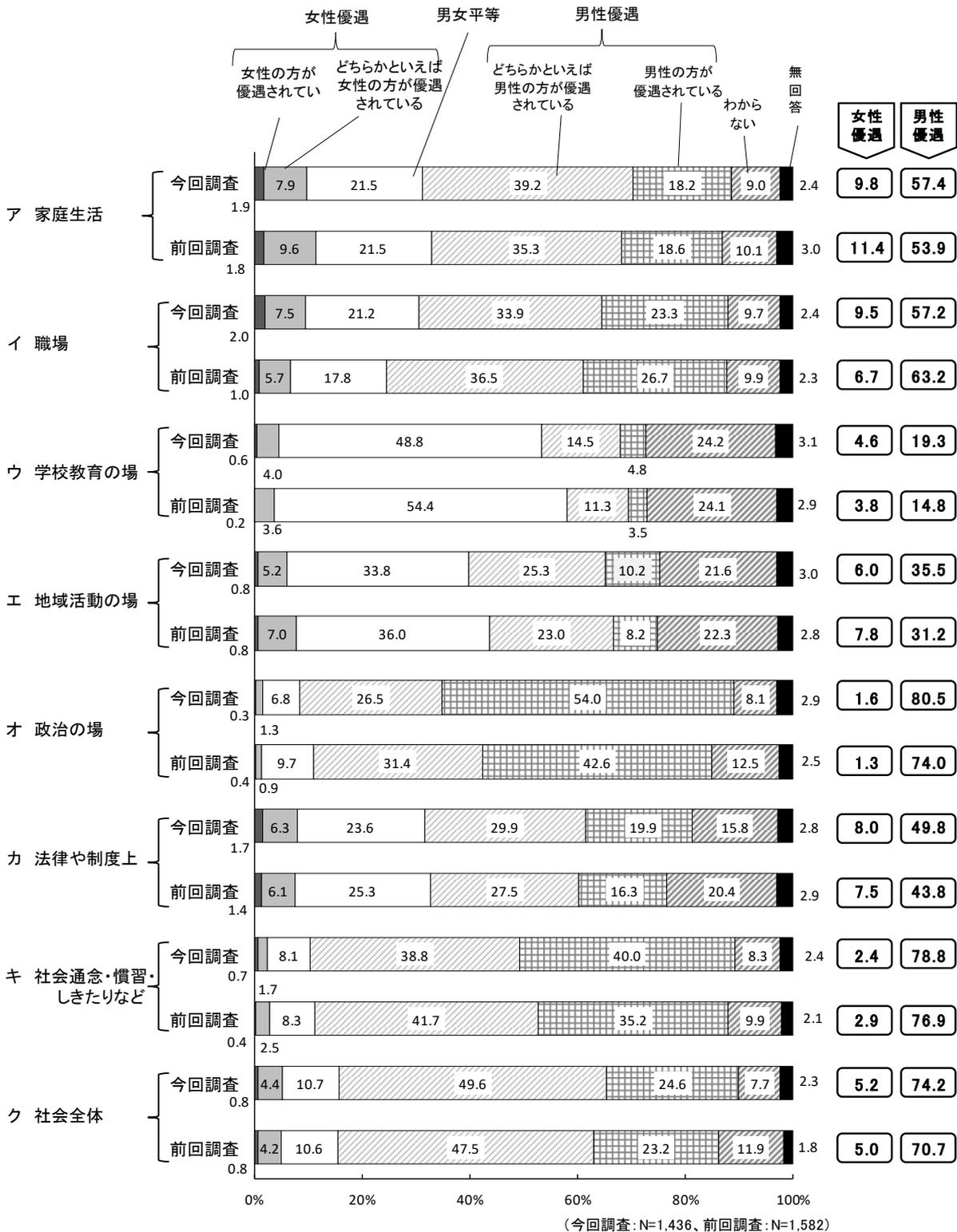
第 2 章 調査結果

1 家庭や男女平等に関する意識について

(1) 様々な分野での男女平等達成感 (問1)

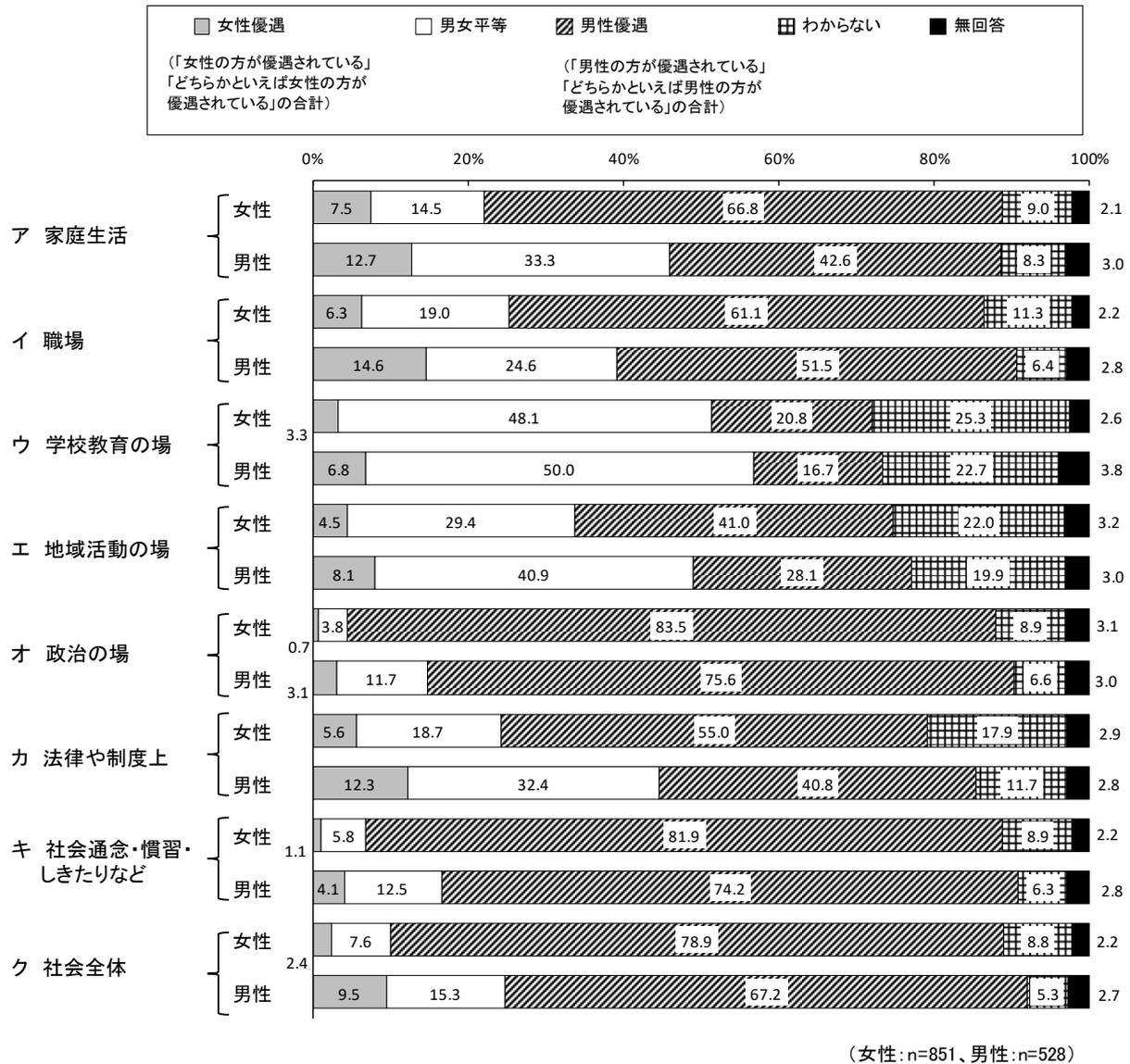
問1 あなたは、次にあげる分野で男女は平等になっていると思いますか。
 (ア～クのそれぞれについて、あてはまるものを1つ選択)

図表1-1 様々な分野での男女平等達成感
 (全体結果と前回比較)



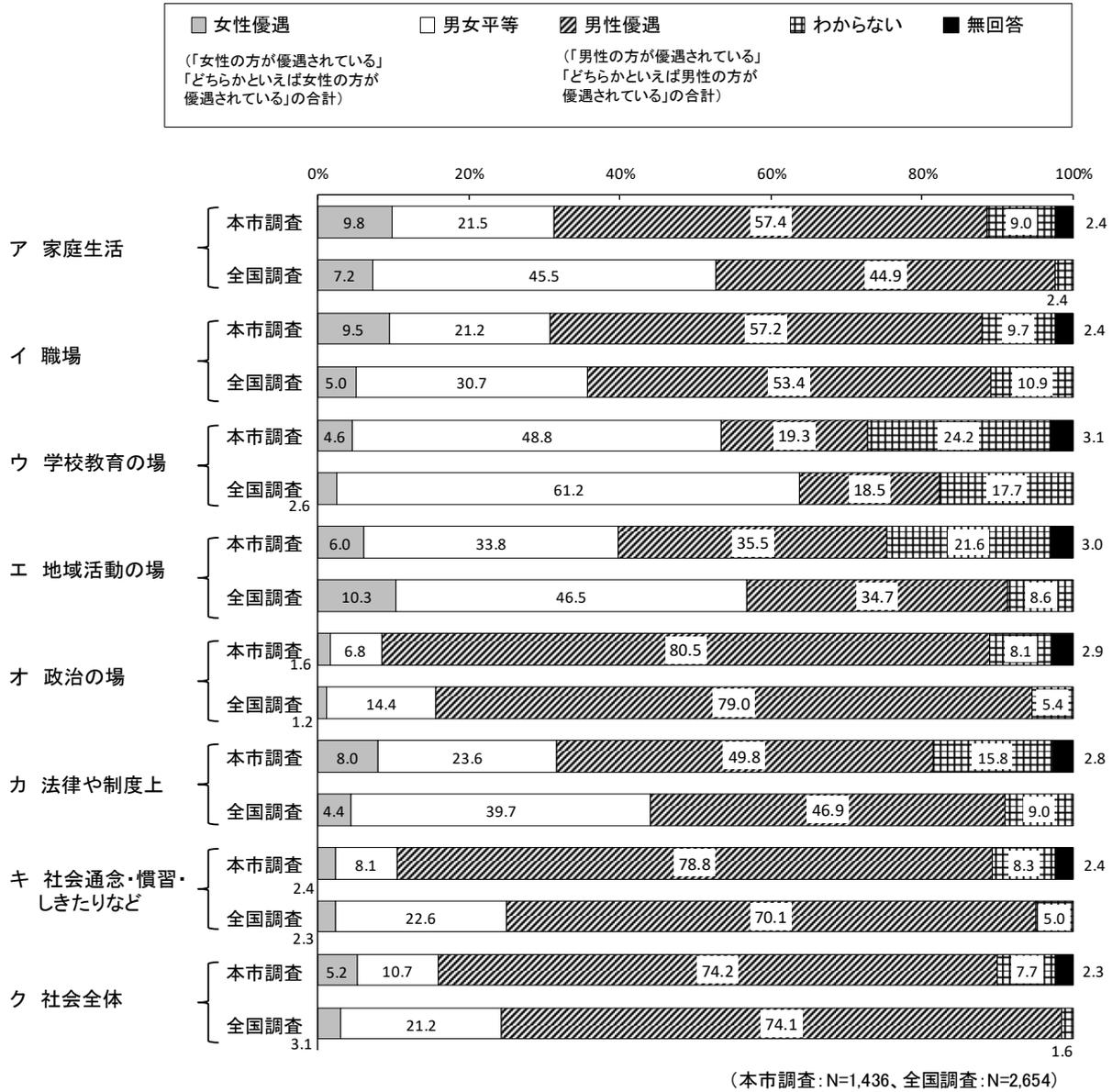
8つの分野での男女平等達成感について尋ねたところ、すべての分野で「男性優遇」（「男性の方が優遇されている」、「どちらかといえば男性の方が優遇されている」の合計）が、「女性優遇」（「女性の方が優遇されている」、「どちらかといえば女性の方が優遇されている」の合計）を上回った。特に「政治の場」（80.5%）、「社会通念・慣習・しきたりなど」（78.8%）、「社会全体」（74.2%）の分野で、7割以上となっている。「男女平等」の割合が最も高い分野は、「学校教育の場」（48.8%）であった。

図表1-2 様々な分野での男女平等達成感
(性別)



性別で見ると、「男女平等」の割合は、すべての分野において女性の方が男性より低くなっている。特に、「政治の場」（83.5%）、「社会通念・慣習・しきたりなど」（81.9%）では、女性の8割以上が「男性優遇」と感じている。

図表1-3 様々な分野での男女平等達成感
(全国比較)

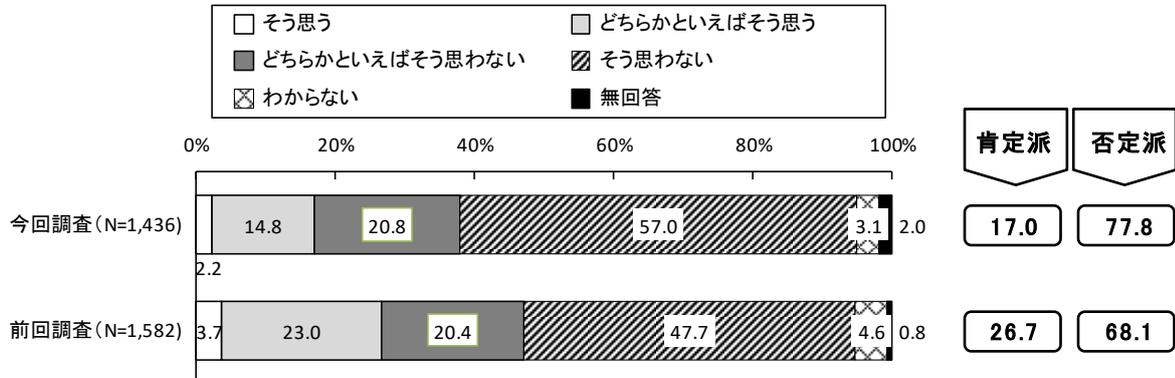


全国調査と比較すると、「男女平等」の割合はすべての分野において全国調査を下回っている。特に、「家庭生活」、「政治の場」「社会通念・慣習・しきたりなど」、「社会全体」では、約2倍の差がある。

(2) 固定的性別役割分担意識についての考え方 (問2・問3)

問2 あなたは、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」という考え方についてどう思いますか。
(1つ選択)

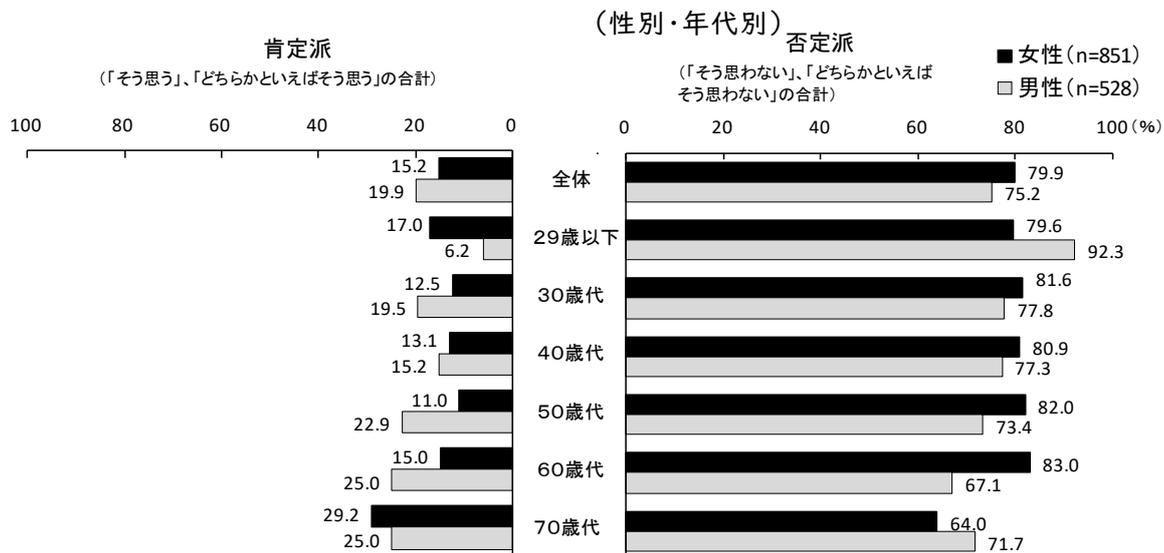
図表2-1 固定的性別役割分担意識についての考え方
(全体結果)



固定的な性別による役割分担意識については、肯定派(「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計)と否定派(「そう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」の合計)の2つに区分すると、否定派が77.8%、肯定派が17.0%となっている。

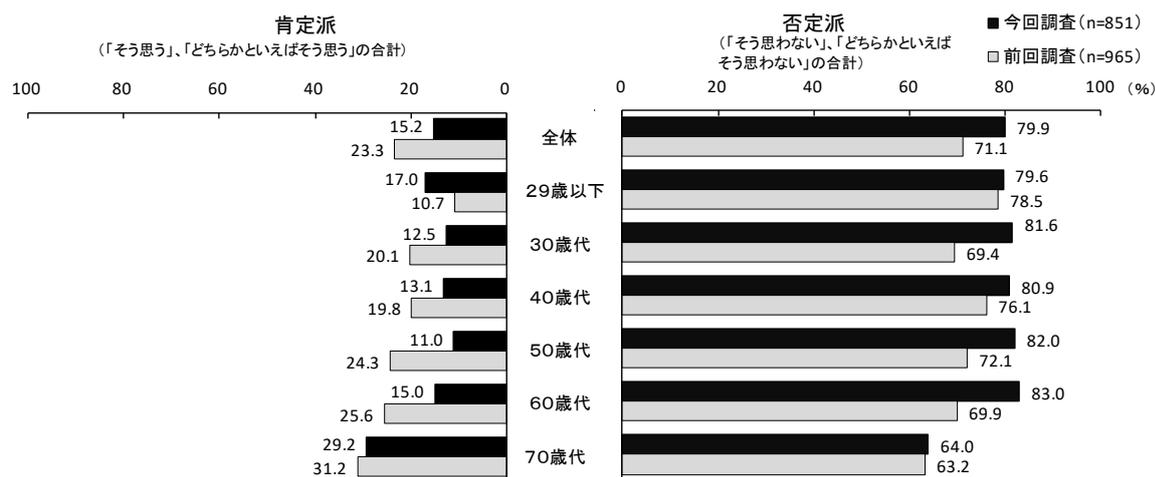
前回調査と比較すると、否定派の割合が9.7ポイント上昇した一方、肯定派の割合が9.7ポイント低下しており、固定的な性別による役割分担を否定する意識が更に高まっている。

図表2-2 固定的性別役割分担意識についての考え方



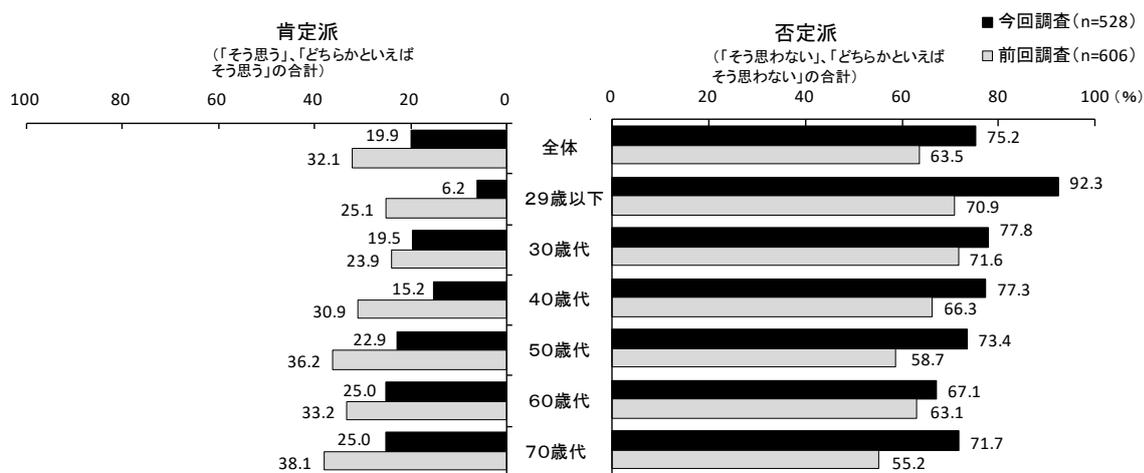
女性も男性もすべての年代で否定派が肯定派を上回っている。最も否定派が多い世代・性別は、29歳以下の男性(92.3%)である。

図表2-3 固定的性別役割分担意識についての考え方
(女性年代別・前回比較)



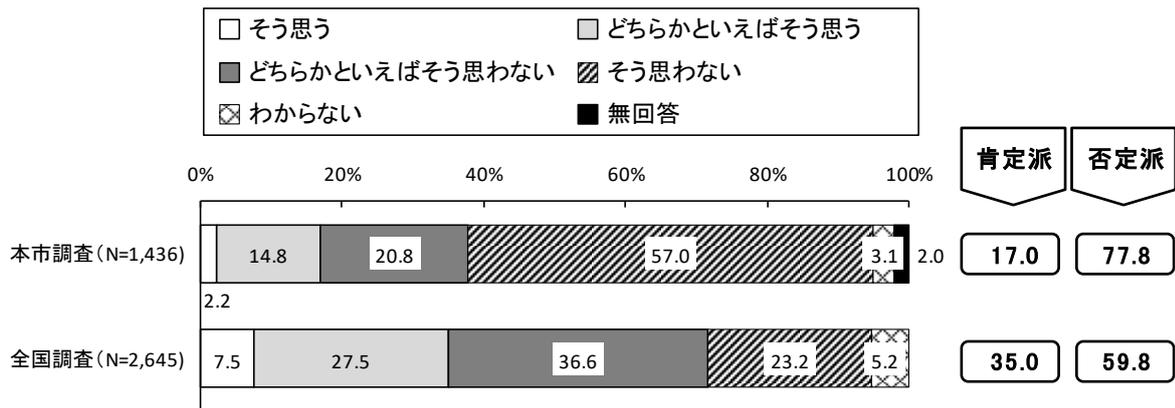
女性はすべての年代で否定派が前回調査より増えている。肯定派は29歳以下のみ前回調査より増えている。

図表2-4 固定的性別役割分担意識についての考え方
(男性年代別・前回比較)



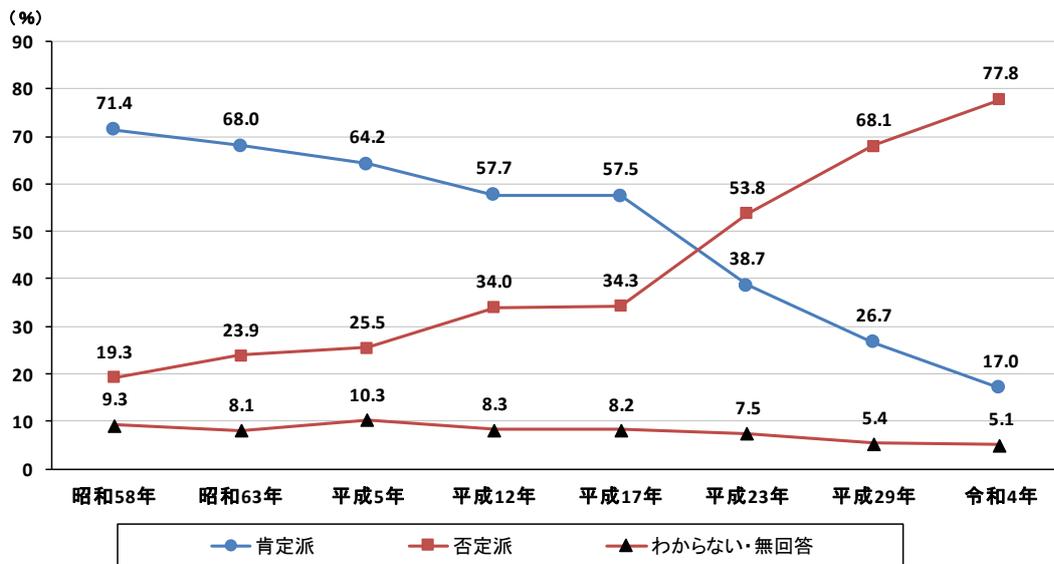
男性はすべての年代で否定派が前回調査より増えており、肯定派は減少している。特に29歳以下では、否定派は前回調査より21.4ポイント高く、肯定派は18.9ポイント低くなっている。

図表2-5 固定的性別役割分担意識についての考え方
(全国比較)



全国調査と比較すると、否定派の割合は全国(59.8%)より本市(77.8%)の方が高くなっている。

図表2-6 固定的性別役割分担意識についての考え方
(過去調査結果との比較)

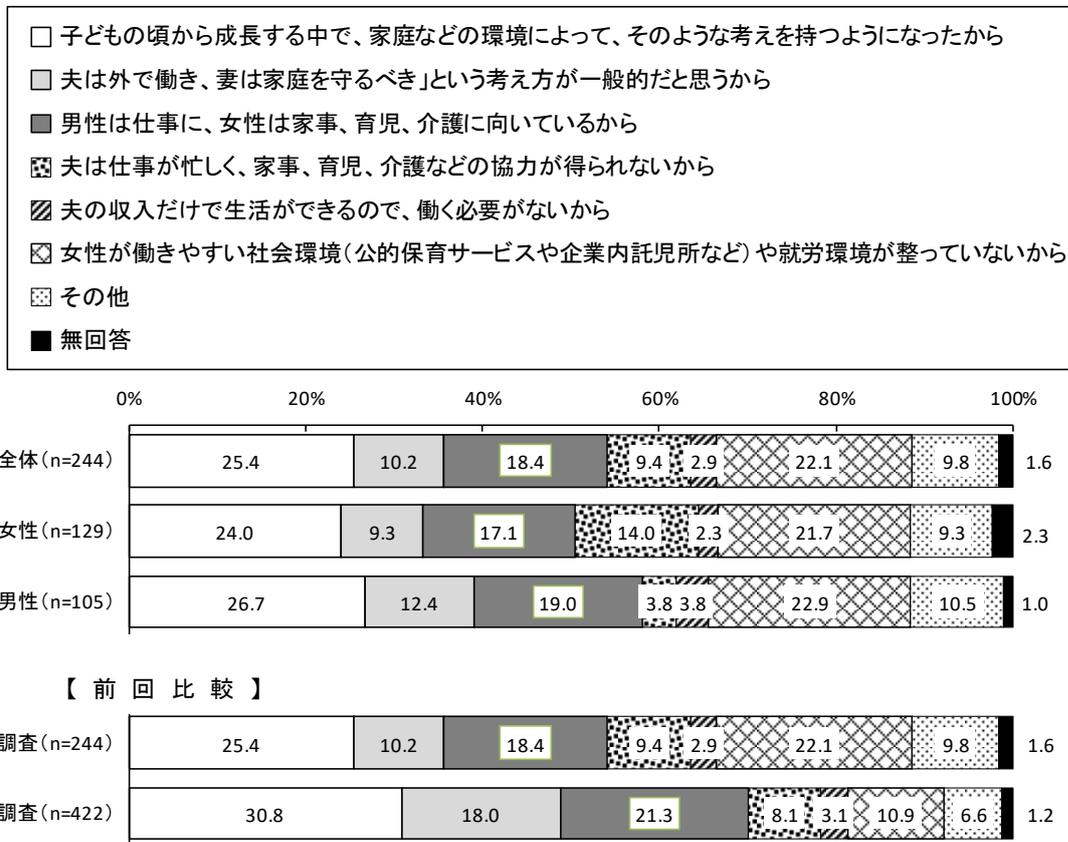


過去の調査結果と比較すると、平成23年の調査で肯定派と否定派の割合が逆転して以降、差が大きくなっている。

【問2で「1. そう思う」「2. どちらかといえばそう思う」と回答された方にお尋ねします】

問3 あなたがそのように考えるのはどのような理由ですか。(1つ選択)

図表3-1 固定的性別役割分担意識についてそのように考える理由
(全体結果・性別・前回比較)



固定的な性別役割分担の肯定派にその理由を尋ねたところ、男女ともに、「子どもの頃から成長する中で、家庭などの環境によって、そのような考えを持つようになった」(25.4%)が最も高く、次に「女性が働きやすい社会環境(公的保育サービスや企業内託児所など)や就労環境が整っていないから」(22.1%)、「男性は仕事に、女性は家事、育児、介護に向いているから」(18.4%)の順となっている。

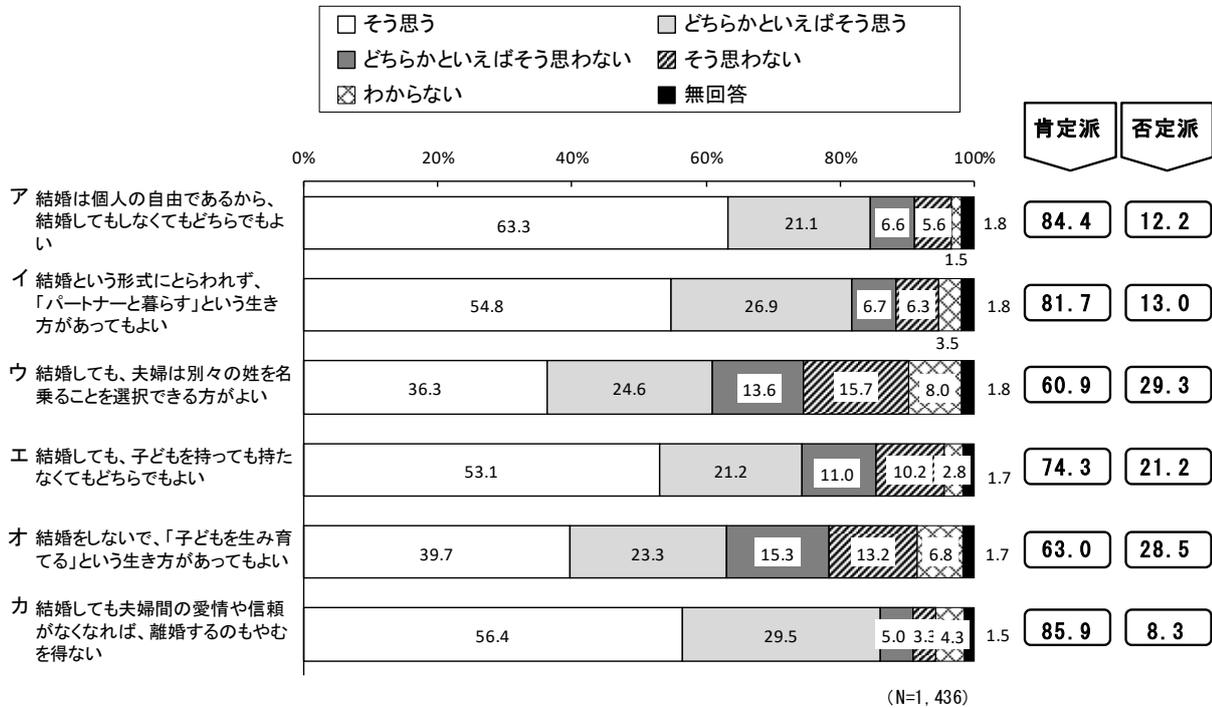
性別で見ると、「夫は仕事が忙しく、家事、育児、介護などの協力が得られないから」について、女性と男性の間で差がある(10.2ポイント差)。

前回調査と比較すると「女性が働きやすい社会環境(公的保育サービスや企業内託児所など)や就労環境が整っていないから」が11.2ポイント上昇している。

(3) 結婚感 (問4)

問4 あなたは、結婚について、どのように考えますか。
(ア～カのそれぞれについて、あてはまるものを1つ選択)

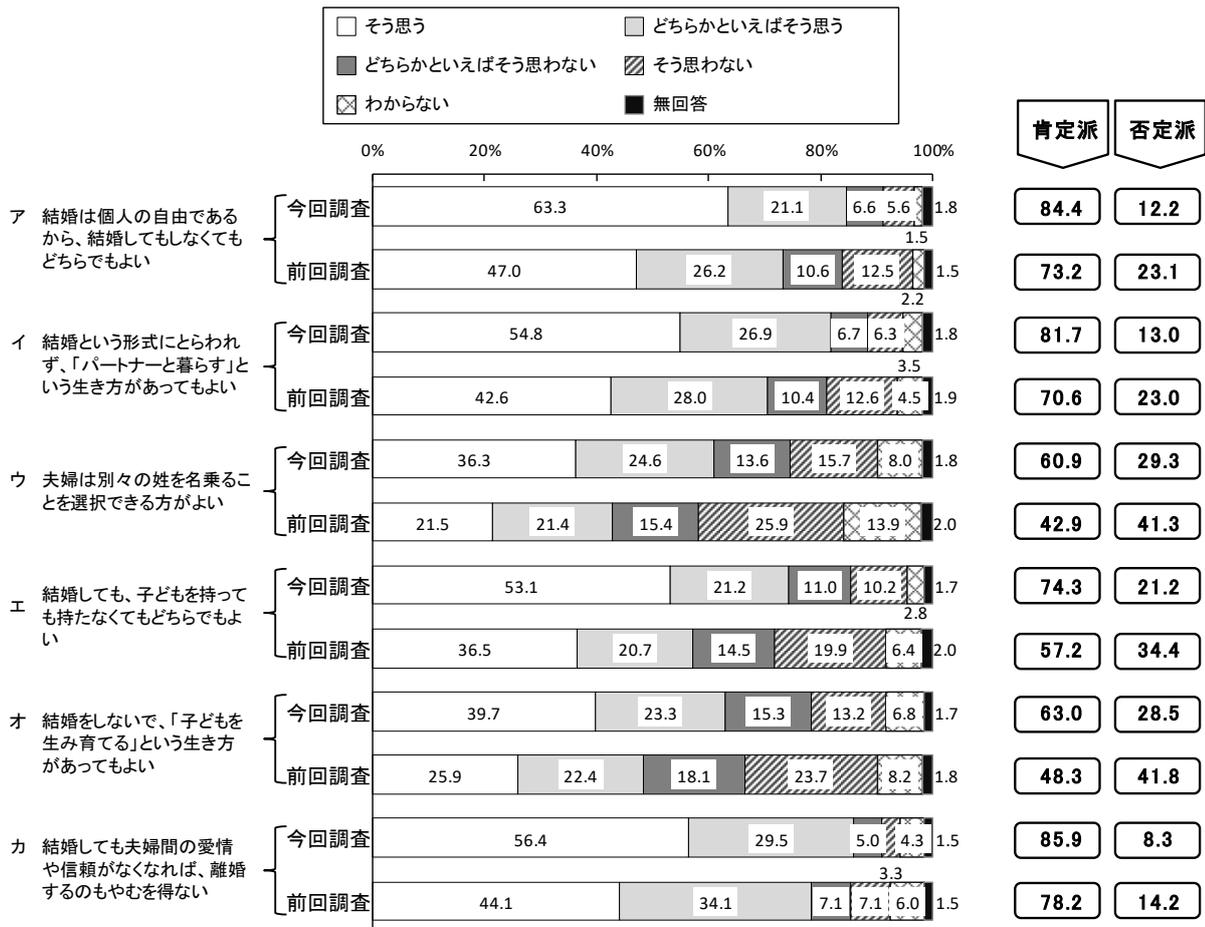
図表4-1 結婚観
(全体結果)



結婚に関する考え方について、それぞれの項目について、肯定派(「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計)と否定派(「そう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」の合計)の2つに区分して比較したところ、すべての項目について、肯定派が否定派を上回った。

特に、「結婚しても夫婦間の愛情や信頼がなくなれば、離婚するのもしやむを得ない」(85.9%)、「結婚は個人の自由であるから、結婚してもしなくてもどちらでもよい」(84.4%)、「結婚という形式にとらわれず、『パートナーと暮らす』という生き方があってもよい」(81.7%)は肯定派が80%を超えている。

図表4-2 結婚観
(前回比較)



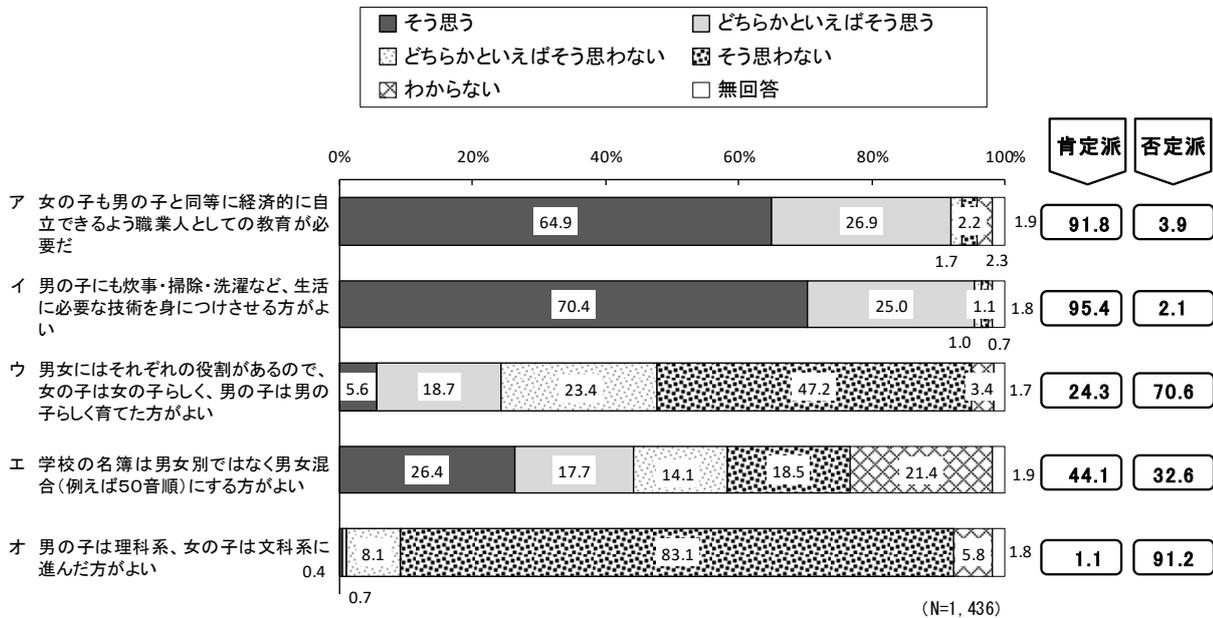
(今回調査: N=1,436、前回調査: N=1,582)

前回調査と比較すると、すべての項目において肯定派の割合が増えている。特に、「夫婦は別々の姓を名乗ることを選択できる方がよい」(18ポイント上昇)、「結婚しても、子どもを持っても持たなくてもどちらでもよい」(17.1ポイント上昇)は大きく増加している。

(4) 子どものしつけや教育についての考え方 (問5)

問5 あなたは、子どものしつけや教育について、どのように考えますか。子どものいない方も、一般的にどう思われるかお答え下さい。
(ア～オのそれぞれについて、あてはまるものを1つ選択)

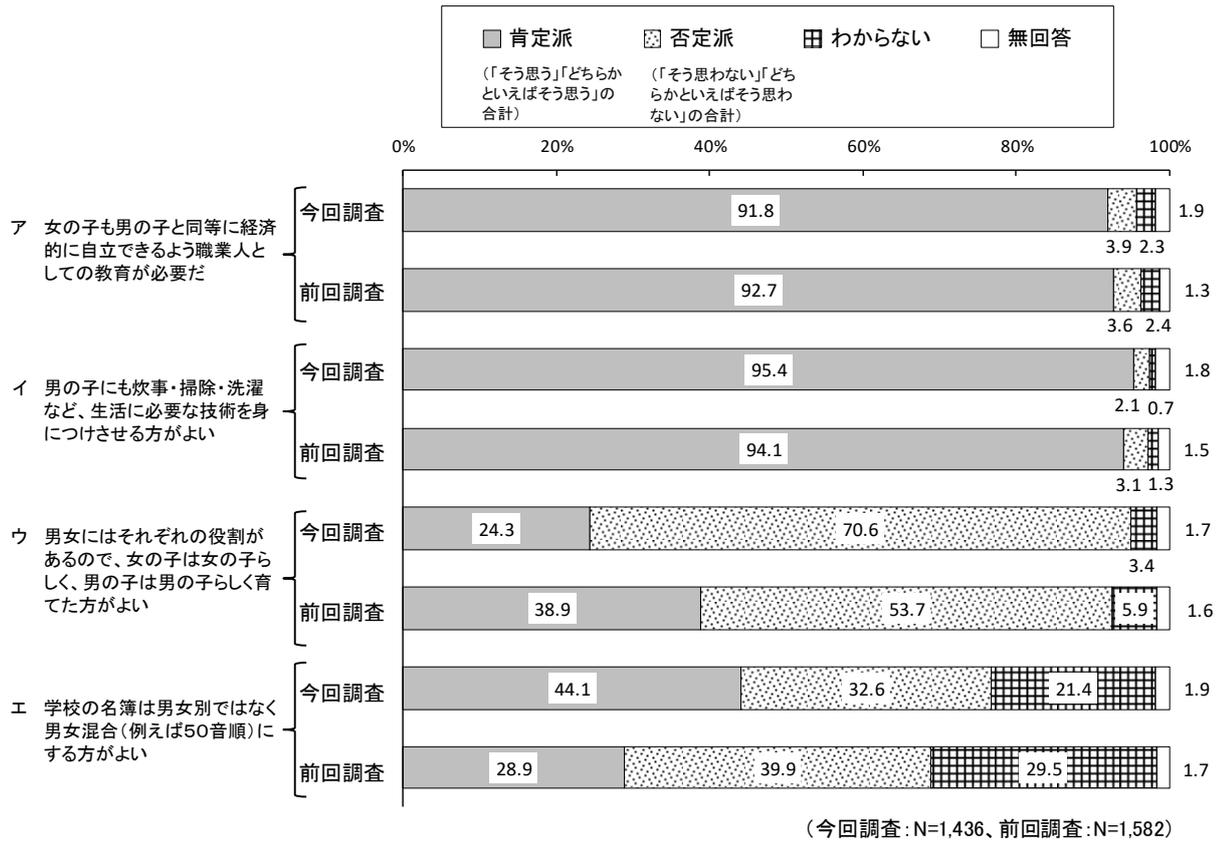
図表5-1 子どものしつけや教育についての考え方
(全体結果)



子どものしつけや教育に関する項目について、肯定派(「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計)の割合をみると、「男の子にも炊事・掃除・洗濯など、生活に必要な技術を身につけさせる方がよい」(95.4%)、「女の子も男の子と同等に経済的に自立できるよう職業人としての教育が必要だ」(91.8%)が9割を超えている。「男の子は理科系、女の子は文科系に進んだ方がよい」(91.2%)は否定派が9割を超えている。

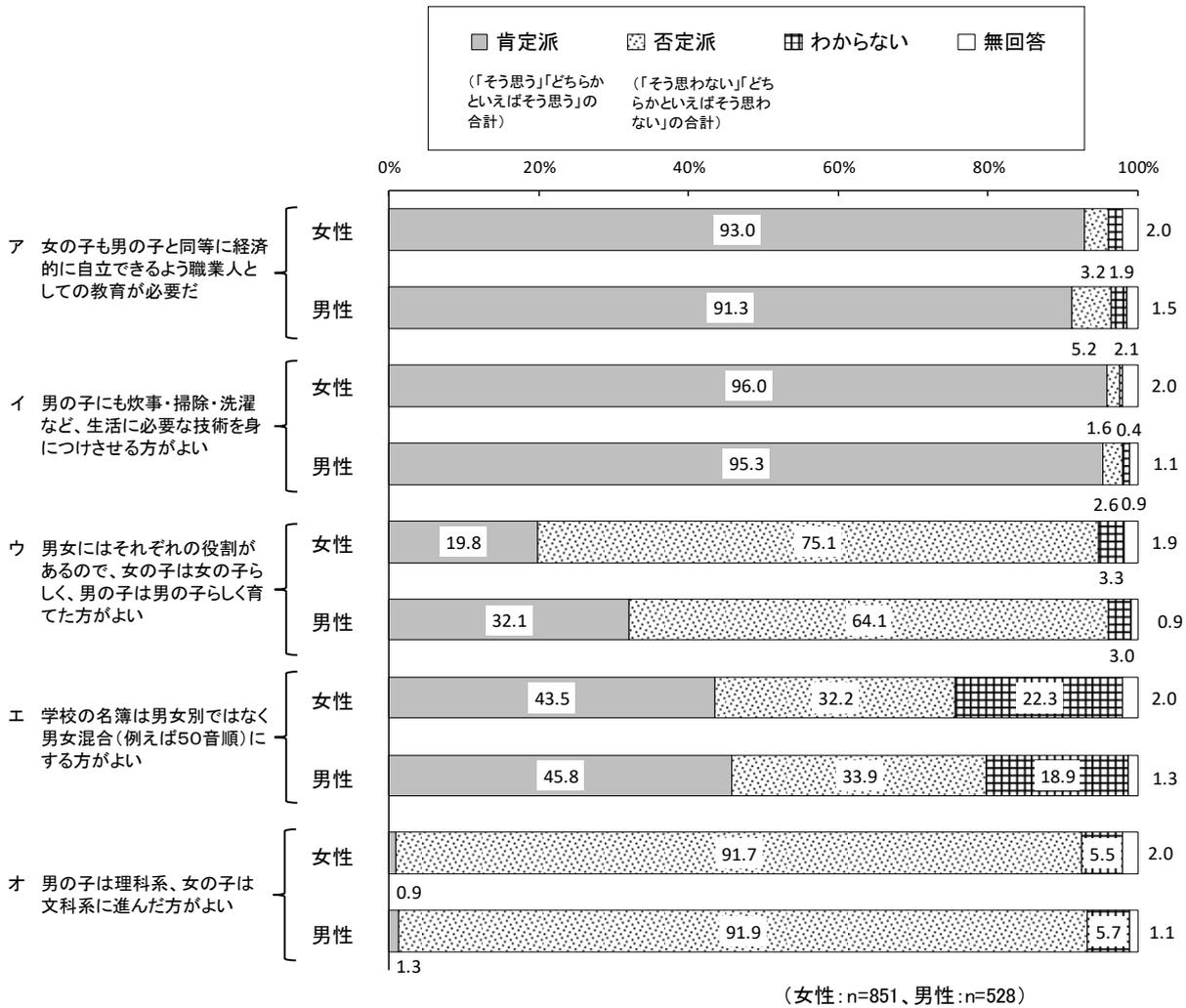
「学校の名簿は男女別ではなく男女混合(例えば50音順)にする方がよい」(肯定派44.1%、否定派32.6%、わからない21.4%)は意見が分かれている。

図表5-2 子どものしつけや教育についての考え方
(全体結果・前回比較)



前回調査と比較できる4項目のうち、「男女にはそれぞれの役割があるので、女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしく育てた方がよい」で否定派の割合は16.9ポイント上昇し、「学校名簿は男女別ではなく男女混合(例えば50音順)にする方がよい」の肯定派の割合は15.2ポイント上昇している。

図表5-3 子どものしつけや教育についての考え方
(性別)



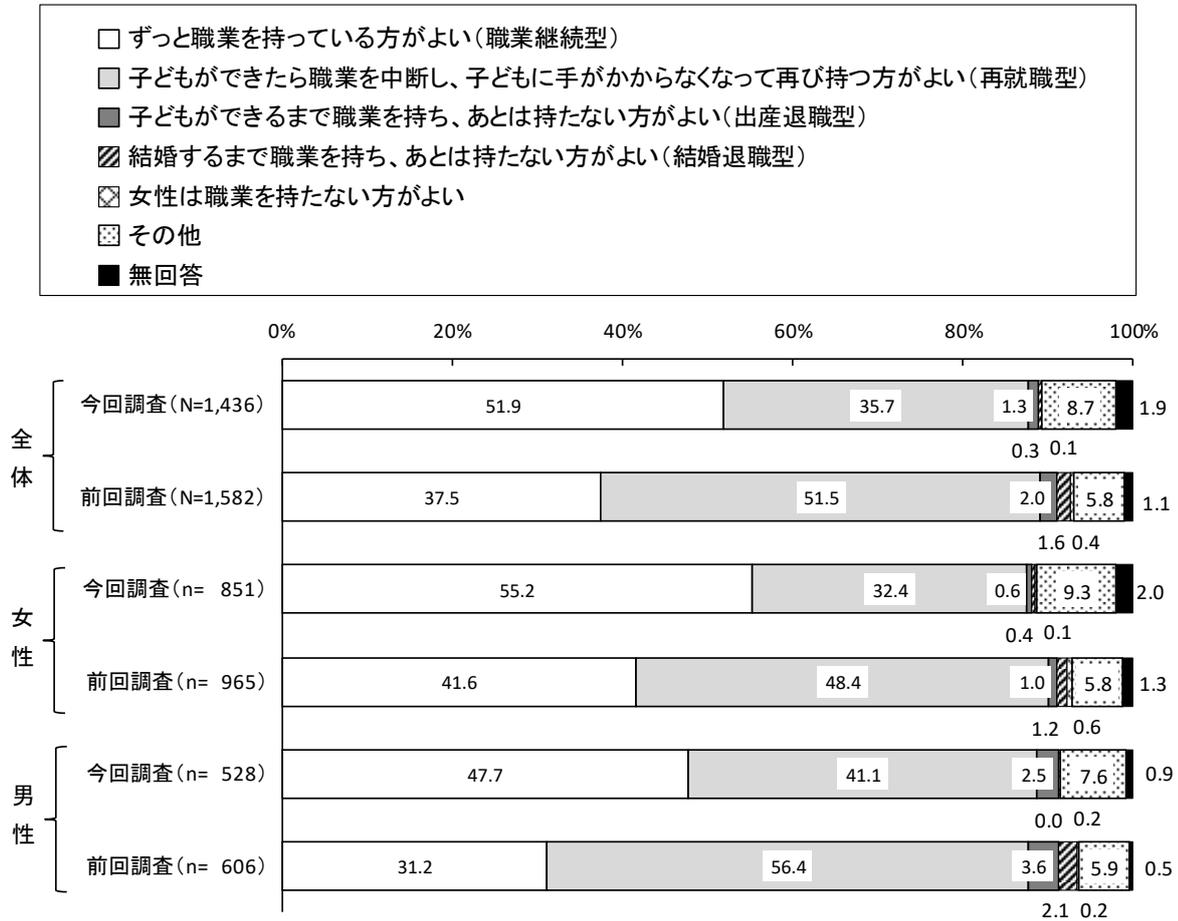
「男女にはそれぞれの役割があるので、女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしく育てた方がよい」では、否定派が女性の方が男性より11ポイント多い。他の項目では男女の回答に大きな差はみられない。

2 男女の働き方や女性の社会進出について

(1) 女性が職業を持つことへの考え方 (問6)

問6 「女性が職業を持つこと」について、どれが最も望ましいと思いますか。(1つ選択)

図表6-1 女性が職業を持つことへの考え方
(全体結果と前回比較・性別)



前回調査では、男女ともに「子どもができたら職業を中断し、子どもに手がかからなくなって再び持つ方がよい」(以下「再就職型」という。)が最も高かったが、今回の調査では「ずっと職業を持っている方がよい」(以下「職業継続型」という。)が最も高くなっている。

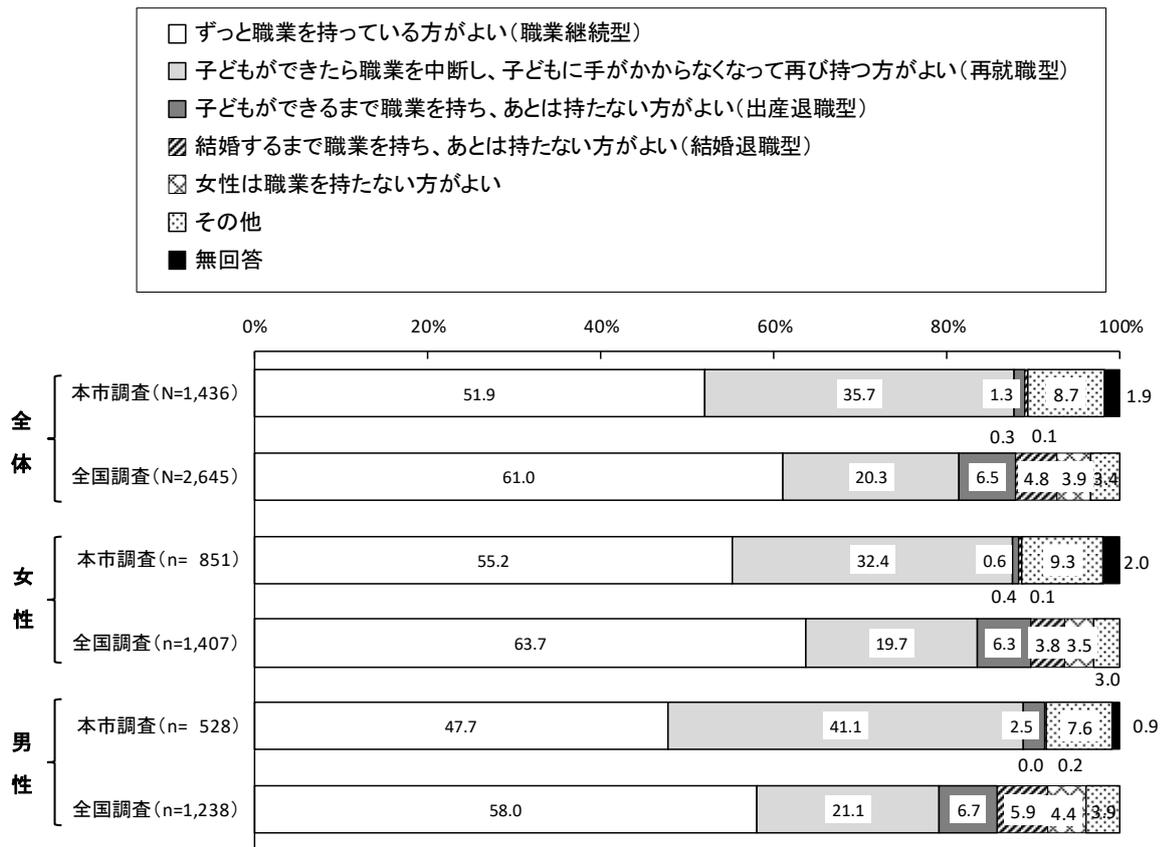
図表6-2 女性が職業を持つことへの考え方
(性別・年代別)

(単位：%)	ずっと職業を持っている方がよい (職業継続型)			子どもができたなら職業を中断し、子どもにかかからなくなって再び持つ方がよい (再就職型)			子どもができるまで職業を持ち、あとは持たない方がよい (出産退職型)			結婚するまで職業を持ち、あとは持たない方がよい (結婚退職型)		
	女性	男性	計	女性	男性	計	女性	男性	計	女性	男性	計
全体 (N=1,436) 女性 (n=851)、男性 (n=528)	55.2	47.7	51.9	32.4	41.1	35.7	0.6	2.5	1.3	0.4	-	0.3
29歳以下 (n=162) 女性 (n=88)、男性 (n=65)	51.1	49.2	49.4	39.8	36.9	37.7	1.1	-	1.2	-	-	0.6
30歳代 (n=210) 女性 (n=136)、男性 (n=72)	51.5	51.4	51.9	27.2	33.3	29.0	-	-	-	0.7	-	0.5
40歳代 (n=234) 女性 (n=152)、男性 (n=79)	59.2	49.4	55.6	27.0	39.2	31.2	-	3.8	1.3	-	-	-
50歳代 (n=285) 女性 (n=173)、男性 (n=109)	53.2	50.5	52.3	35.3	40.4	36.8	0.6	1.8	1.1	-	-	-
60歳代 (n=351) 女性 (n=206)、男性 (n=140)	66.0	44.3	56.4	26.7	47.1	35.9	1.0	2.1	1.4	-	-	-
70歳代 (n=151) 女性 (n=89)、男性 (n=60)	37.1	41.7	39.7	51.7	45.0	48.3	1.1	8.3	4.0	2.2	-	1.3

(単位：%)	女性は職業を持たない方がよい			その他			無回答		
	女性	男性	計	女性	男性	計	女性	男性	計
全体 (N=1,436) 女性 (n=851)、男性 (n=528)	0.1	0.2	0.1	9.3	7.6	8.7	2.0	0.9	1.9
29歳以下 (n=162) 女性 (n=88)、男性 (n=65)	-	-	-	6.8	12.3	9.9	1.1	1.5	1.2
30歳代 (n=210) 女性 (n=136)、男性 (n=72)	0.7	1.4	1.0	17.6	12.5	15.7	2.2	1.4	1.9
40歳代 (n=234) 女性 (n=152)、男性 (n=79)	-	-	-	13.8	7.6	11.5	-	-	0.4
50歳代 (n=285) 女性 (n=173)、男性 (n=109)	-	-	-	8.7	7.3	8.1	2.3	-	1.8
60歳代 (n=351) 女性 (n=206)、男性 (n=140)	-	-	-	3.9	5.7	4.6	2.4	0.7	1.7
70歳代 (n=151) 女性 (n=89)、男性 (n=60)	-	-	-	4.5	1.7	3.3	3.4	3.3	3.3

性別・年代別で見ると、女性は29歳以下から60歳代までは「職業継続型」が最も高く50%を超えている。男性は、29歳以下から50歳代までは「職業継続型」が最も高く、60歳以上は「再就職型」が高くなっている。

図表6-3 女性が職業を持つことへの考え方
(全国比較・性別)

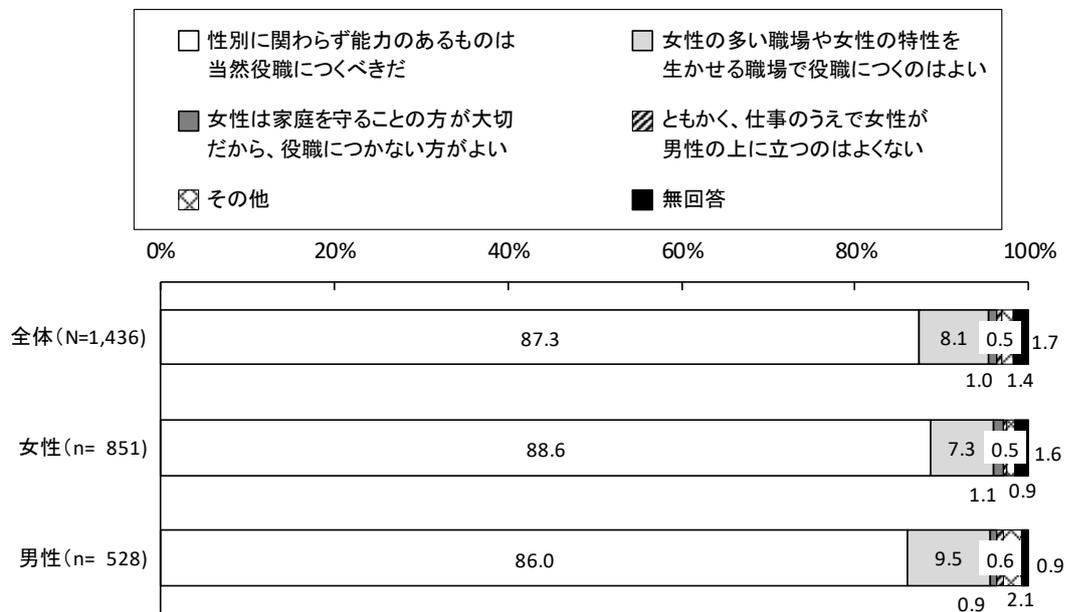


全国調査と比較すると、男女ともに「職業継続型」の割合は低く、「再就職型」の割合が高くなっている。

(2) 女性が職場で役職につくことへの考え方 (問7)

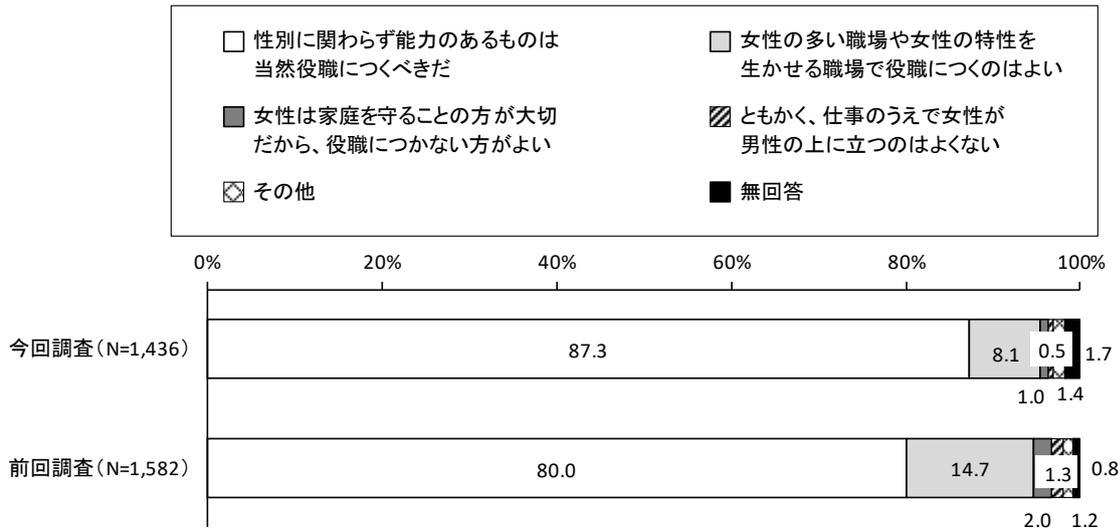
問7 あなたは職場で「女性が役職につくこと」をどう思いますか。(1つ選択)

図表7-1 女性が職場で役職につくことへの考え方
(全体・性別)



職場で女性が役職につくことへの考え方では、「性別に関わらず能力のあるものは当然役職につくべきだ」の割合が87.3%となっている。性別でも大きな差はみられない。

図表7-2 女性が職場で役職につくことへの考え方
(前回比較)

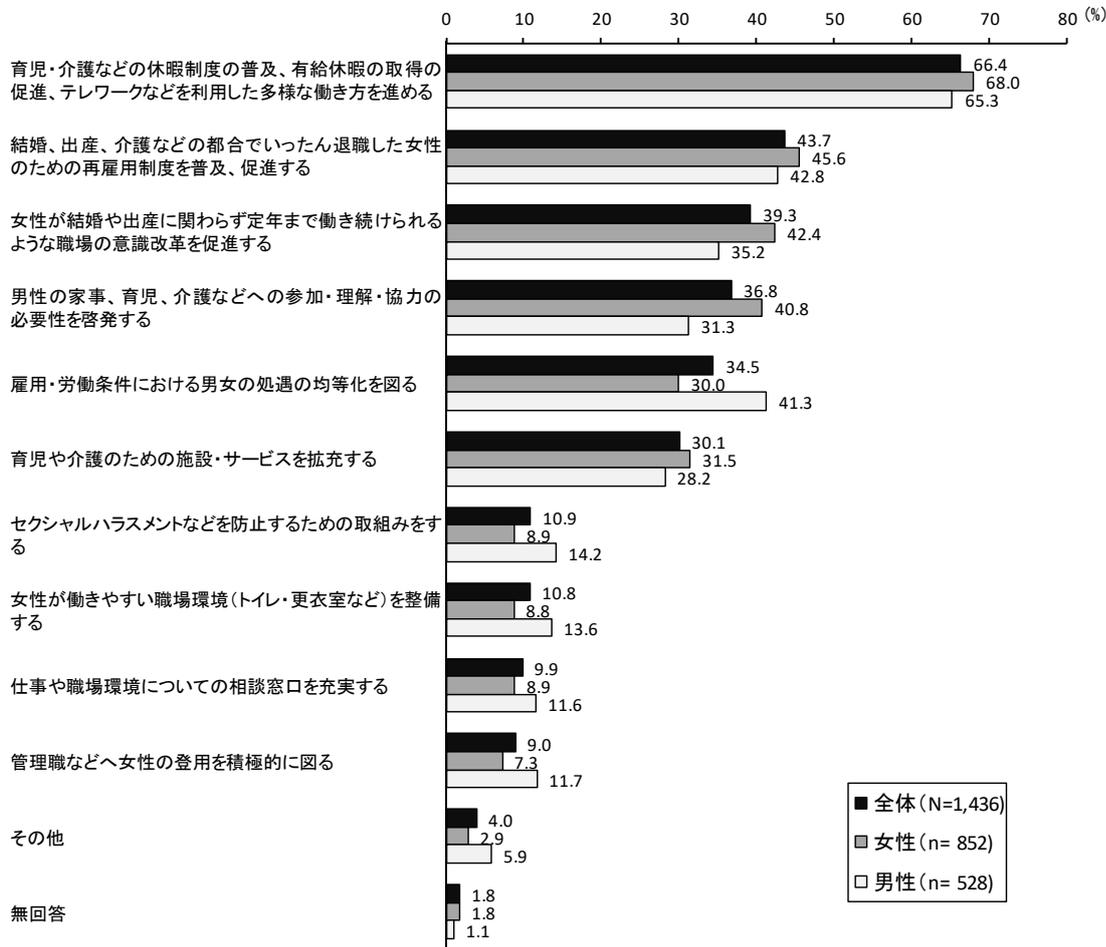


前回調査と比較すると、「性別に関わらず能力のあるものは当然役職につくべきだ」の割合は 7.3 ポイント増加している。

(3) 男女がともに働きやすい職場をつくるために必要なこと (問8)

問8 男女がともに働きやすい職場をつくるためには、どのようなことが必要だと思いますか。
(3つまで選択)

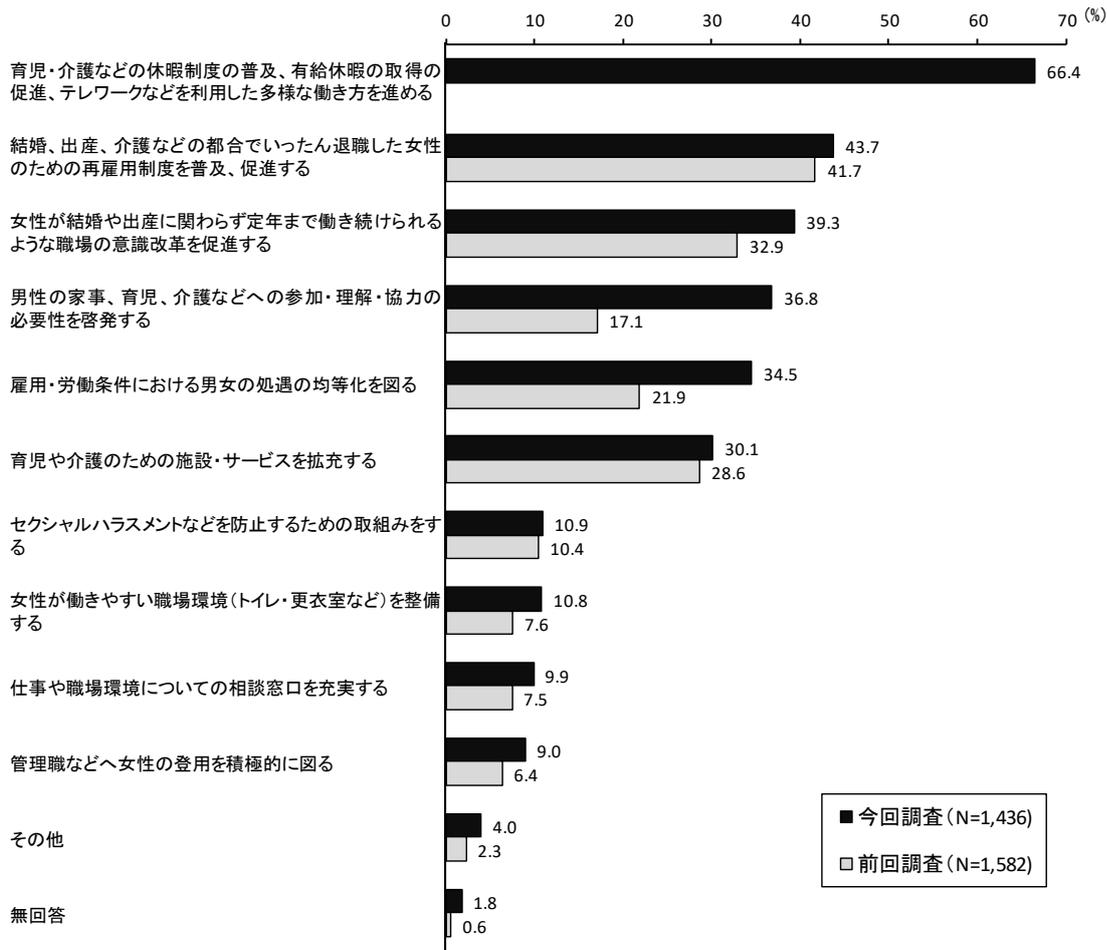
図表8-1 男女がともに働きやすい職場をつくるために必要なこと
(全体結果・性別)



男女がともに働きやすい職場をつくるために必要なことについては、「育児・介護などの休暇制度の普及、有給休暇の取得の促進、テレワークなどを利用した多様な働き方を進める」(66.4%)が最も高い。

性別でみると、「雇用・労働条件における男女の処遇の均等化を図る」(女性 30.0%、男性 41.3%、11.3ポイント差)、「男性の家事、育児、介護などへの参加・理解・協力の必要性を啓発する」(女性 40.8%、男性 31.3%、9.5ポイント差)、「女性が結婚や出産に関わらず定年まで働き続けられるような職場の意識改革を促進する」(女性 42.4%、男性 35.2%、7.2ポイント差)について男女差がみられる。

図表8-2 男女がともに働きやすい職場をつくるために必要なこと
(全体結果・前回比較)

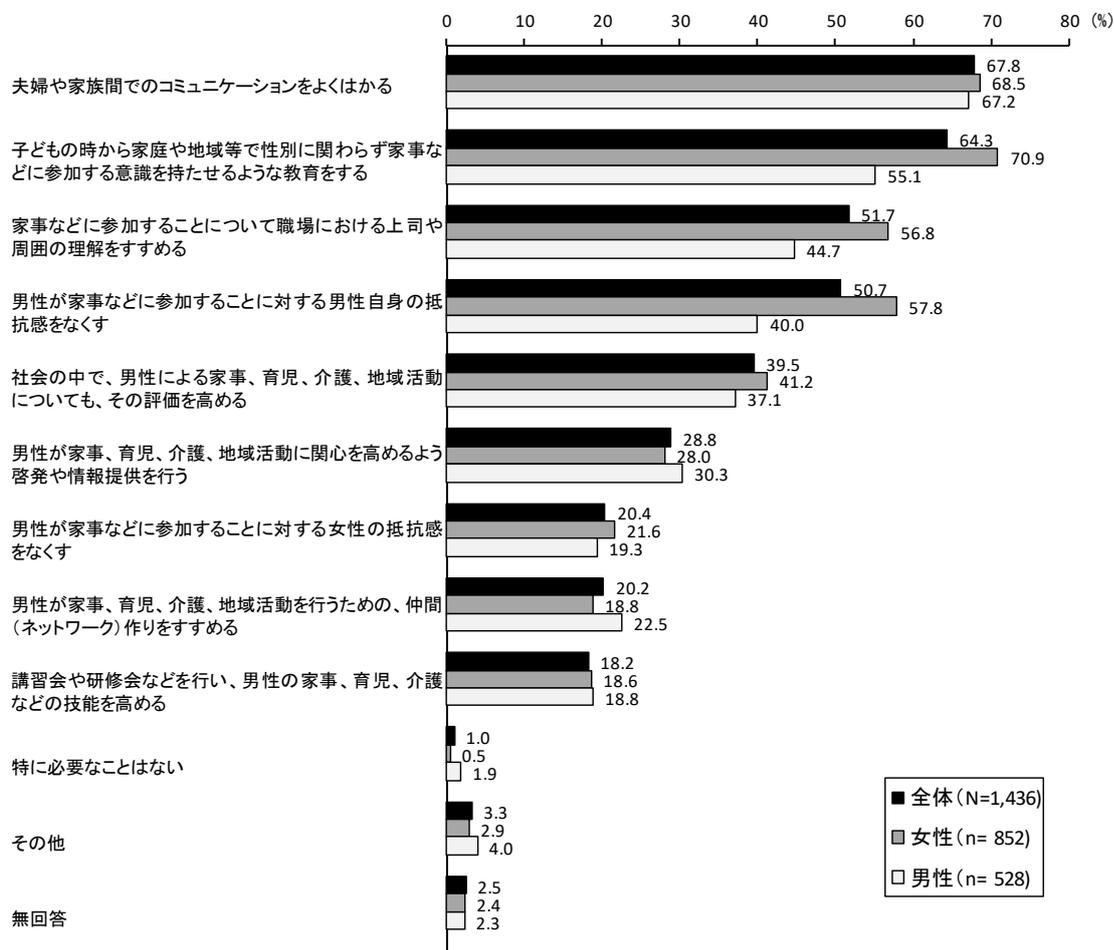


前回調査と比較すると、「男性の家事、育児、介護などへの参加・理解・協力の必要性を啓発する」(19.7ポイント上昇)、「雇用・労働条件における男女の処遇の均等化を図る」(12.6ポイント上昇)の回答割合が増加している。

(4) 男性が家事、育児、介護、地域活動に積極的に参加するための条件整備 (問9)

問9 今後、男性が家事、育児、介護、地域活動に積極的に参加していくために必要なことは何だと思いますか。(あてはまるもの全て選択)

図表9-1 男性が家事、育児、介護、地域活動に積極的に参加するための条件整備
(全体結果・性別)



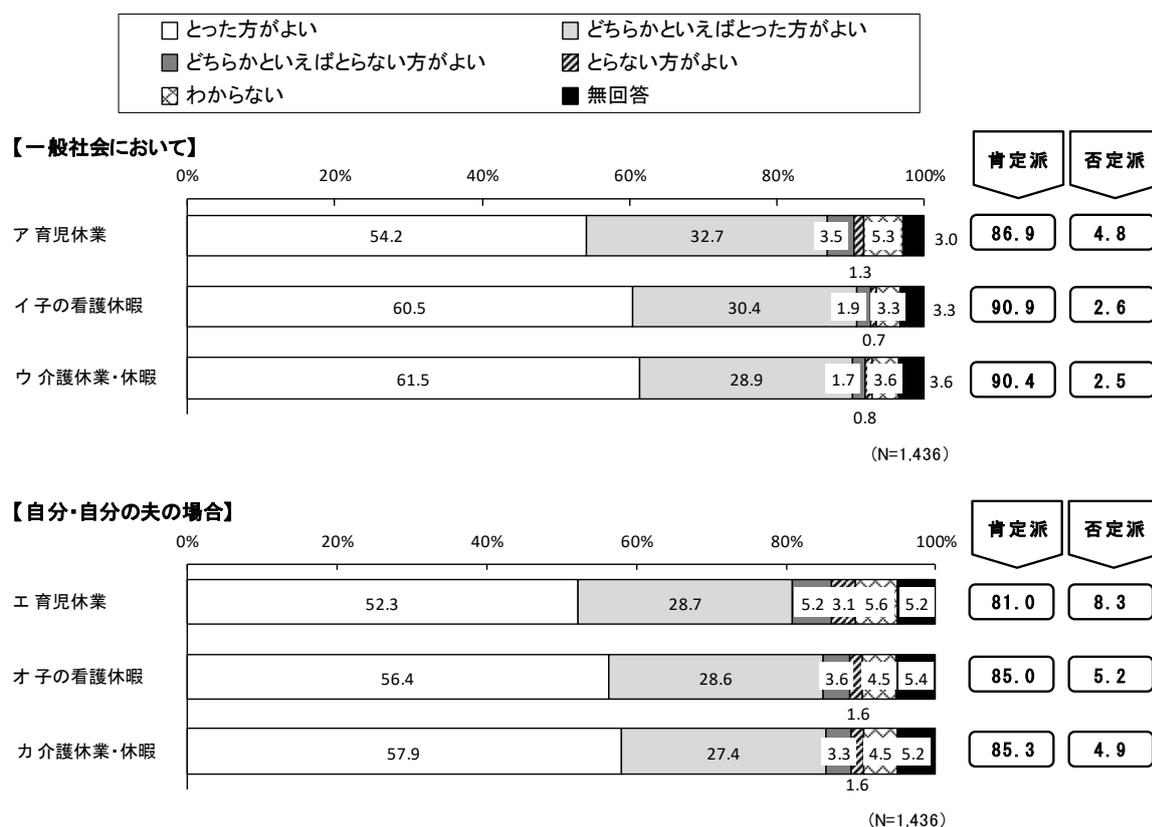
男性が家事、育児、介護、地域活動に積極的に参加していくための条件整備では、「夫婦や家族間でのコミュニケーションをよくはかる」の割合が67.8%で最も高い。

性別で見ると、「男性が家事などに参加することに対する男性自身の抵抗感をなくす」(女性 57.8%、男性 40.0%、17.8ポイント差)、「子どもの時から家庭や地域等で性別に関わらず家事などに参加する意識を持たせるような教育をする」(女性 70.9%、男性 55.1%、15.8ポイント差)、「家事などに参加することについて職場における上司や周囲の理解をすすめる」(女性 56.8%、男性 44.7%、12.1ポイント差)について男女差がみられる。

(5) 男性の育休・介護休暇の取得 (問10・問11)

問10 育児や家族の介護などを行うために、法律に基づき育児休業・子の看護休暇・介護休業・介護休暇などの制度があります。
 あなたは男性が以下の制度を取得することについてどう思いますか。(ア～カのそれぞれについて、あてはまるものを1つ選択)

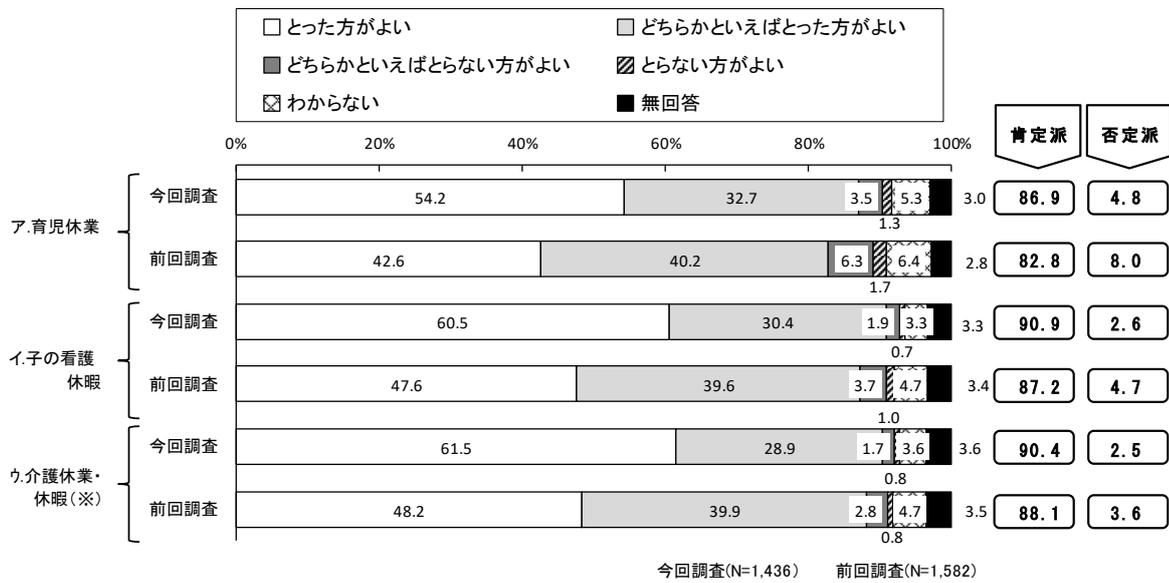
図表10-1 男性の育休・介護休暇の取得
(全体結果)



男性が育児休業、子の看護休暇、介護休業・休暇を取得することについて、「一般社会」においては、約9割が肯定派（「とった方がよい」と「どちらかといえばとった方がよい」の合計）となっており、「自分・自分の夫の場合」では、8割以上が肯定派となっている。

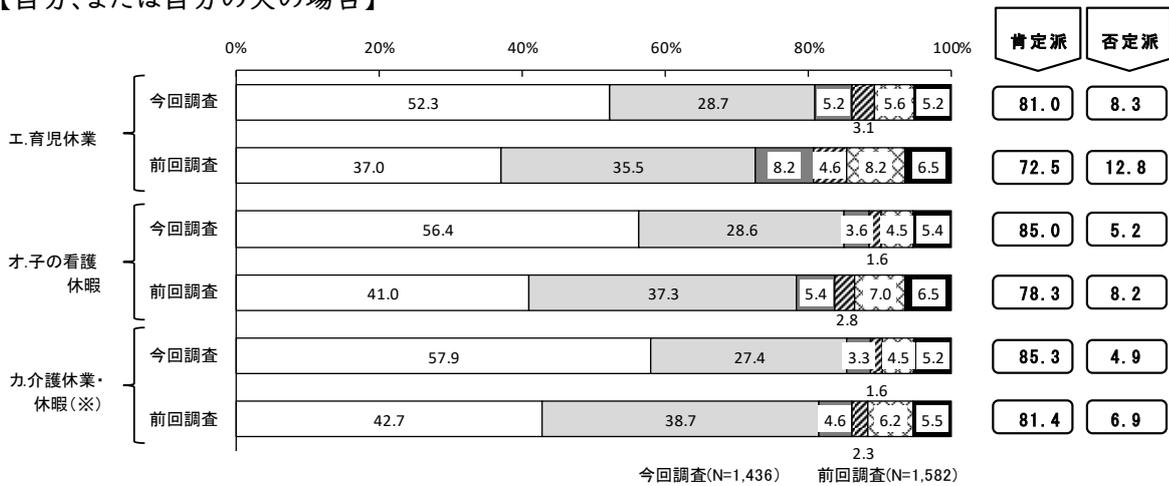
図表10-2 男性の育休・介護休暇の取得
(前回比較)

【一般社会において】



(※) ウ 介護休業・休暇の前回の値は「介護休暇のみ」の値、「介護休業」は含んでいない。

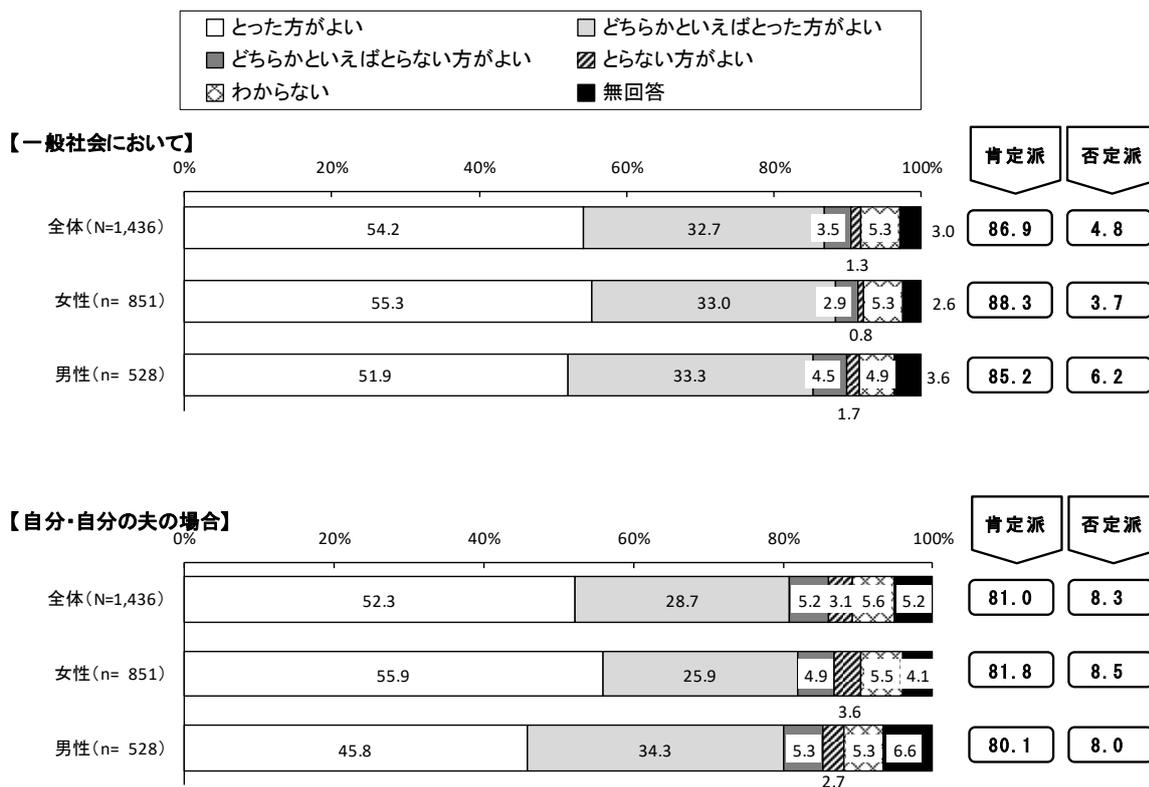
【自分、または自分の夫の場合】



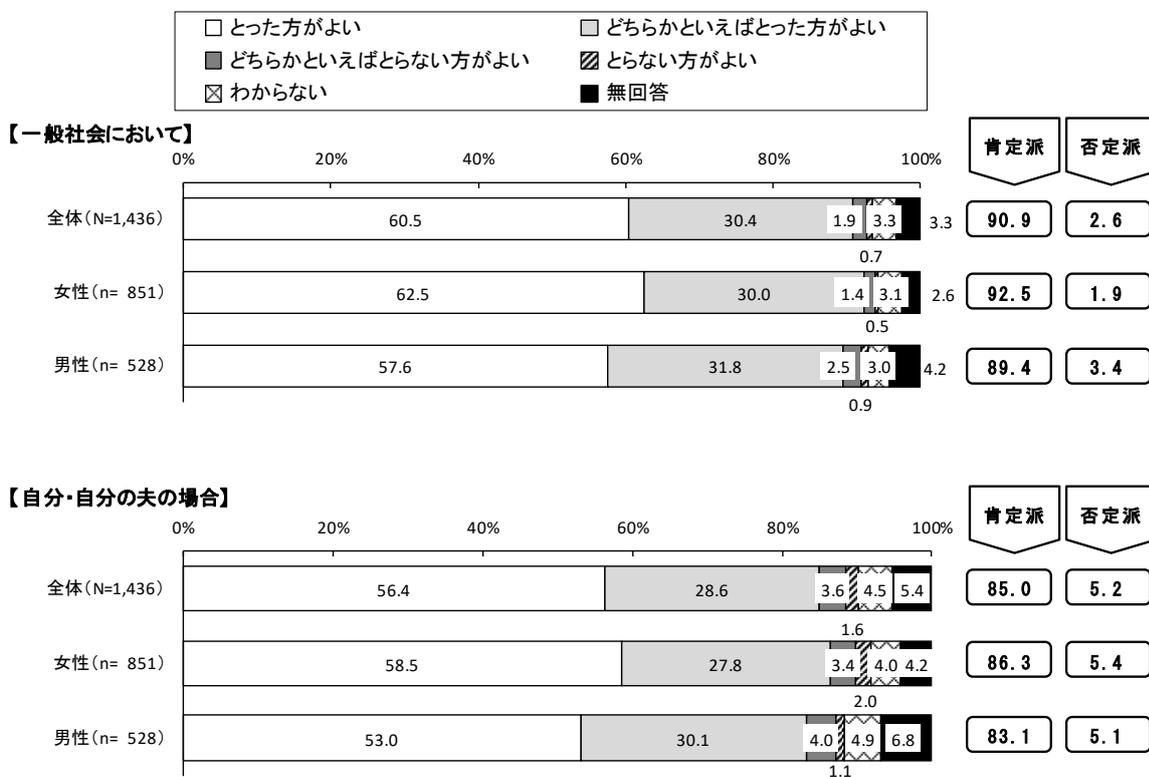
(※) カ 介護休業・休暇の前回の値は「介護休暇のみ」の値、「介護休業」は含んでいない。

前回調査と比較すると、「一般社会において」、「自分・自分の夫の場合」におけるいずれの項目でも、肯定派の割合が増加している。

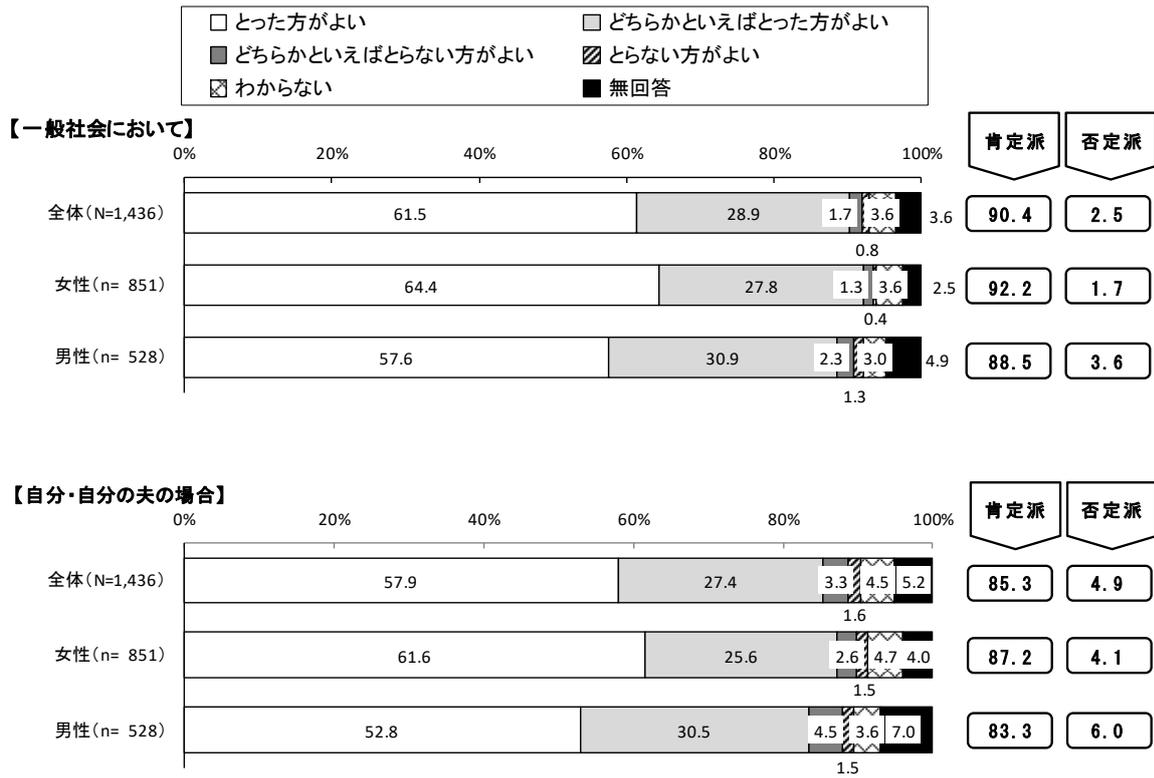
図表10-3 男性の育休・介護休暇の取得
(育児休業・性別)



図表10-4 男性の育休・介護休暇の取得
(子の看護休暇・性別)



図表10-5 男性の育休・介護休暇の取得
(介護休業・休暇・性別)

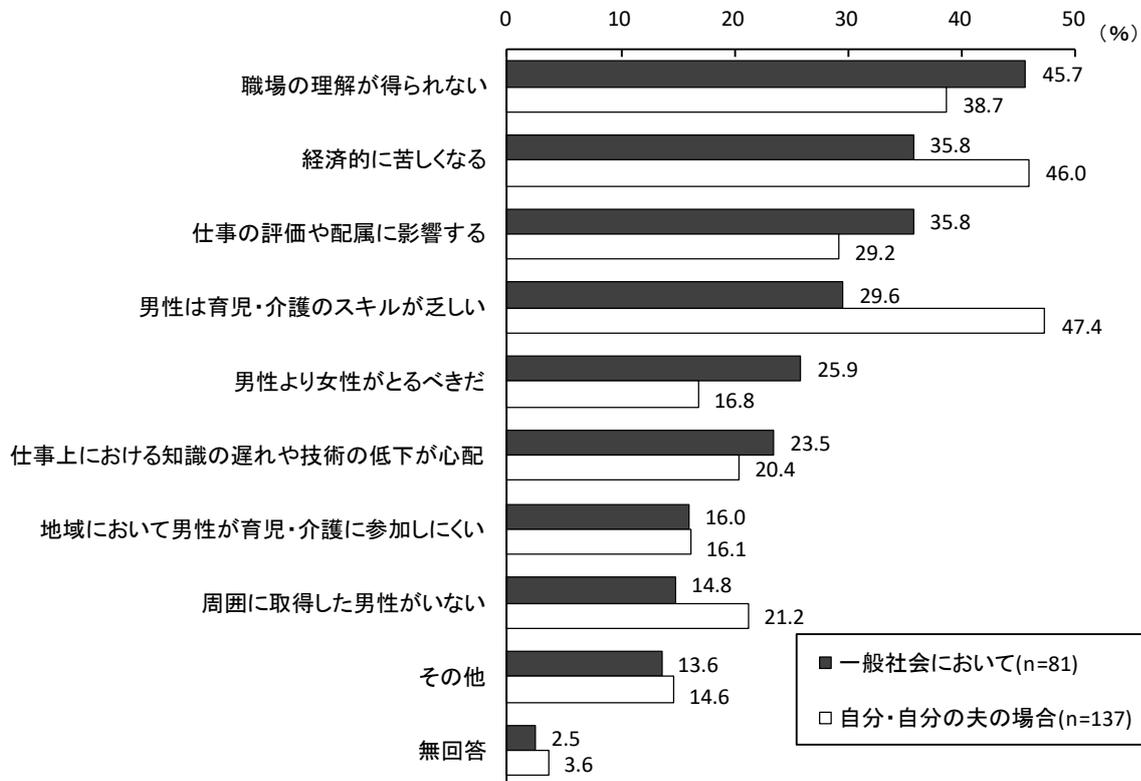


性別で見ると、すべての項目で男女ともに肯定派が8割を超えているが、女性の方が肯定派の割合が高い。

【問10のそれぞれの項目のうち、ひとつでも「3.どちらかといえばとらない方がよい」「4.とらない方がよい」と回答された方にお尋ねします】

問11 そう答えるのはどのような理由ですか。「一般社会において」、「自分、または自分の夫の場合」のそれぞれについてお答えください(あてはまるもの全て選択)

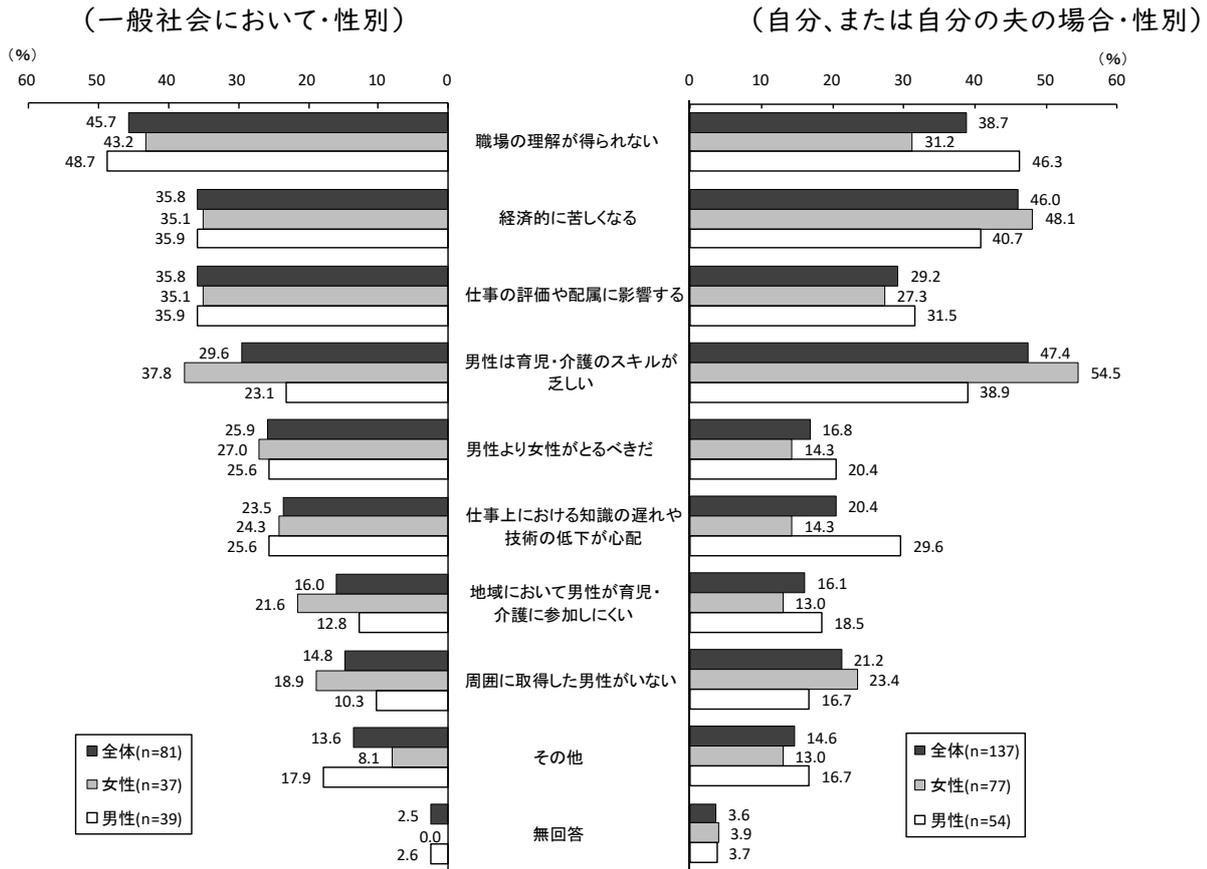
図表11-1 男性が育休や介護休暇をとらない方がよい理由
(全体結果)



問10で「とらない方がよい」または「どちらかといえばとらない方がよい」と回答した人に対し、その理由を尋ねたところ、「一般社会において」では、「職場の理解が得られない」(45.7%)が最も高くなっている。

一方、「自分・自分の夫の場合」では、「男性は育児・介護のスキルが乏しい」(47.4%)が最も高くなっている。

図表11-2 男性が休業や休暇をとらない方がよい理由

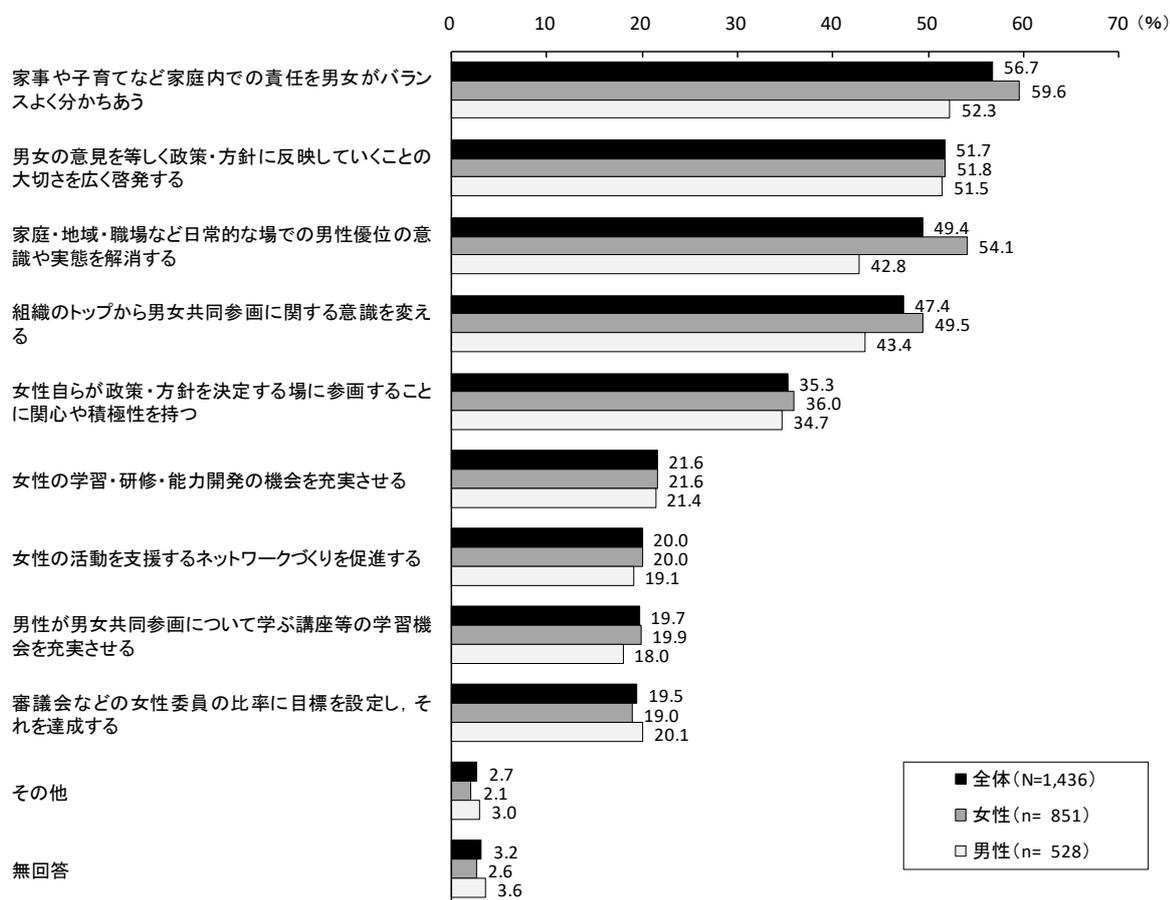


性別で見ると、「一般社会において」「自分または自分の夫の場合」いずれの場合も、「男性は育児・介護のスキルが乏しい」について、男女差が大きい。また、「自分または自分の夫の場合」については、「職場の理解が得られない」（男性 46.3%）、「仕事上における知識の遅れや技術の低下が心配」（男性 29.6%）について、男性の回答割合が高くなっている。

(6) 政策・方針を決定する場に女性が進出するために必要なこと (問12)

問12 あなたは、議員や企業の管理職などの政策・方針を決定する場に女性が進出していくために、どのようなことが必要だと思いますか。(あてはまるもの全て選択)

図表12-1 政策・方針を決定する場に女性が進出するために必要なこと
(全体・性別)



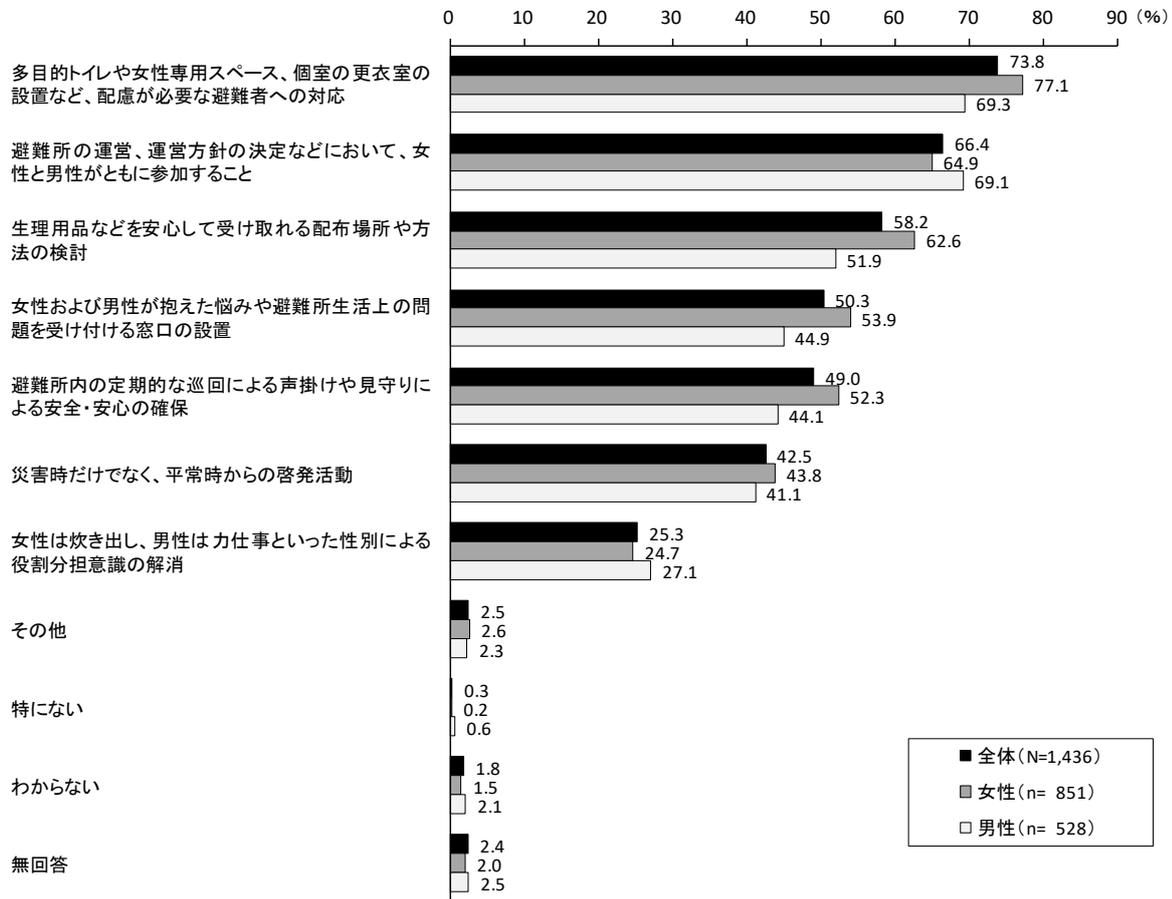
「家事や子育てなど家庭内での責任を男女がバランスよく分かちあう」(56.7%)が最も高く、次いで「男女の意見を等しく政策・方針に反映していくことの大切さを広く啓発する」(51.7%)、「家庭・地域・職場など日常的な場での男性優位の意識や実態を解消する」(49.4%)となっている。

性別で見ると、「家庭・地域・職場など日常的な場での男性優位の意識や実態を解消する」(女性 54.1%、男性 42.8%、11.3ポイント差)などに男女差がみられる。

(7) 災害時の避難所運営について (問 13)

問13 地域の防災についてお尋ねします。災害時の避難所運営について、あなたはどのようなことが必要だと思いますか。(あてはまるもの全て選択)

図表13-1 災害時の避難所運営について
(全体・性別)



「多目的トイレや女性専用スペース、個室の更衣室の設置など、配慮が必要な避難者への対応」(73.8%)の割合が最も高くなっている。

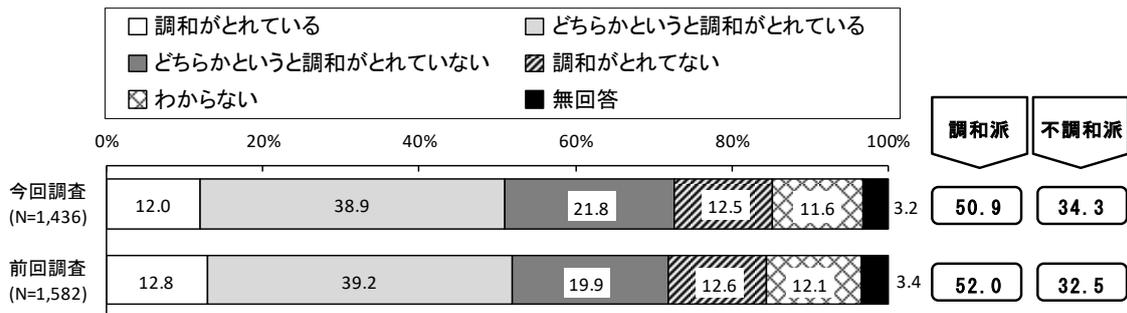
性別で見ると、いずれの項目も同順位であり、男女の差はみられない。

3 ワーク・ライフ・バランスについて

(1) ワーク・ライフ・バランスに関する現状認識 (問14)

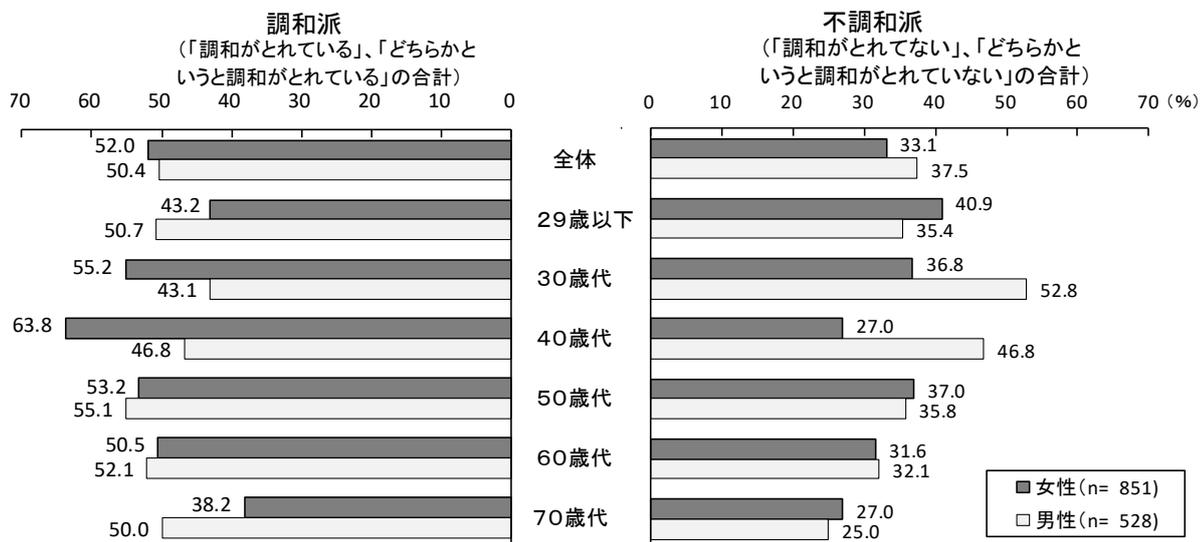
問14 あなたは、「ワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)」がとれていると思いますか。(1つ選択)

図表14-1 ワーク・ライフ・バランスに関する現状認識
(全体結果・前回比較)



ワーク・ライフ・バランスについて、調和派(「調和がとれている」「どちらかという調和がとれている」の合計)の割合が50.9%と、前回調査(52.0%)よりやや低くなっている。

図表14-2 ワーク・ライフ・バランスに関する現状認識
(性別・年代別)

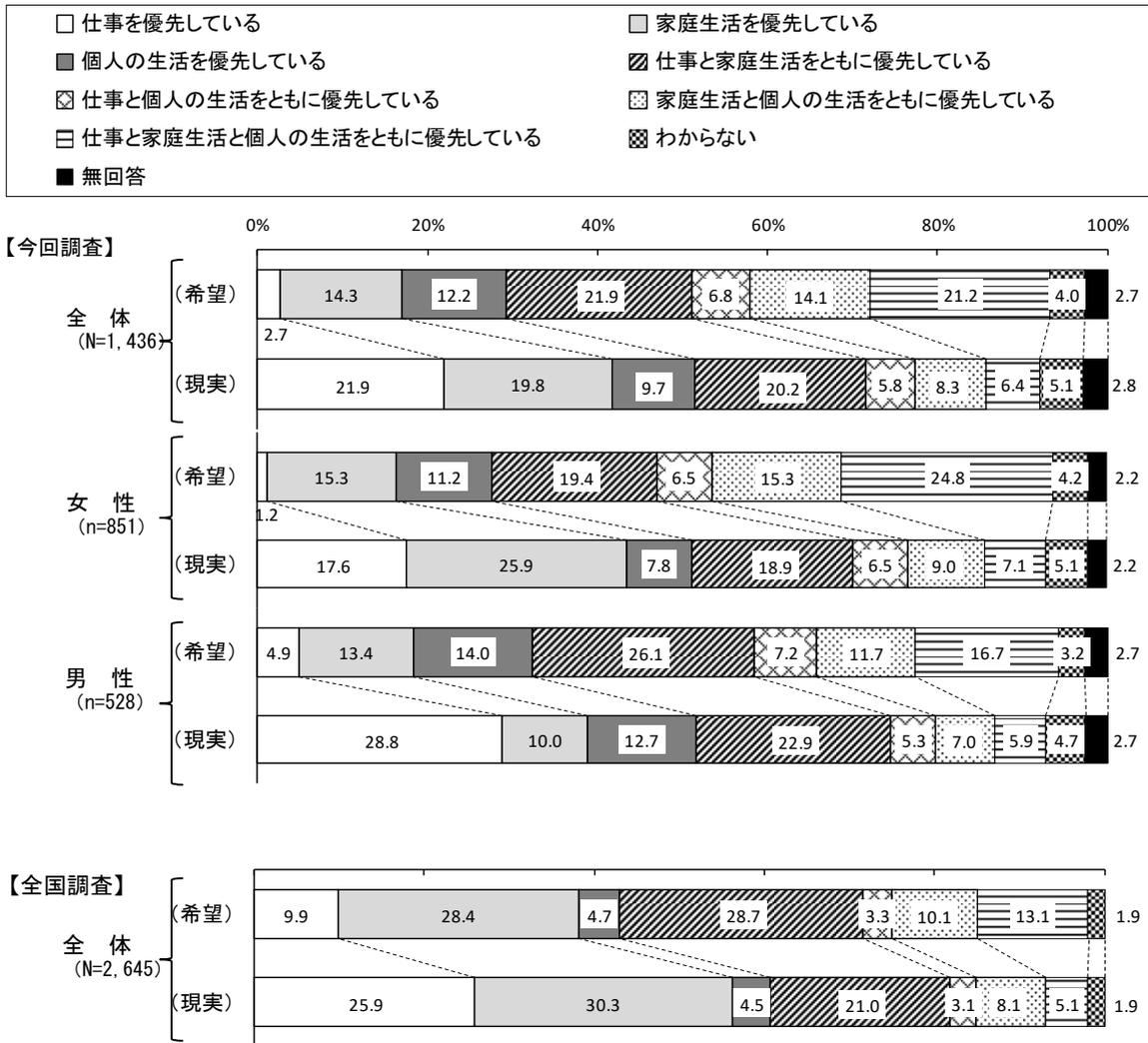


性別・年代別で見ると、調和派の割合が高いのは女性30歳代(55.2%)、40歳代(63.8%)であるのに対し、不調和派の割合が高いのは、男性30歳代(52.8%)、40歳代(46.8%)と、同年代での男女差が大きくなっている。

(2) 仕事、家庭生活、個人の生活の優先度（希望と現実）（問15・問16）

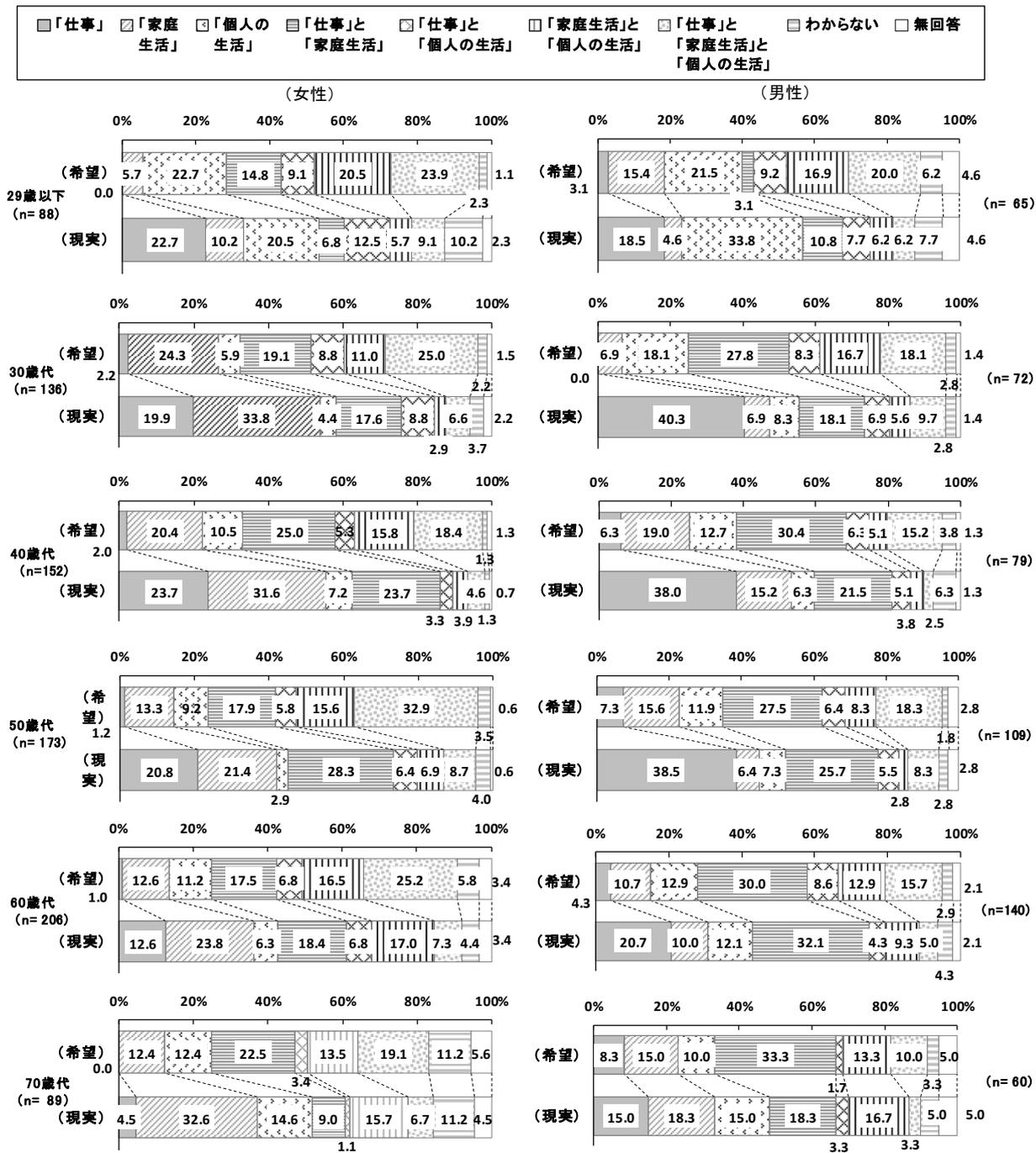
問15 生活の中での「仕事」「家庭生活」「個人の生活（地域活動・学習・趣味・付き合いなど）」の優先度について、あなたの希望に最も近いものはどれですか。（1つ選択）
 問16 あなたの現実（現状）に最も近いものはどれですか。（1つ選択）

図表15-1 仕事、家庭生活、個人の生活の優先度（希望と現実）
 （全体・性別・全国比較）



男女ともに、「仕事優先」を希望する割合は低いですが、現実には「仕事優先」となっている割合が高い。また、男女ともに「仕事と家庭生活と個人の生活をともに優先」する希望が高いのに対し、現実には実践できている割合は低い。全国調査と比較すると、割合の差はあるが、全体的な傾向は変わらない。

図表15-2 仕事、家庭生活、個人の生活の優先度（希望と現実）
（性別・年代別）



どの性別・年代別においても、希望と現実の乖離が大きいのは「仕事を優先」となっている。

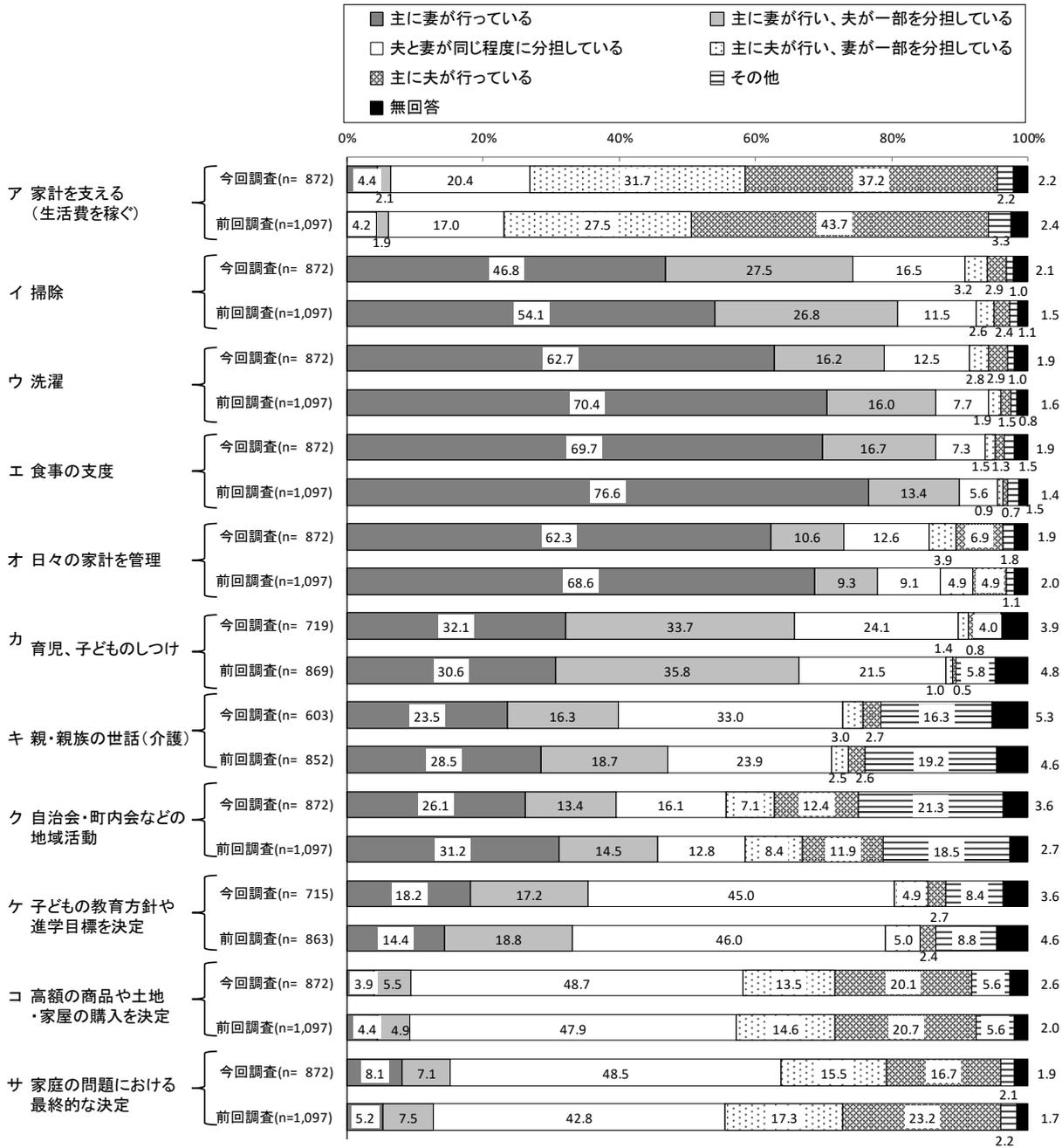
特に顕著なのは、女性の29歳以下（22.7ポイント差）、40歳代（21.7ポイント差）、50歳代（19.6ポイント差）、男性の30歳代（40.3ポイント差）、40歳代（31.7ポイント差）、50歳代（31.2ポイント差）であり、女性と比べて男性の乖離が大きい。

(3) 家庭内の仕事の分担 (問17)

【配偶者(事実婚を含む)のいらっしゃる方にお尋ねします】

問17 あなたのご家庭では、次の家庭内の仕事を、主にどなたが担当していますか。
(ア～サのそれぞれについて、あてはまるものを1つ選択)

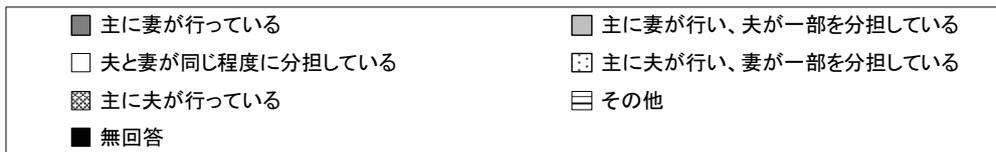
図表17-1 家庭内の仕事の分担
(全体結果・前回比較)



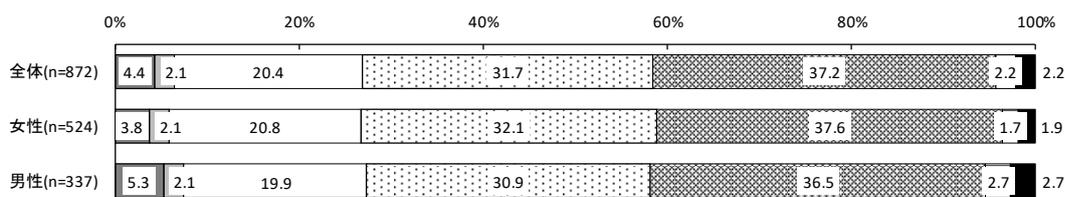
「主に夫が行っている」割合が高いのは、「家計を支える(生活費を稼ぐ)」(37.2%)となっている。

一方、「主に妻が行っている」割合が高いのは、「食事の支度」(69.7%)、「洗濯」(62.7%)、「日々の家計管理」(62.3%)、「掃除」(46.8%)、「育児、子どものしつけ」(32.1%)、「自治会・町内会などの地域活動」(26.1%)であるが、前回調査と比較すると割合は減少傾向にある。

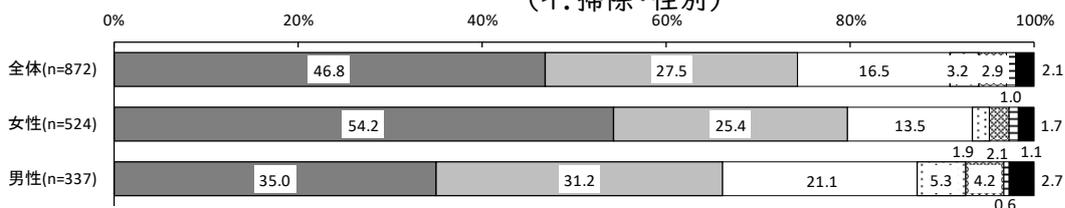
また、「夫と妻が同じ程度に分担している」割合が高いのは、「高額の商品や土地・家屋の購入を決定」(48.7%)、「家庭の問題における最終的な決定」(48.5%)、「子どもの教育方針や進学目標を決定」(45.0%)といった、意思決定に関する項目となっている。



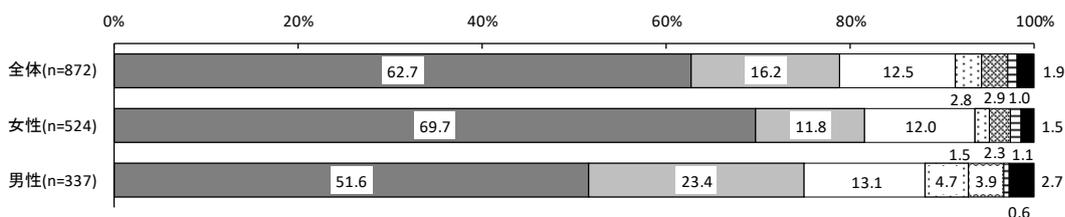
図表17-2 家庭内の仕事の分担
(ア. 家計を支える(生活費を稼ぐ)・性別)



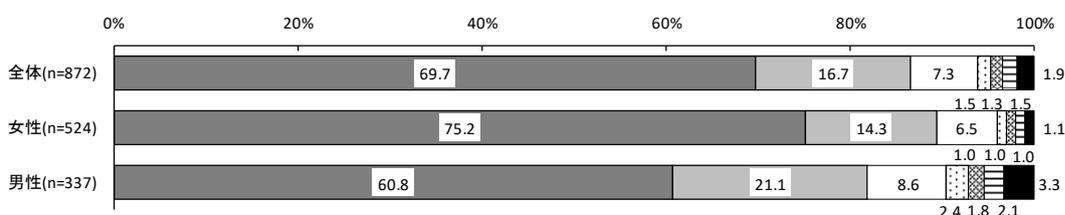
図表17-3 家庭内の仕事の分担
(イ. 掃除・性別)

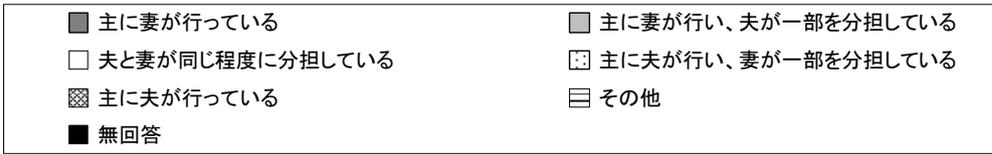


図表17-4 家庭内の仕事の分担
(ウ. 洗濯・性別)

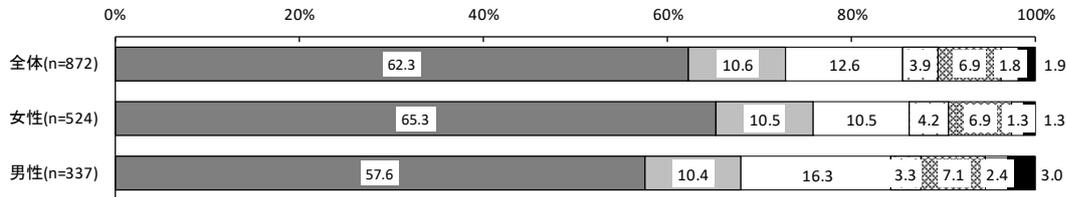


図表17-5 家庭内の仕事の分担
(エ. 食事の支度・性別)

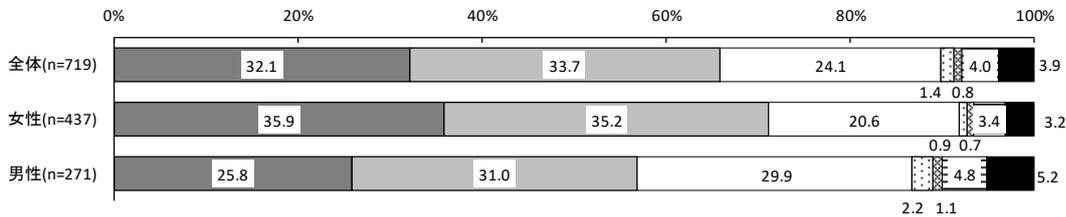




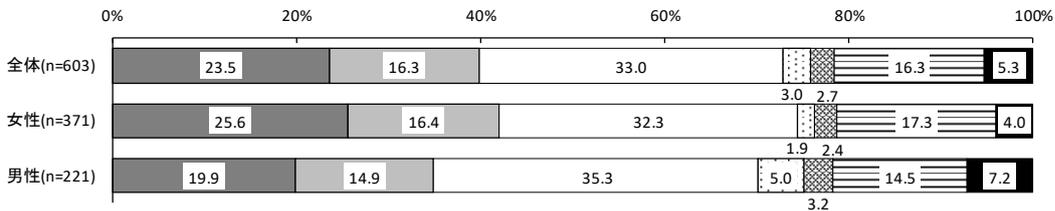
図表17-6 家庭内の仕事の分担
(オ. 日々の家計を管理・性別)



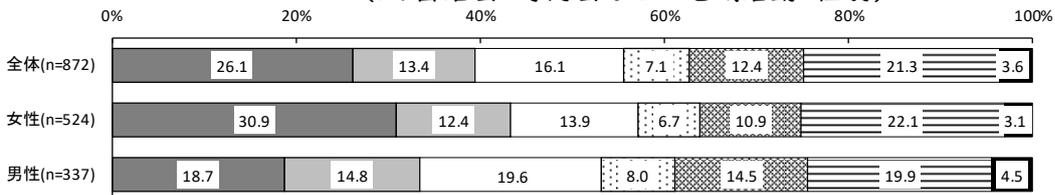
図表17-7 家庭内の仕事の分担
(カ. 育児、子どものしつけ・性別)



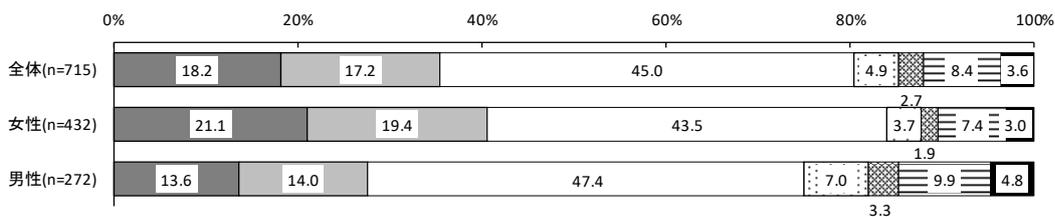
図表17-8 家庭内の仕事の分担
(キ. 親・親族の世話(介護)・性別)

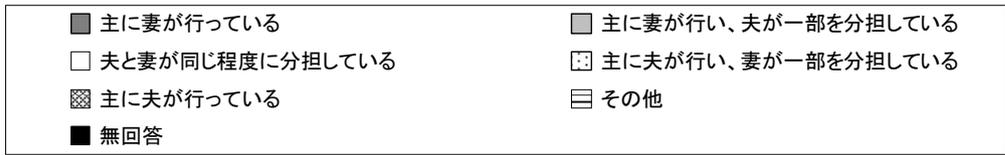


図表17-9 家庭内の仕事の分担
(ク. 自治会・町内会などの地域活動・性別)

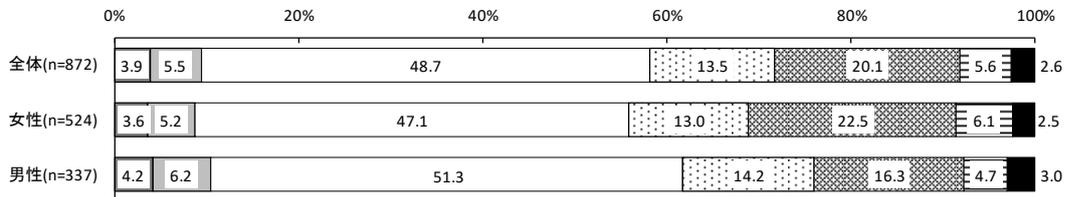


図表17-10 家庭内の仕事の分担
(ケ. 子どもの教育方針や進学目標を決定・性別)

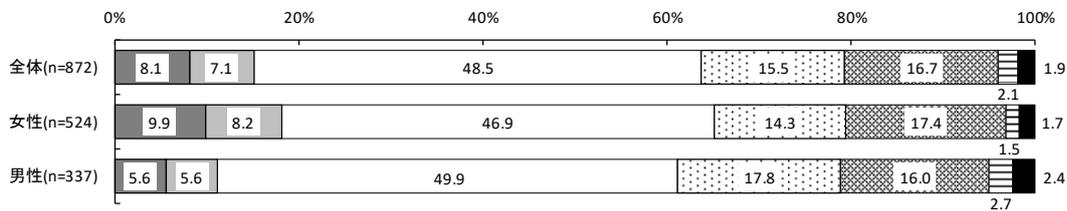




図表17-11 家庭内の仕事の分担
(コ. 高額な商品や土地・家屋の購入を決定・性別)



図表17-12 家庭内の仕事の分担
(サ. 家庭の問題における最終的な決定・性別)

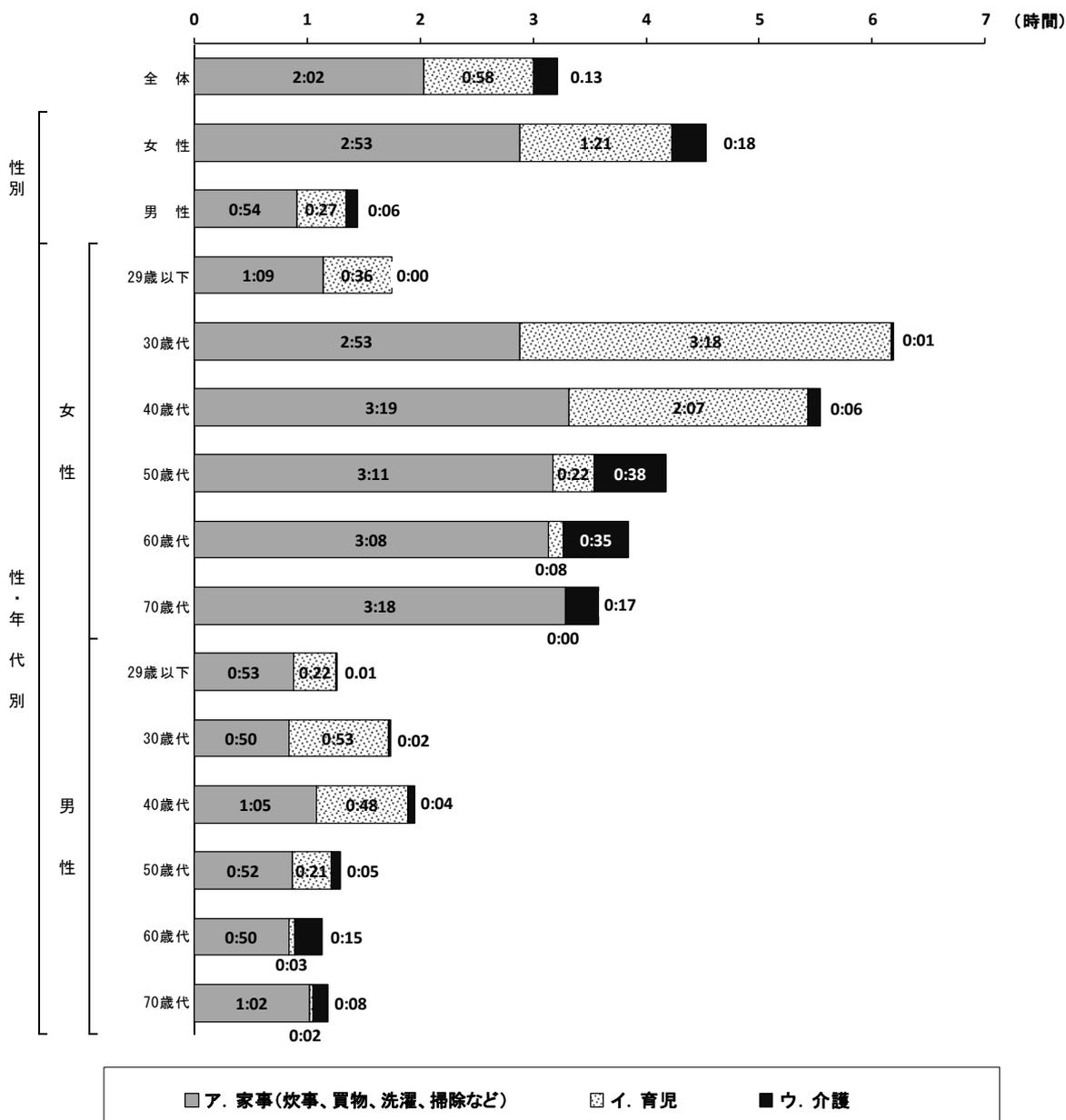


性別でみると、家庭内の仕事11項目のうち、「家計を支える(生活費を稼ぐ)」、「高額の商品や土地・家屋の購入を決定」を除く9項目について、「主に妻が行っている」と回答した割合は、男性より女性のほうが高い。

(4) 1日に費やしている家事・育児・介護の平均時間(問18・問19)

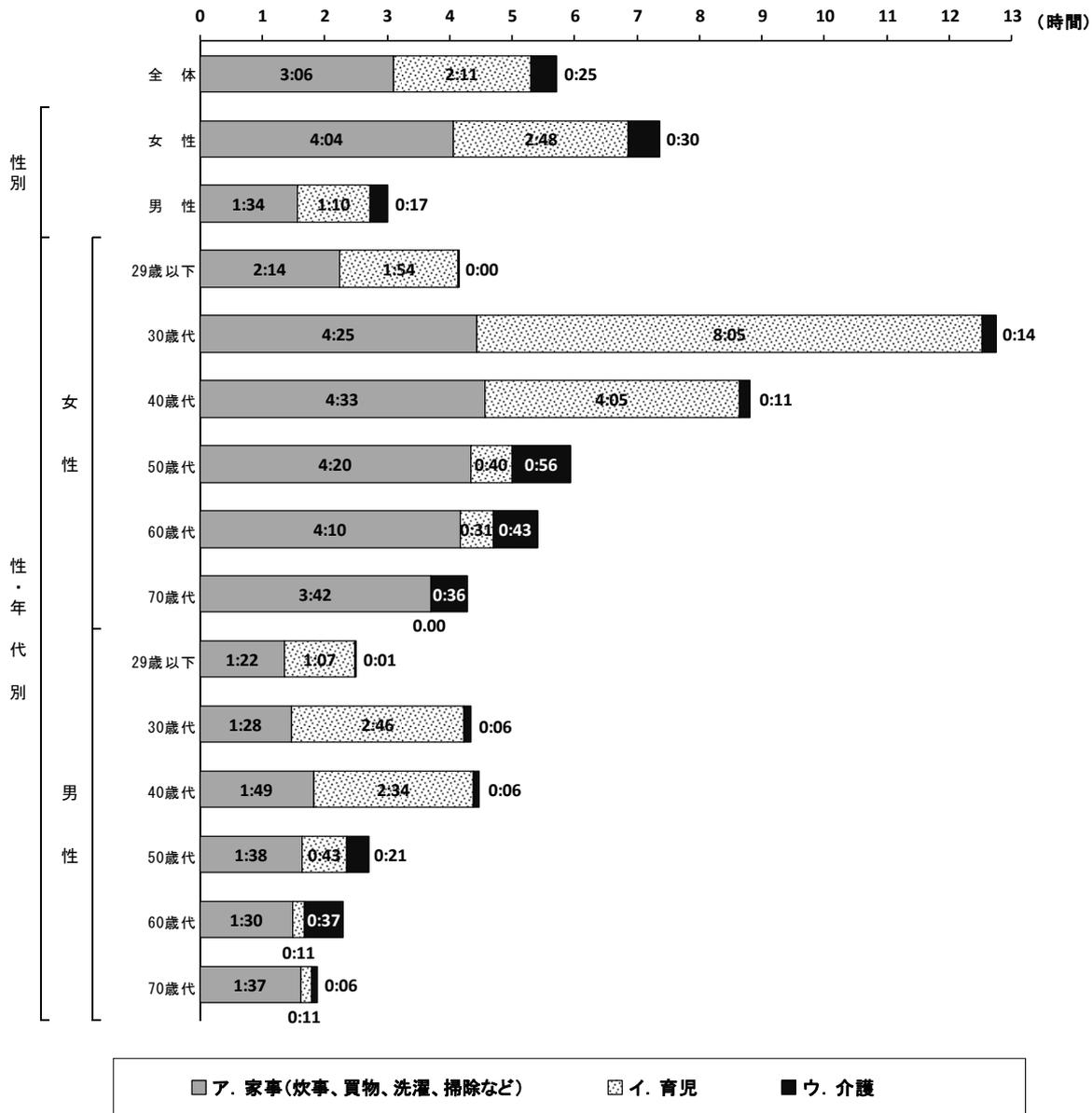
問18 あなたは平均的な1日において、下記 ア～ウのそれぞれにどの程度の時間を費やしているかお答えください。枠内におよその時間を数字でご記入ください。
 全くしていない場合は「0」と記入してください。
 仕事や学校に行っている方は、ある日とない日の両方に記入してください。
 仕事や学校に行っていない方は、ない日のみに記入してください。

図表18-1 1日に費やしている家事・育児・介護の平均時間
 【仕事や学校のある日(平日)】
 (全体・性別・年代別)



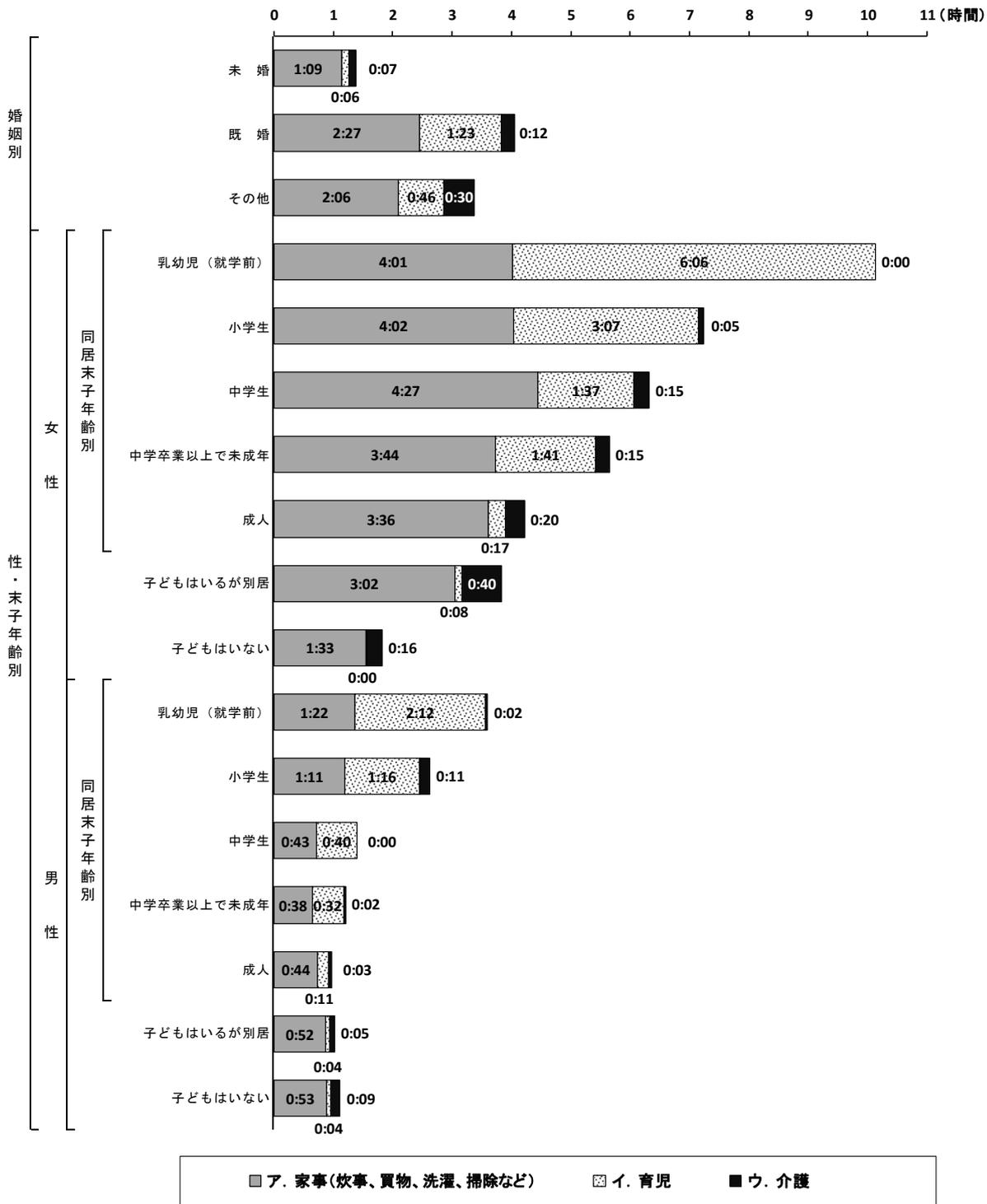
仕事や学校のある日(平日)の生活時間を性別で見ると、「家事(炊事、買物、洗濯、掃除など)」に費やす時間は、女性が2時間53分、男性が54分と女性が1時間59分長く、「育児」に費やす時間は女性が1時間21分、男性が27分と女性が54分長くなっている。

図表18-2 1日に費やしている家事・育児・介護の平均時間
 【休みの日・仕事や学校のない日(休日)】
 (全体・性別・年代別)



休みの日・仕事や学校のない日(休日)の生活時間を性別で見ると、「家事」に費やす時間は、女性が4時間4分、男性が1時間34分と女性が2時間30分長く、「育児」に費やす時間は女性が2時間48分、男性が1時間10分と女性が1時間38分長くなっている。女性、男性ともに「家事」、「育児」に費やす時間は、平日より休日が長くなっている。

図表18-3 1日に費やしている家事・育児・介護の平均時間
【仕事や学校のある日(平日)】
(性別・末子年齢別)

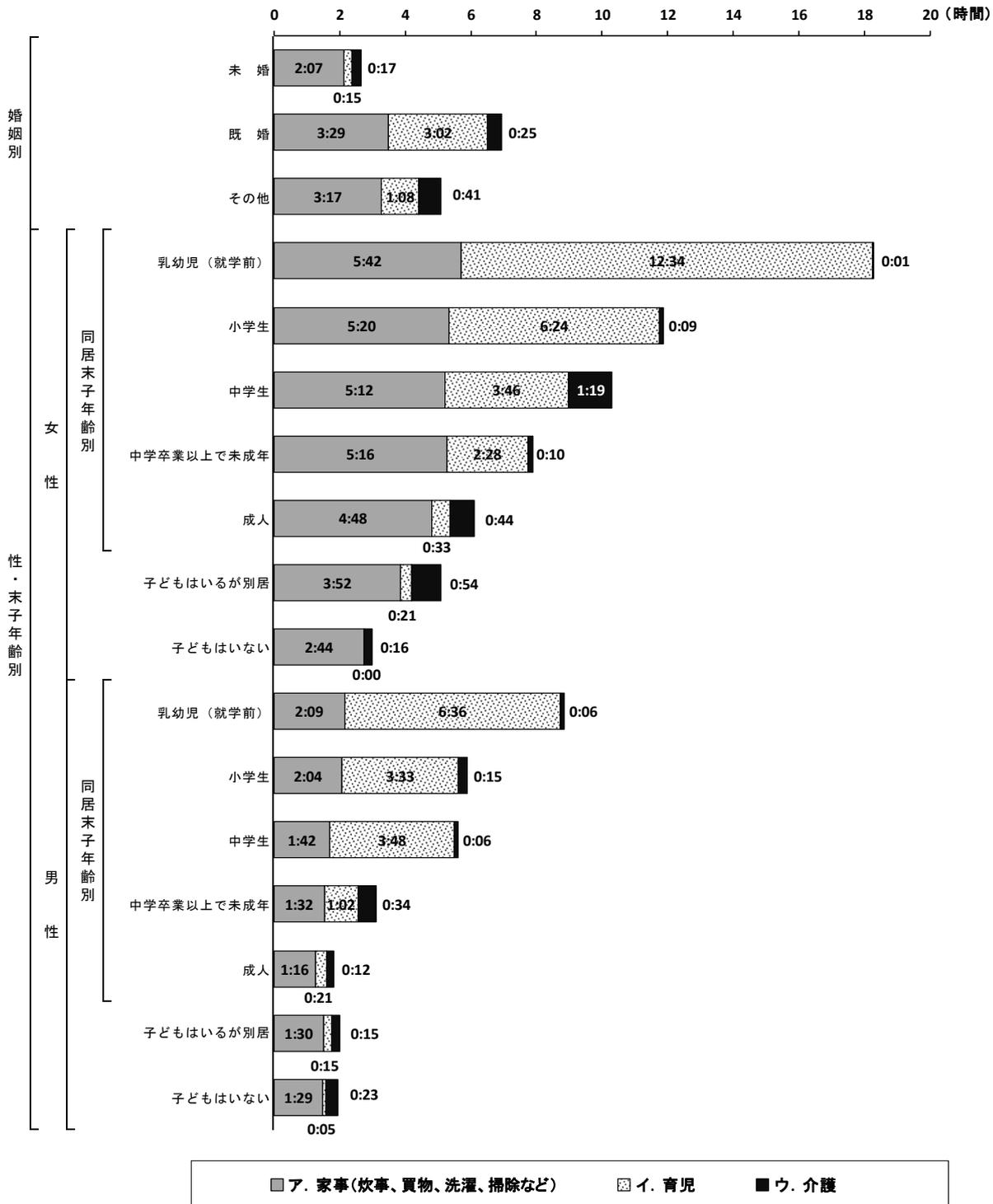


仕事や学校のある日(平日)の生活時間を性別・末子年齢別にみると、「乳幼児(就学前)」を持つ家庭では、男性の「家事」が1時間22分、「育児」が2時間12分となっているのに対し、女性の「家事」は4時間01分、「育児」は6時間06分と、女性の方が約3倍長い。

「小学生」「中学生」を持つ女性の「家事」については「乳幼児(就学前)」とほとんど変わらないが、男性は

「家事」の時間が子どもの成長とともに減少している。

図表18-4 1日に費やしている家事・育児・介護の平均時間
【休みの日・仕事や学校のない日(休日)】
(性別・末子年齢別)



休みの日・仕事や学校のない日(休日)の生活時間を性別・末子年齢別にみると、「乳幼児(就学前)」を持つ家庭では、男性の「家事」が2時間09分、「育児」6時間36分(合計8時間45分)であるのに対し、女性は、

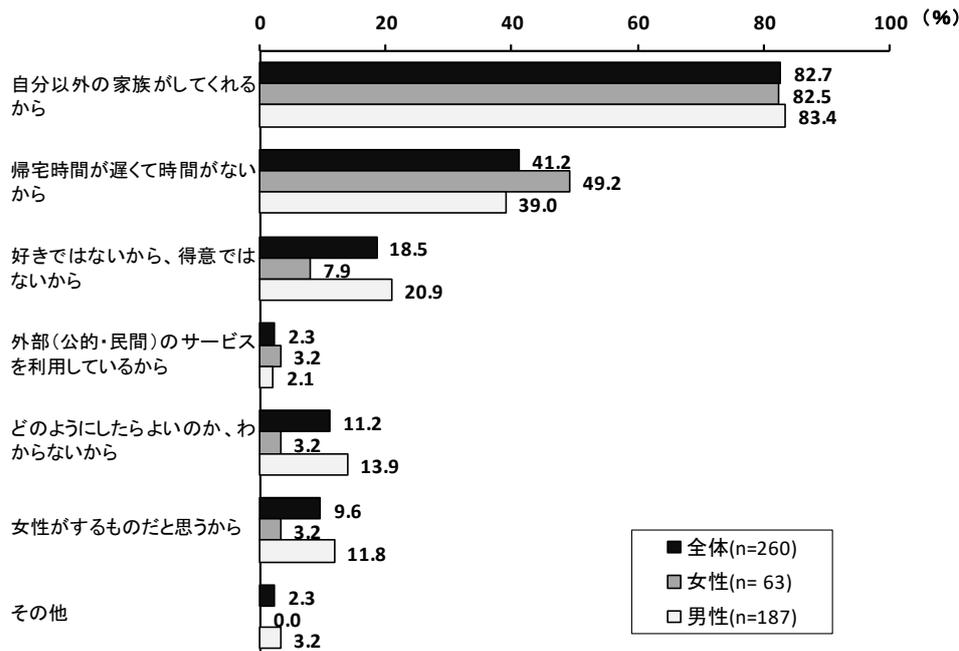
「家事」5時間42分、「育児」12時間34分(合計18時間16分)と、女性の方が約2倍長い。

【「家事」「育児」「介護」に費やす時間が1つでも30分以下と回答された方にお尋ねします】

問19 「家事」「育児」「介護」について、30分以下とお答えになられた項目について、費やす時間が少ない理由をお答えください。(あてはまるもの全て選択)

問18で「家事」「育児」「介護」について、30分以下と回答した人に対し、その理由を尋ねた。

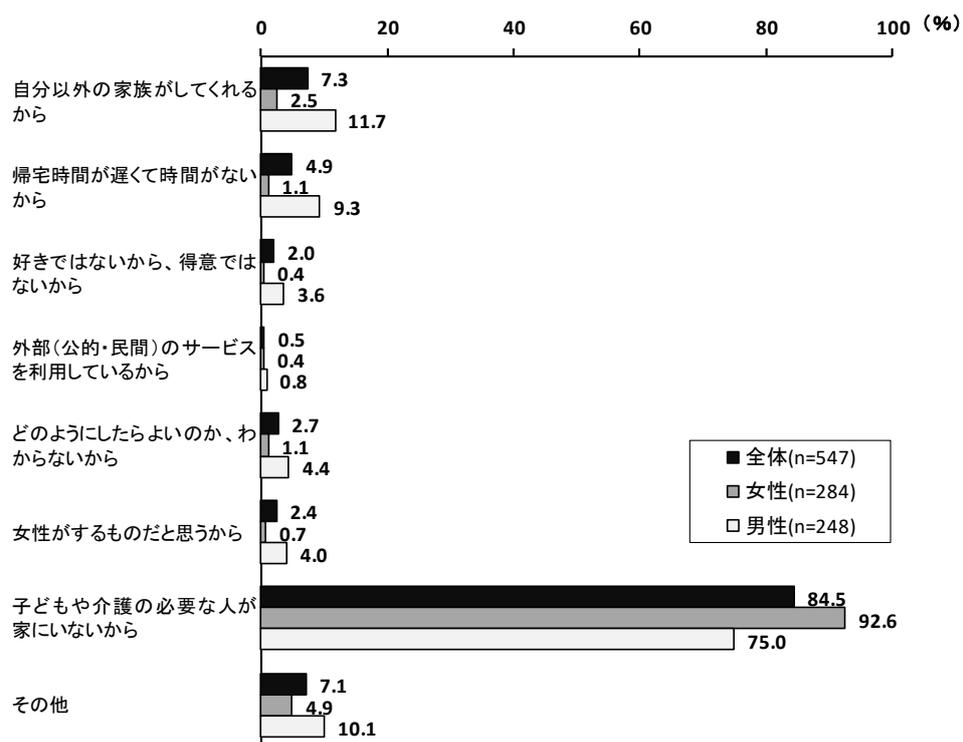
図表19-1 「家事」に費やす時間が少ない理由
(全体・性別)



「家事」では、「自分以外の家族がしてくれるから」(82.7%)が最も高く、次いで「帰宅時間が遅くて時間がないから」(41.2%)、「好きではないから、得意ではないから」(18.5%)の順となっている。

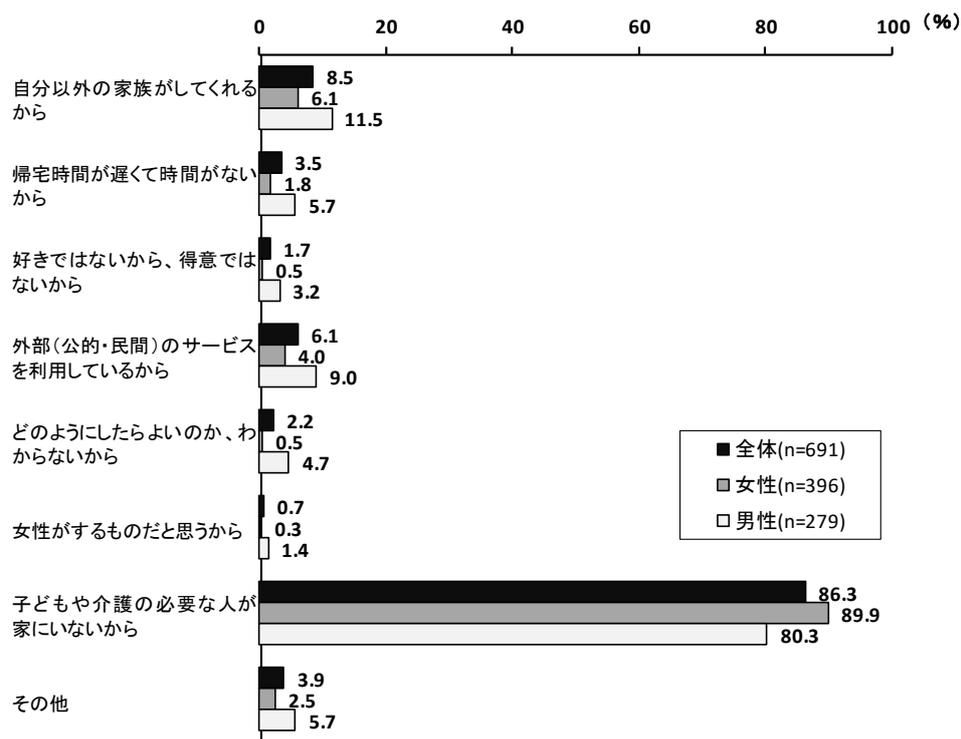
性別で見ると、「好きではないから、得意ではないから」また「どのようにしたらよいのかわからないから」と回答した割合が、女性より男性のほうが高い。

図表19-2 「育児」に費やす時間が少ない理由
(全体・性別)



「育児」では、「自分以外の家族がしてくれるから」(7.3%)と「帰宅時間が遅くて時間がないから」(4.9%)の順となっている。

図表19-3 「介護」に費やす時間が少ない理由
(全体・性別)

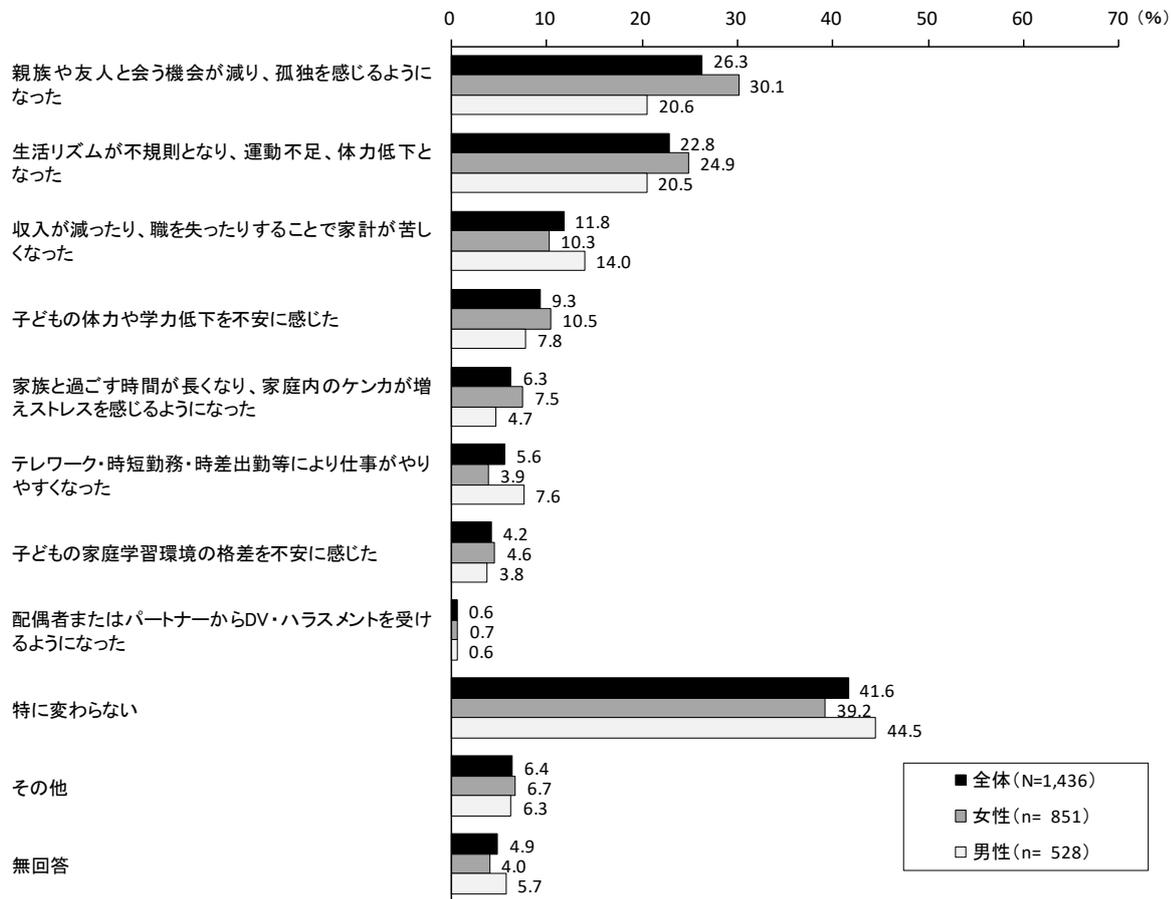


「介護」では、「自分以外の家族がしてくれるから」(8.5%)と「外部(公的・民間)のサービスを利用しているから」(6.1%)の順となっている。

(5) 新型コロナウイルス感染症拡大の影響による生活や働き方の変化 (問 20)

問20 新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、あなたの生活や働き方は変わりましたか。
(あてはまるもの全て選択)

図表20-1 新型コロナウイルス感染症拡大の影響による生活や働き方の変化
(全体・性別)



「特に変わらない」(41.6%)の割合が最も高く、次いで「親族や友人と会う機会が減り、孤独を感じるようになった」(26.3%)、「生活リズムが不規則となり、運動不足、体力低下となった」(22.8%)の順となった。

男女差は、「親族や友人と会う機会が減り、孤独を感じるようになった」(女性 30.1%、男性 20.6%、9.5ポイント差)などにみられる。

図表20-2 新型コロナウイルス感染症拡大の影響による生活や働き方の変化

(全体・性別・職業別)

	サンプル数	家族と過ごす時間が長くなり、家庭内のケンカが増えストレスを感じるようになった	親族や友人と会う機会が減り、孤独を感じるようになった	収入が減ったり、職を失ったりすることで家計が苦しくなった	子どもの体力や学力低下を不安に感じた	子どもの家庭学習環境の格差を不安に感じた	生活リズムが不規則となり、運動不足、体力低下となった	配偶者またはパートナーからDV・ハラスメントを受けるようになった	テレワーク・時短勤務・時差出勤等により仕事がやりやすくなった	特に変わらない	その他	無回答	
全体	1,436	6.3	26.3	11.8	9.3	4.2	22.8	0.6	5.6	41.6	6.4	4.9	
性別	女性	851	7.5	30.1	10.3	10.5	4.6	24.9	0.7	3.9	39.2	6.7	4.0
	男性	528	4.7	20.6	14.0	7.8	3.8	20.5	0.6	7.6	44.5	6.3	5.7
性・職業別	女性・自営業主	37	2.7	24.3	18.9	8.1	5.4	37.8	-	5.4	37.8	5.4	2.7
	女性・自営業手伝い	17	5.9	35.3	5.9	5.9	11.8	41.2	5.9	-	29.4	23.5	-
	女性・正社員	228	3.5	33.3	5.7	13.6	6.1	19.3	0.4	8.8	39.5	10.5	2.2
	女性・契約社員	52	3.8	23.1	11.5	7.7	-	11.5	-	1.9	53.8	3.8	1.9
	女性・アルバイト	197	9.1	30.5	18.3	13.2	5.1	19.3	1.0	3.0	37.6	2.5	7.1
	女性・自由業	6	-	16.7	16.7	-	-	33.3	-	-	66.7	-	-
	女性・学生	29	6.9	31.0	10.3	3.4	-	44.8	-	6.9	24.1	6.9	3.4
	女性・専業主婦	172	12.8	25.6	7.6	10.5	5.2	29.7	0.6	0.6	40.1	5.8	4.7
	女性・無職	84	8.3	33.3	7.1	-	-	38.1	-	-	36.9	3.6	4.8
	女性・その他	20	10.0	45.0	10.0	15.0	10.0	25.0	5.0	5.0	30.0	20.0	-
	男性・自営業主	56	5.4	10.7	26.8	7.1	7.1	10.7	-	3.6	53.6	1.8	5.4
	男性・自営業手伝い	4	-	50.0	50.0	-	-	50.0	-	-	25.0	-	-
	男性・正社員	244	2.9	16.0	10.7	12.3	4.9	16.8	0.4	11.5	45.5	8.6	6.1
	男性・契約社員	38	7.9	21.1	13.2	2.6	2.6	23.7	-	13.2	42.1	2.6	2.6
	男性・アルバイト	33	3.0	24.2	15.2	-	-	12.1	-	3.0	48.5	3.0	6.1
	男性・自由業	4	25.0	50.0	50.0	-	-	25.0	-	-	25.0	-	-
	男性・学生	29	3.4	31.0	13.8	3.4	-	31.0	-	10.3	44.8	3.4	-
	男性・専業主婦	3	33.3	33.3	-	33.3	-	33.3	-	-	-	-	33.3
	男性・無職	89	9.0	27.0	15.7	2.2	2.2	39.3	2.2	-	37.1	7.9	6.7
男性・その他	25	-	40.0	4.0	8.0	4.0	-	-	4.0	48.0	4.0	4.0	

性別、職業別にみると、女性については、専業主婦が「家族と過ごす時間が長くなり、家庭内のケンカが増えストレスを感じるようになった」(12.8%)割合が多い。

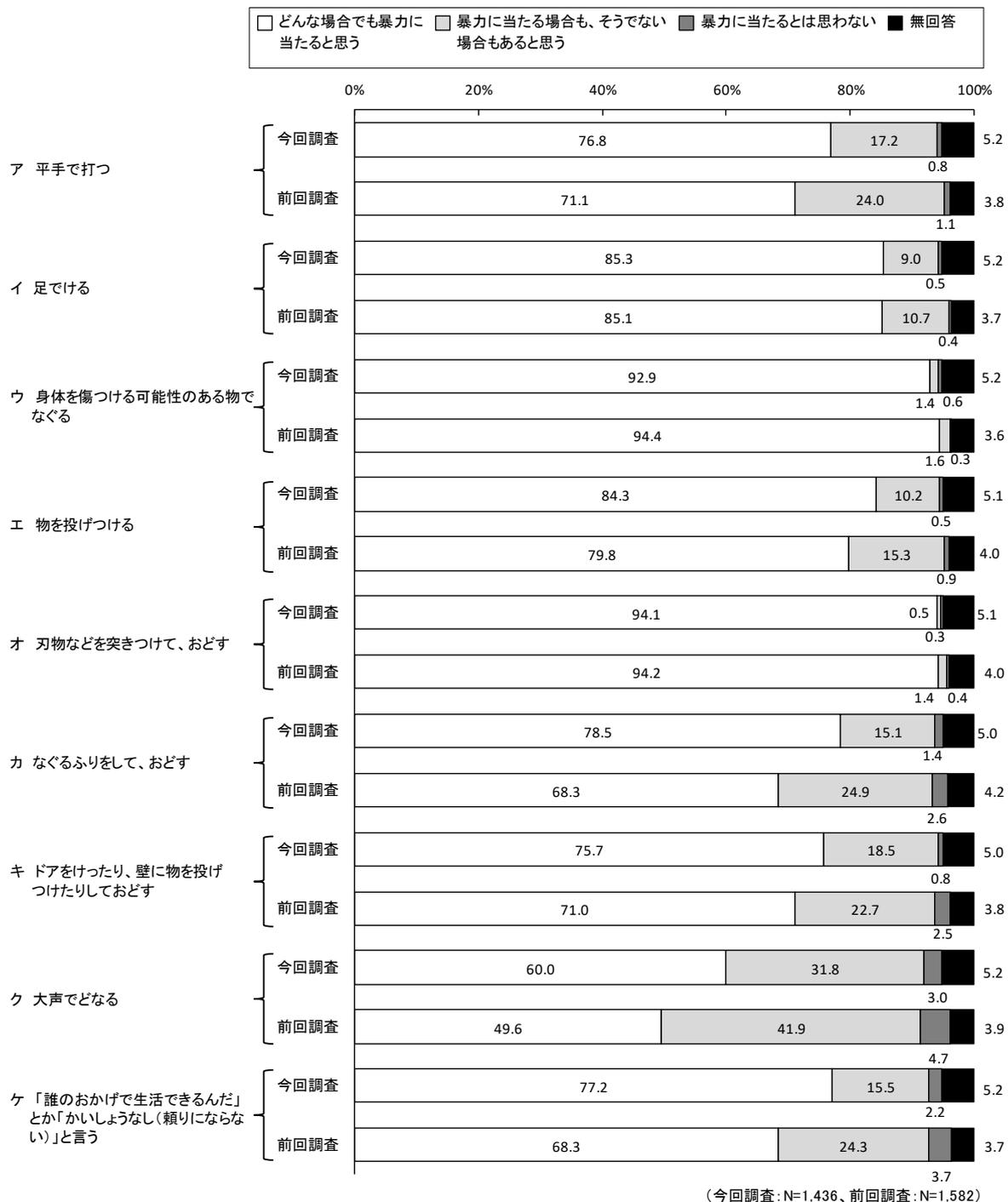
また、男女ともに、自営業主及びアルバイトは「収入が減ったり、職を失ったりすることで家計が苦しくなった」と回答した割合が多く、学生は「生活リズムが不規則となり、運動不足、体力低下となった」と回答した割合が多い。また、正社員は「テレワーク・時短勤務・時差出勤等により仕事がやりやすくなった」と回答した割合が多い。

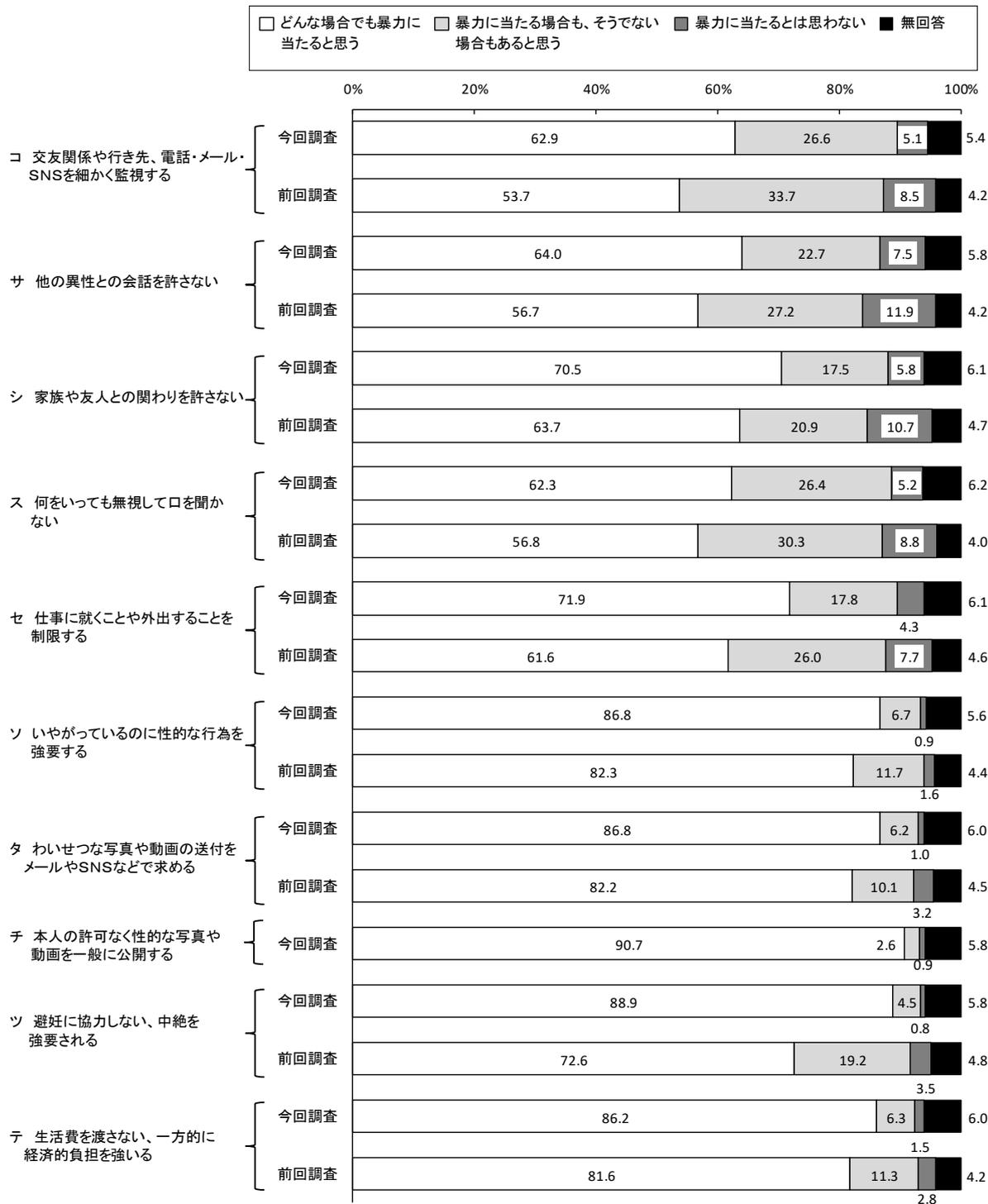
4 DV（ドメスティック・バイオレンス）について

（1）配偶者や恋人からの暴力の認識（問21）

問21 配偶者や恋人など親しい関係にある人との間で、次のようなことが行われた場合、あなたは、それは暴力だと思いますか。（ア～テのそれぞれについて、あてはまるものを1つ選択）

図表21-1 配偶者や恋人など親しい関係にある人からの暴力の認識
（全体・前回比較）





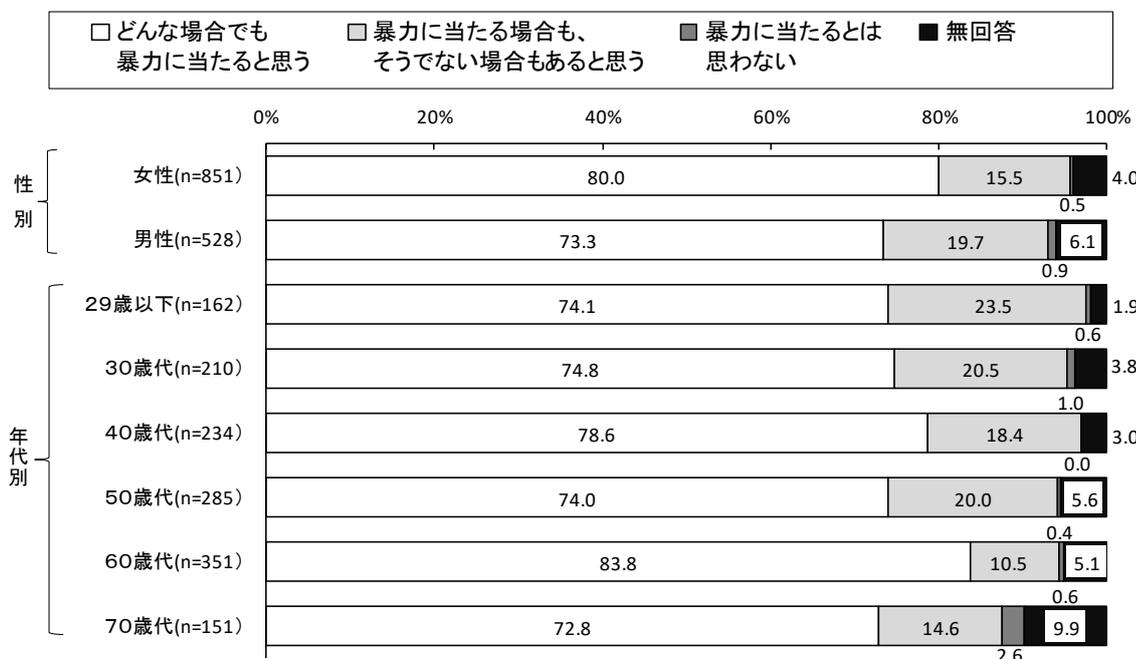
(今回調査:N=1,436、前回調査:N=1,582)

ア～テの19項目について、「どんな場合でも暴力にあたると思う」割合は、「刃物などを突きつけて、おどす」(94.1%)、「身体を傷つける可能性のある物でなくる」(92.9%)が9割以上と高く、次いで、「避妊に協力しない、中絶を強要される」(88.9%)、「わいせつな写真や動画の送付をメールやSNSなどで求める」(86.8%)、「いやがっているのに性的な行為を強要する」(86.8%)、「生活費を渡さない、一方的に経済的負担を強いる」(86.2%)、「足でける」(85.3%)、「物を投げつける」(84.3%)が8割を超えている。

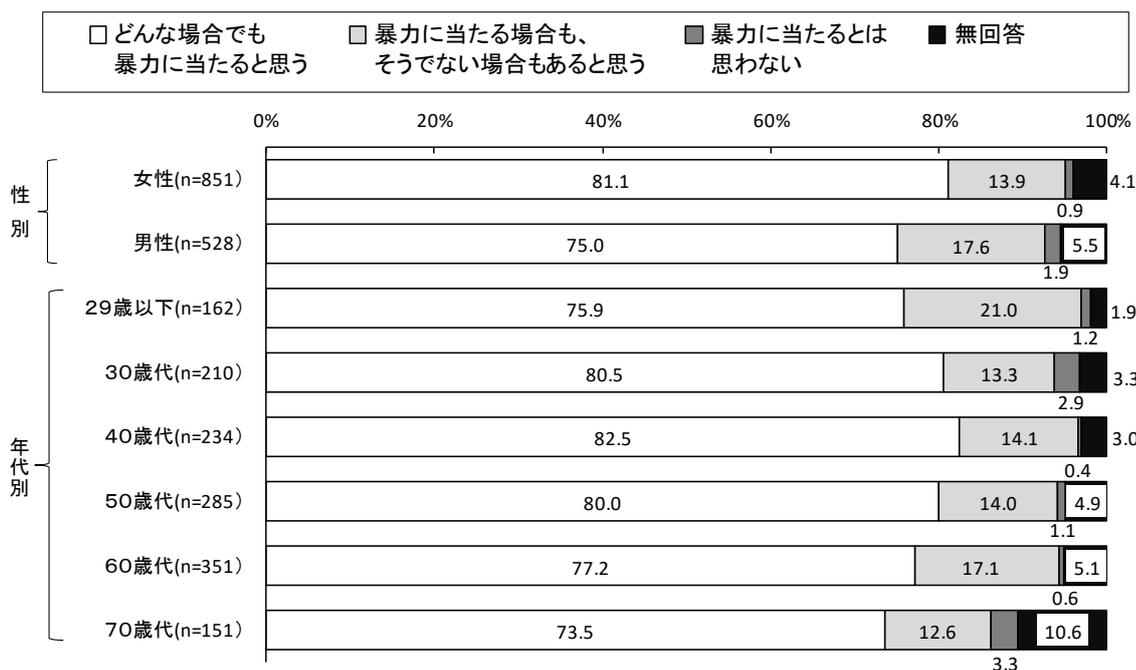
前回調査と比べると、「どんな場合でも暴力にあたると思う」割合は、18項目中16項目が上昇している。特に上昇幅が大きい項目は「避妊に協力しない、中絶を強要される」で16.3ポイント上昇している。

ア～テの19項目を、身体的暴力(ア～エ)、精神的暴力(オ～セ)、性的暴力(ソ～ツ)、経済的暴力(テ)の4つに分類し、各分類の代表的な項目として、「ア 平手で打つ」「カ なぐるふりをして、おどす」「ク 大声でどなる」「セ 仕事に就くことや外出することを制限する」「ソ いやがっているのに性的な行為を強要する」「テ 生活費を渡さない、一方的に経済的負担を強いる」の6項目を抽出し、それぞれ性別、年代別に比較した。

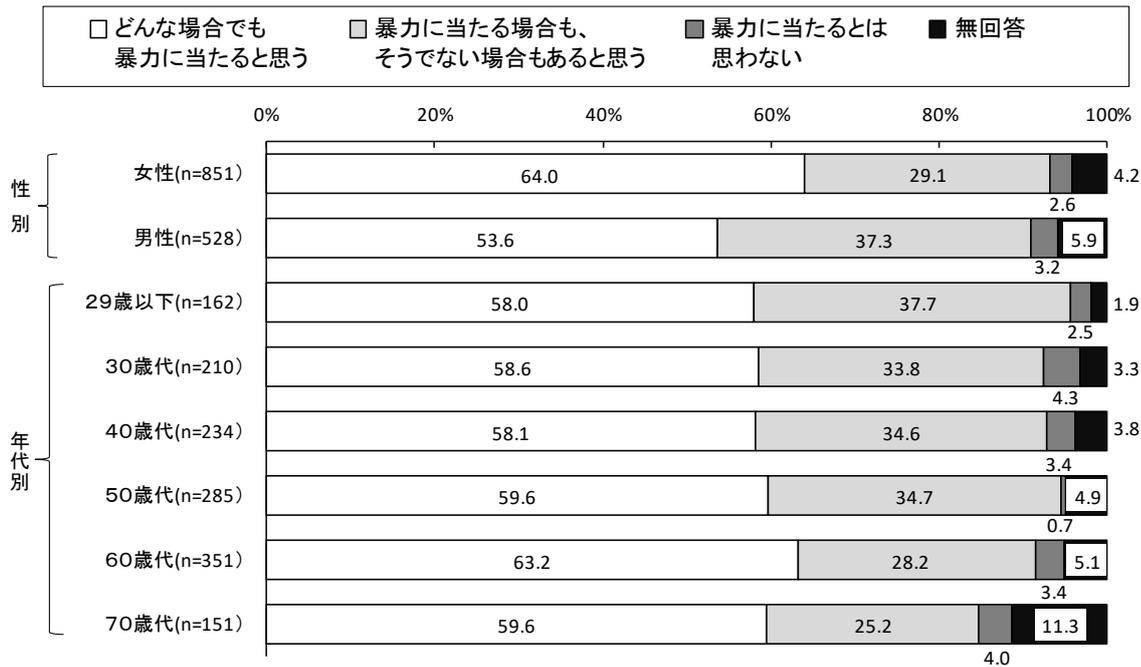
図表21-2 配偶者や恋人など親しい関係にある人からの暴力の認識
【ア 平手で打つ】
(性別・年代別)



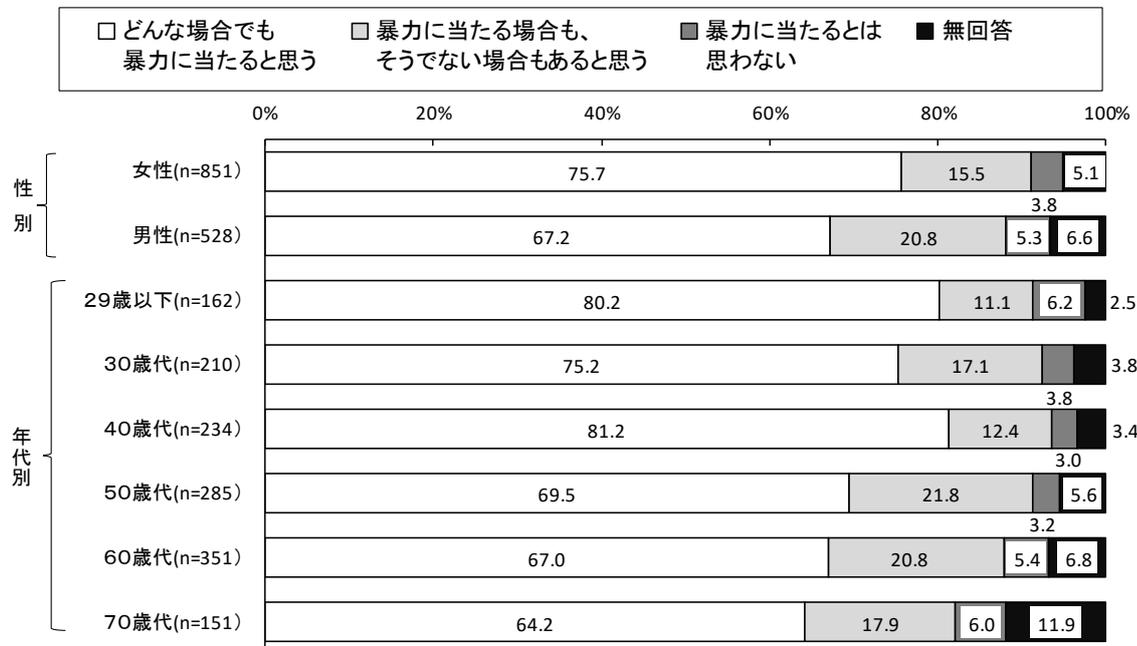
図表21-3 配偶者や恋人など親しい関係にある人からの暴力の認識
【カ なぐるふりをして、おどす】
(性別・年代別)



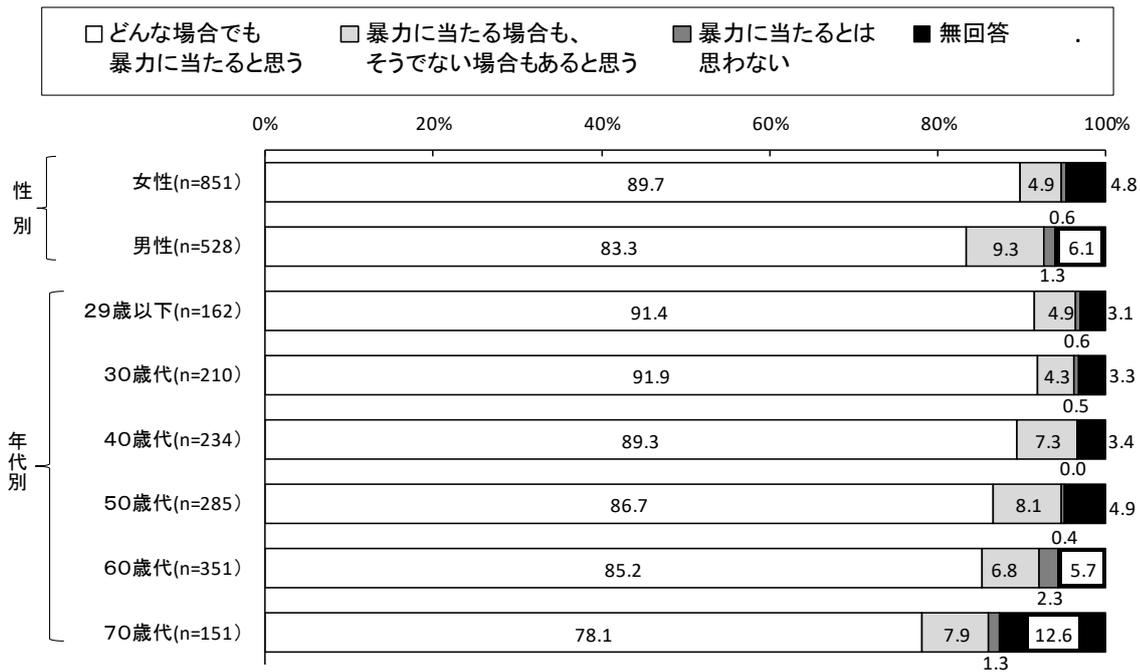
図表21-4 配偶者や恋人など親しい関係にある人からの暴力の認識
【ク 大声でどなる】
(性別・年代別)



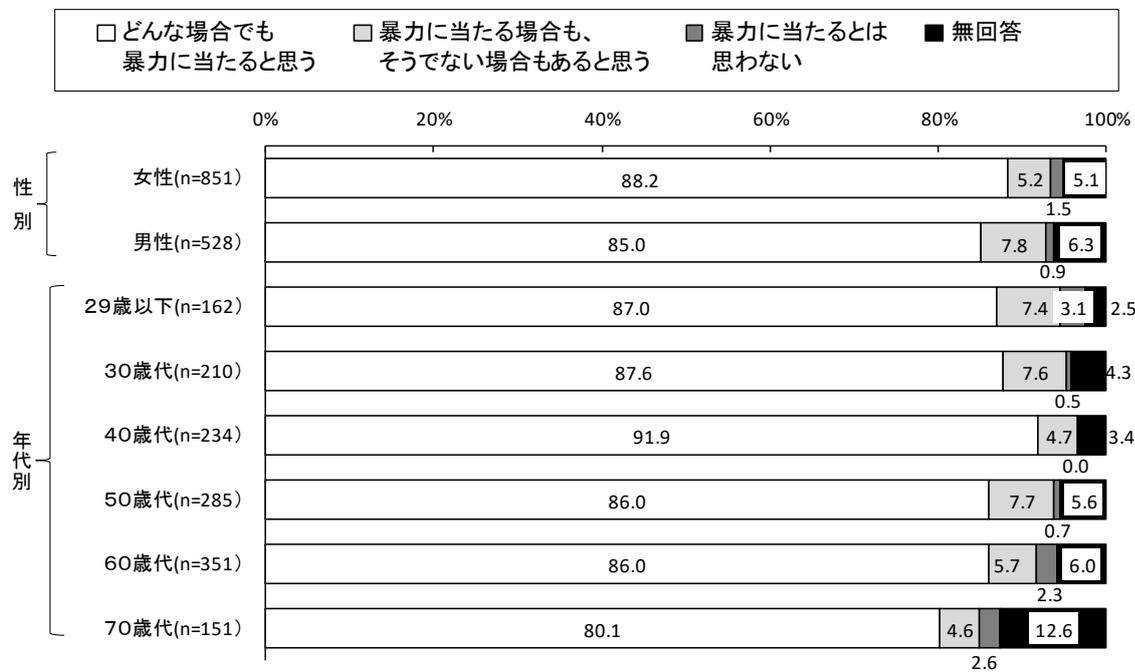
図表21-5 配偶者や恋人など親しい関係にある人からの暴力の認識
【セ 仕事に就くことや外出することを制限する】
(性別・年代別)



図表21-6 配偶者や恋人など親しい関係にある人からの暴力の認識
【ソ いやがっているのに性的な行為を強要する】
(性別・年代別)

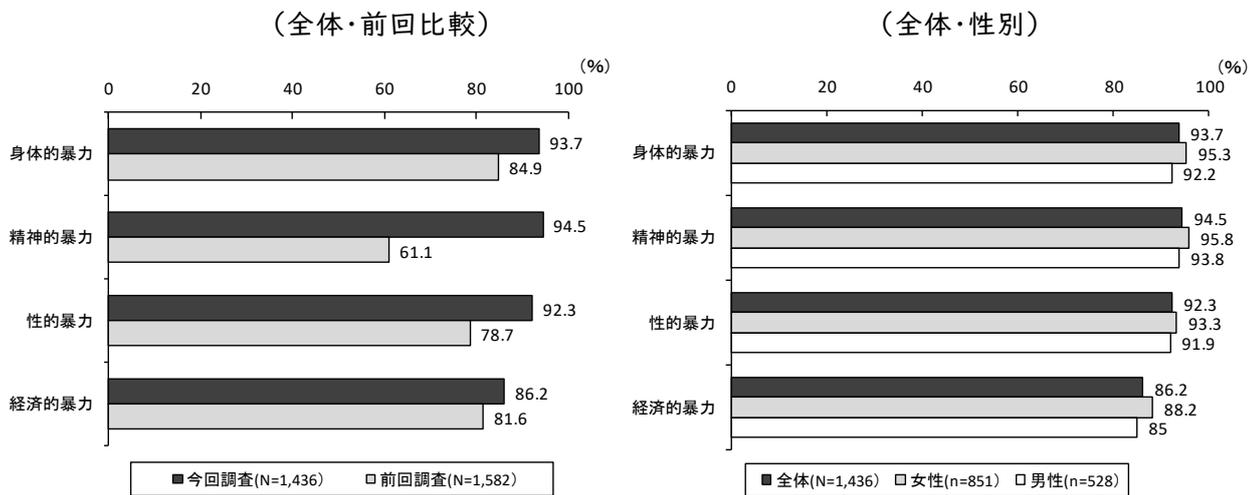


図表21-7 配偶者や恋人など親しい関係にある人からの暴力の認識
【テ 生活費を渡さない、一方的に経済的負担を強いる】
(性別・年代別)



以上6項目(ア、カ、ク、セ、ソ、テ)について、「どんな場合でも暴力に当たると思う」の割合をみると、全ての項目で女性の方が男性より高くなっている

図表21-8 4分類での暴力の認識

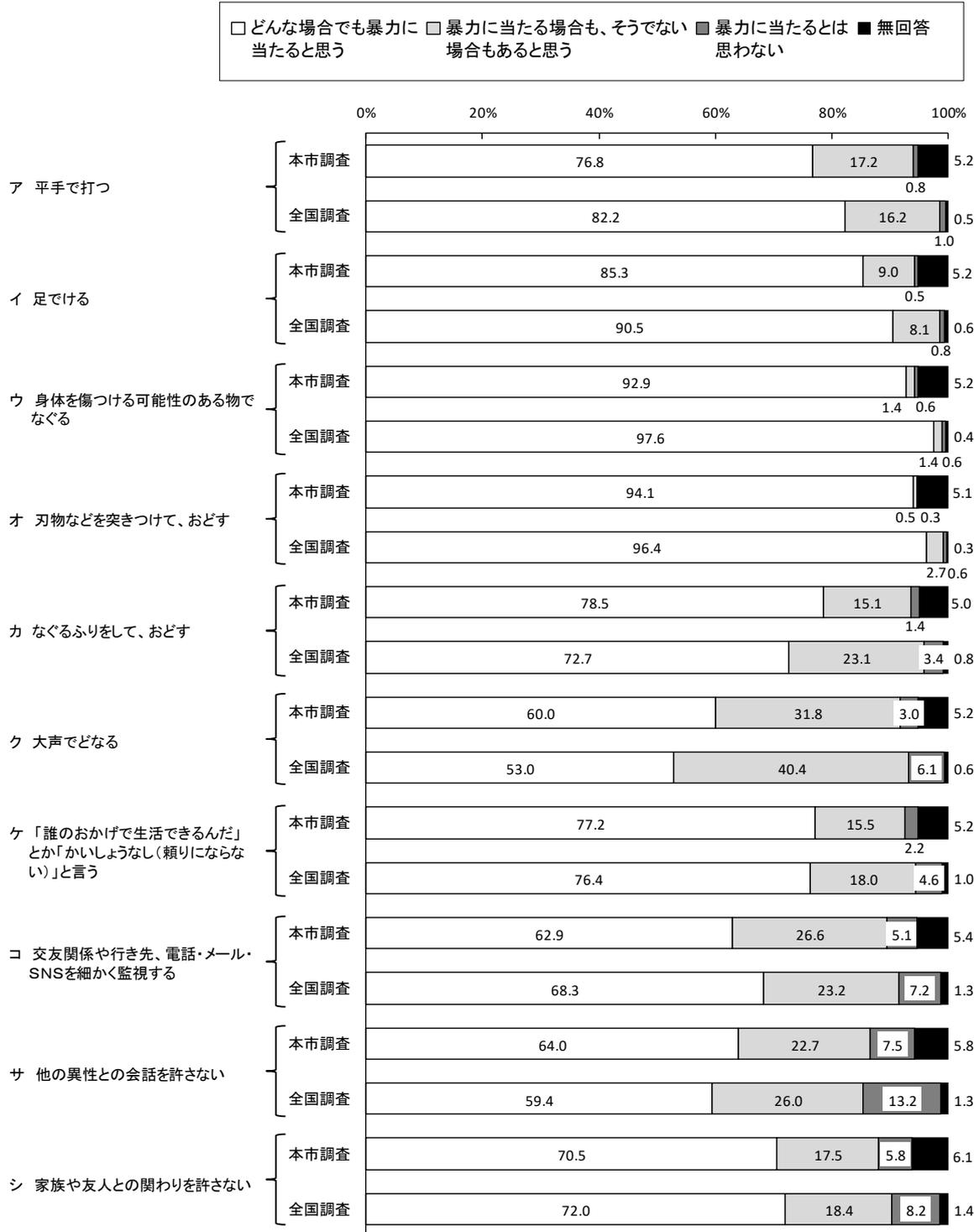


ア～テの19項目を、身体的暴力(ア～エ)、精神的暴力(オ～セ)、性的暴力(ソ～ツ)、経済的暴力(テ)の4つに分類して比較した。

全体で見ると、「精神的暴力」の割合が94.5%で最も高く、前回調査との比較でも33.4ポイント上昇している。性別で見ると、すべての項目で女性の方が男性よりやや高い。

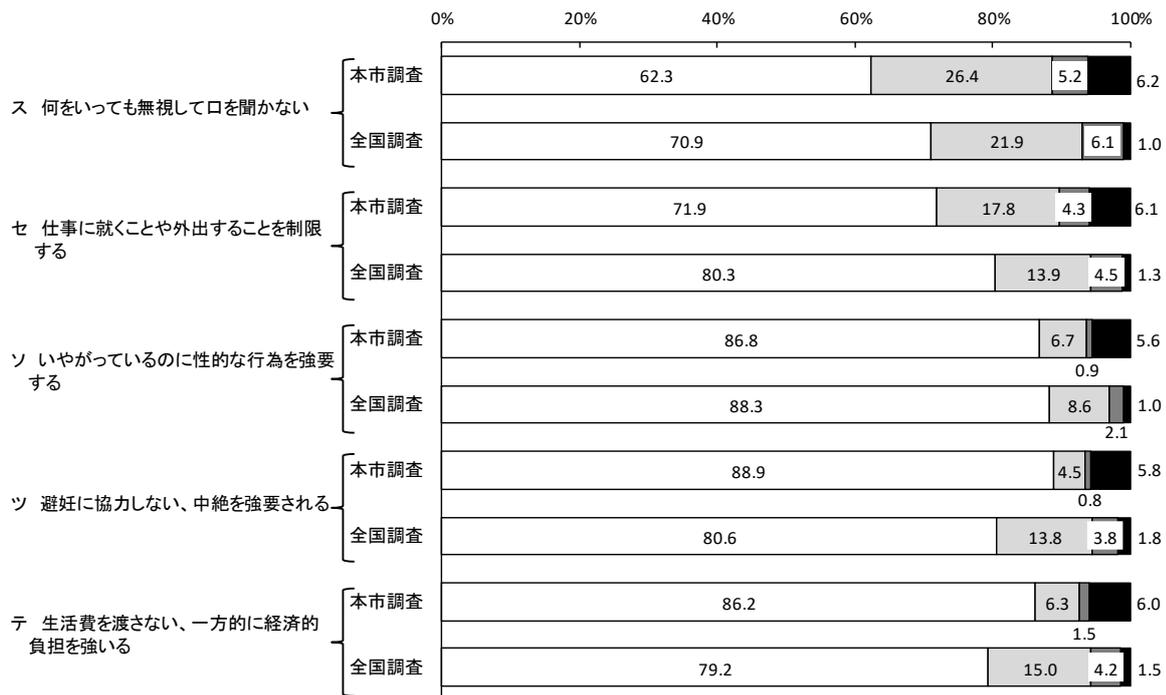
(注) 身体的暴力(ア～エ)、精神的暴力(オ～セ)、性的暴力(ソ～ツ)、経済的暴力(テ)の4つに分類した中で、ひとつで「どんな場合でも暴力だと思う」または「暴力に当たる場合も、そうでない場合もあると思う」と回答した場合を、暴力の認識があるとした。

図表21-9 配偶者や恋人など親しい関係にある人からの暴力の認識
(全国比較)



(本市調査: N=1,436、全国調査: N=3,438)

□どんな場合でも暴力に 〇暴力に当たる場合も、そうでない ■暴力に当たるとは思わない ■無回答
 当たると思う 場合もあると思う



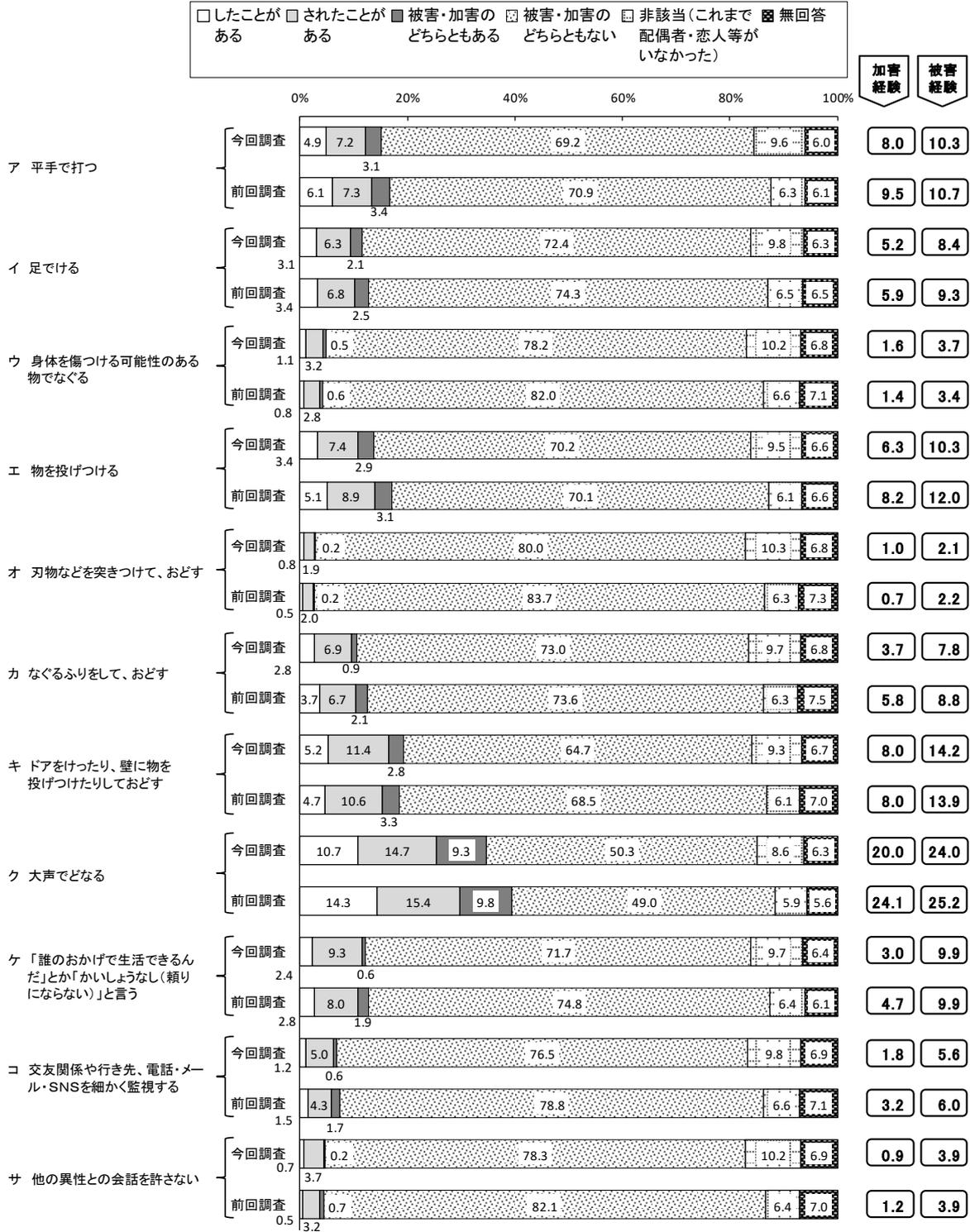
(本市調査: N=1,436、全国調査: N=3,438)

全国調査と比較が可能な15項目について「どんな場合でも暴力に当たると思う」割合を比べると、本市の方が高い項目は6項目で、最も差がある項目は「避妊に協力しない、中絶を強要される」で全国調査より 8.3 ポイント高くなっている。

(2) 暴力被害・加害経験の有無 (問 22)

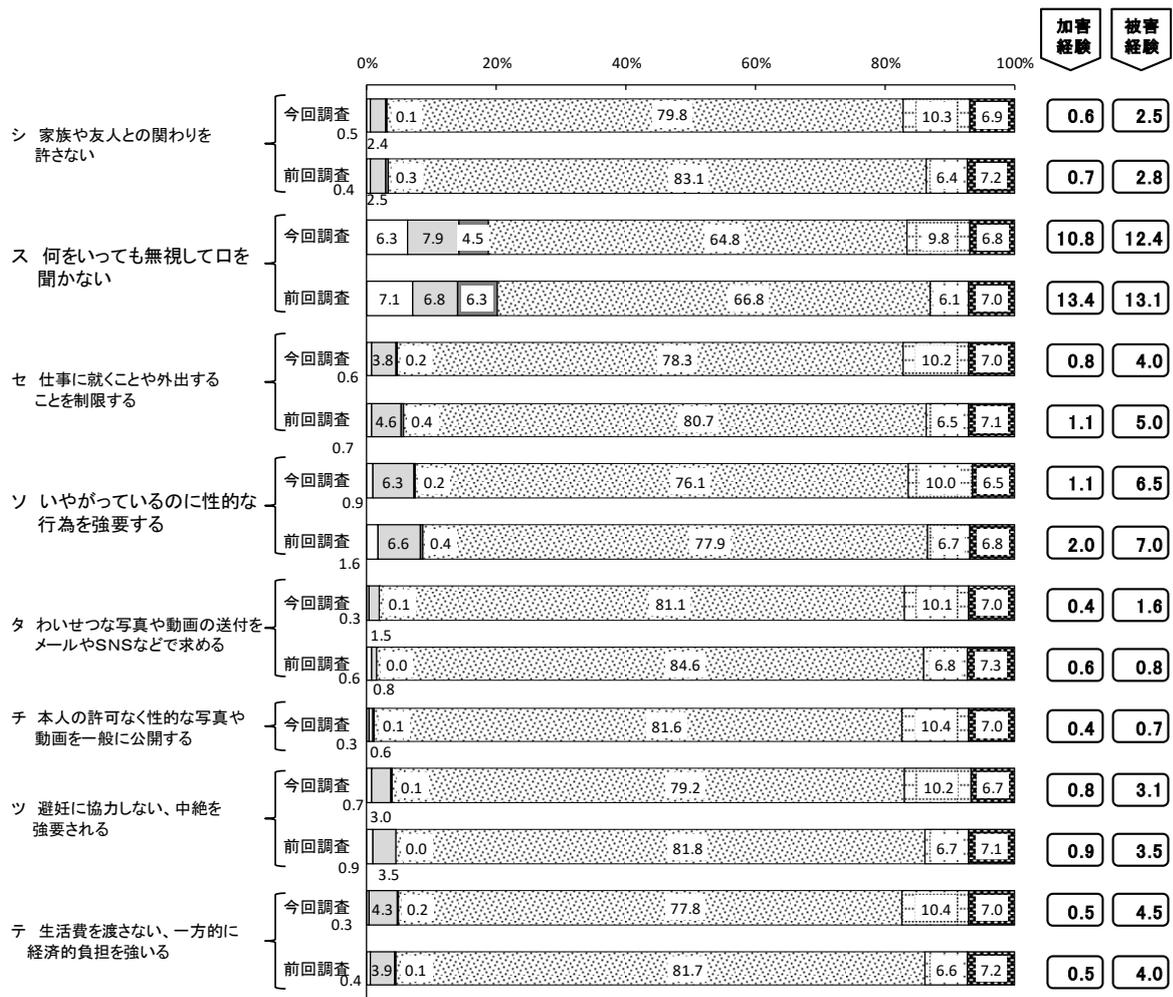
問22 配偶者や恋人など親しい関係にある人との間で、あなたは、したこと、されたことはありますか。
(ア～テのそれぞれについて、あてはまるものを1つ選択)

図表22-1 配偶者や恋人など親しい関係にある人からの暴力被害・加害経験の有無
(全体・前回比較)



(今回調査:N=1,436、前回調査:N=1,582)
 ※加害経験=「したことがある」+「被害・加害のどちらともある」
 被害経験=「されたことがある」+「被害・加害のどちらともある」

□ したことがある □ されたことがある ■ 被害・加害の どちらともある □ 被害・加害の どちらともない □ 非該当(これまで 配偶者・恋人等がいなかった) ■ 無回答



(今回調査: N=1,436、前回調査: N=1,582)

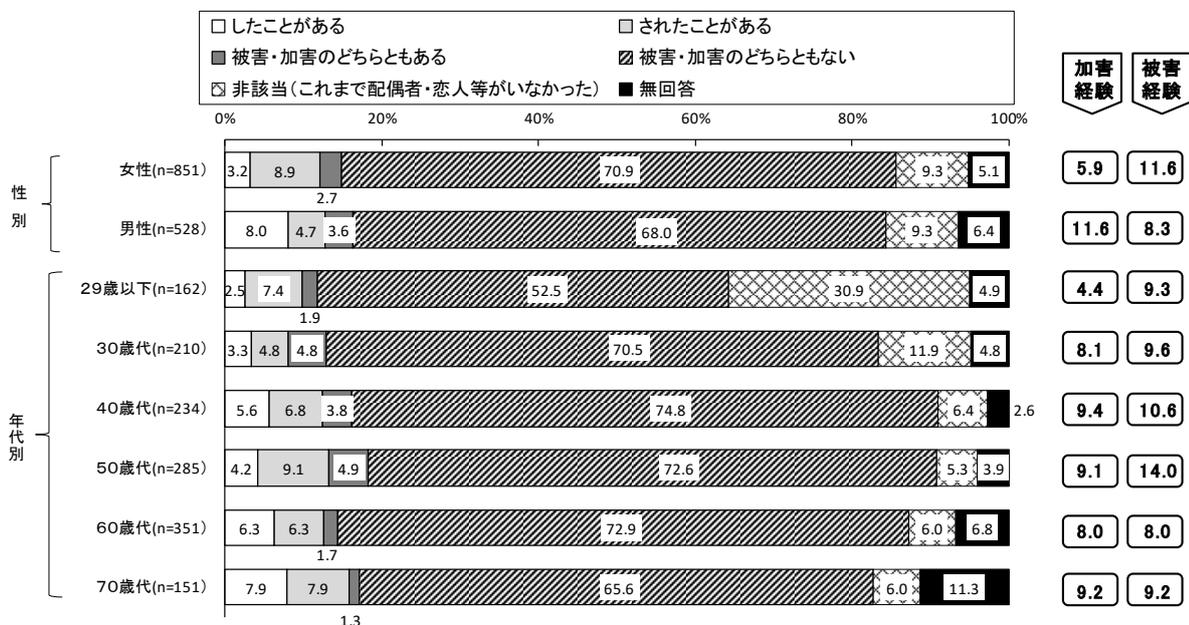
※加害経験=「したことがある」+「被害・加害のどちらともある」
被害経験=「されたことがある」+「被害・加害のどちらともある」

ア～テの19項目について暴力被害・加害経験の有無を尋ねたところ、いずれの項目も「被害・加害のどちらともない」の割合が最も高い。

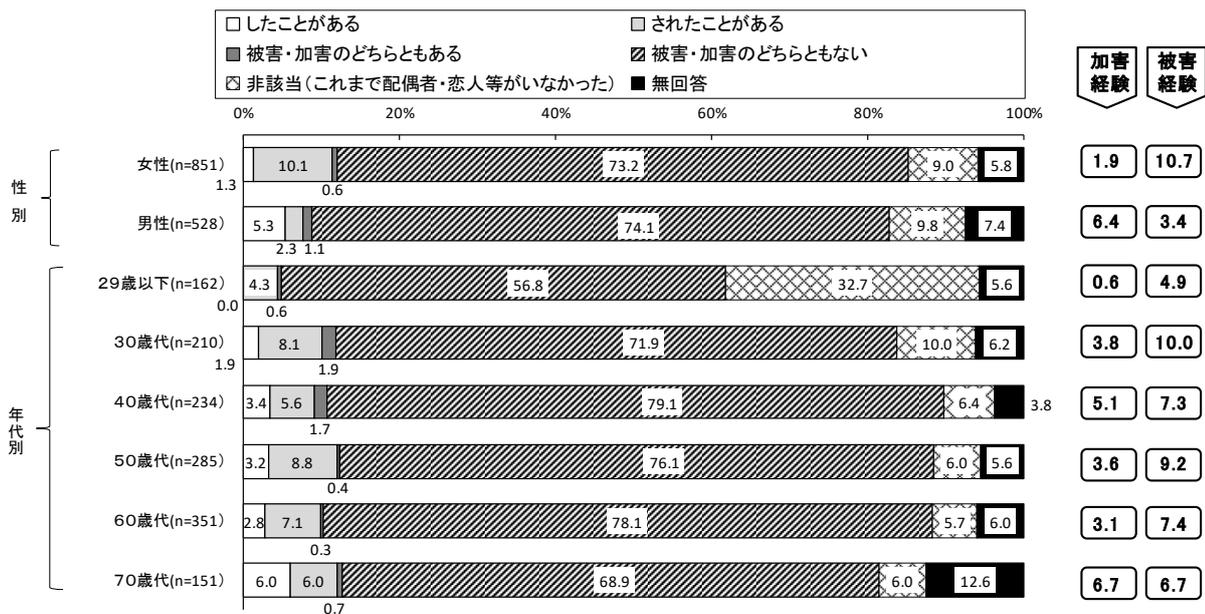
「したことがある」、「されたことがある」、「被害・加害のどちらともある」を合わせた割合をみると、「大声でどなる」(34.7%)が最も高く、次いで「ドアをけったり、壁に物を投げつけたりしておどす」(19.4%)、「何をいっても無視して口を聞かない」(18.7%)、「平手で打つ」(15.2%)の割合が高い。

ア～テの19項目を、身体的暴力(ア～エ)、精神的暴力(オ～セ)、性的暴力(ソ～ツ)、経済的暴力(テ)の4つに分類し、各分類の代表的な項目として、「ア 平手で打つ」「カ なぐるふりをして、おどす」「ク 大声でどなる」「セ 仕事に就くことや外出することを制限する」「ソ いやがっているのに性的な行為を強要する」「テ 生活費を渡さない、一方的に経済的負担を強いる」の6項目を抽出し、それぞれ性別、年代別に比較した。

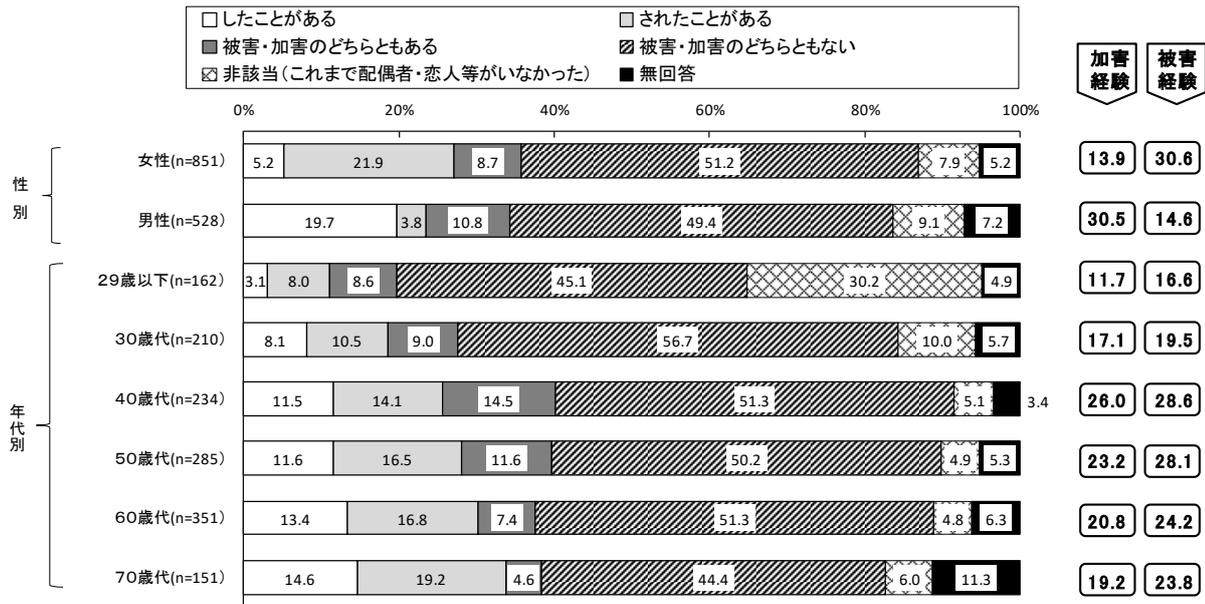
図表22-2 配偶者や恋人など親しい関係にある人からの暴力被害・加害経験の有無
「ア 平手で打つ」(性別・年代別)



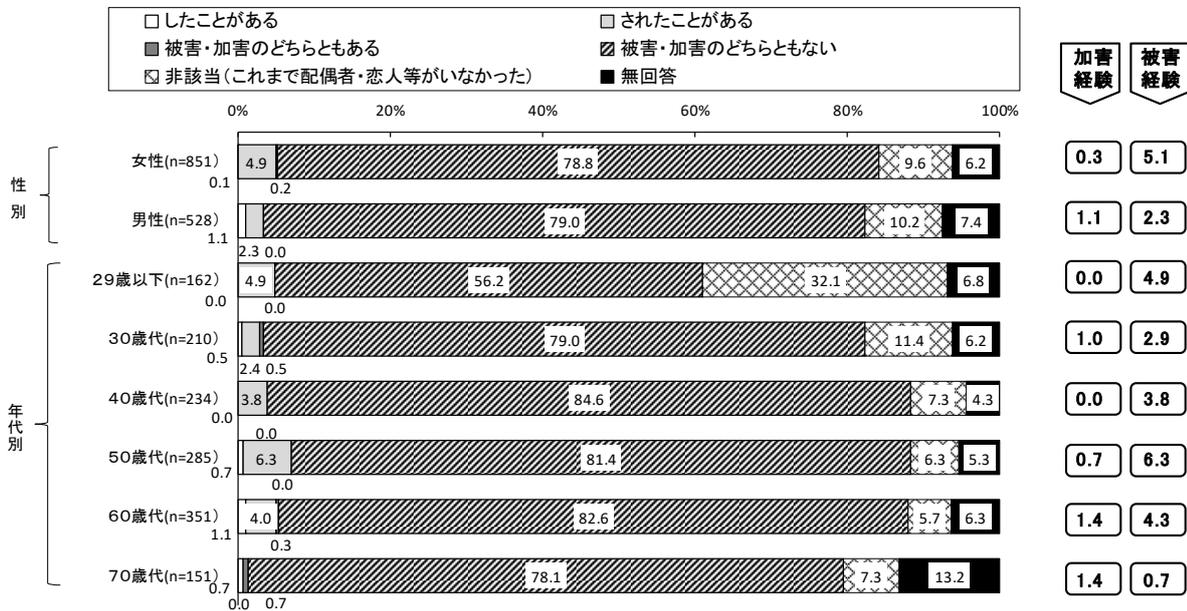
図表22-3 配偶者や恋人など親しい関係にある人からの暴力被害・加害経験の有無
「カ なぐるふりをして、おどす」(性別・年代別)



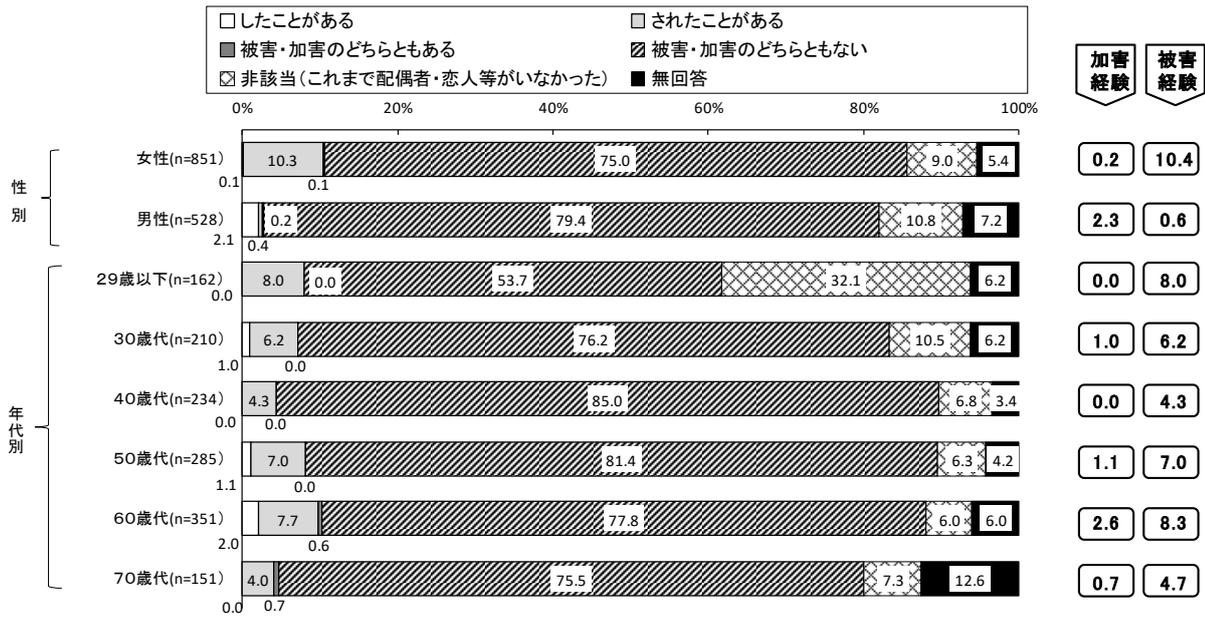
図表22-4 配偶者や恋人など親しい関係にある人からの暴力被害・加害経験の有無
「ク 大声でどなる」(性別・年代別)



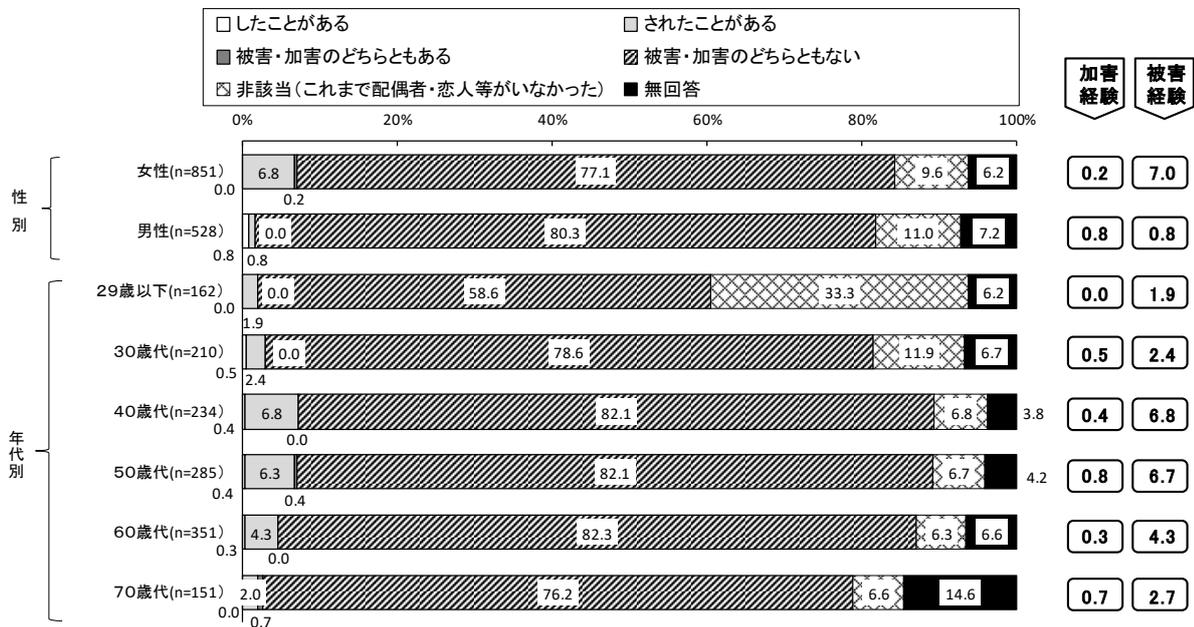
図表22-5 配偶者や恋人など親しい関係にある人からの暴力被害・加害経験の有無
「セ 仕事に就くことや外出することを制限する」(性別・年代別)



図表22-6 配偶者や恋人など親しい関係にある人からの暴力被害・加害経験の有無
「ソ いやがっているのに性的な行為を強要する」(性別・年代別)

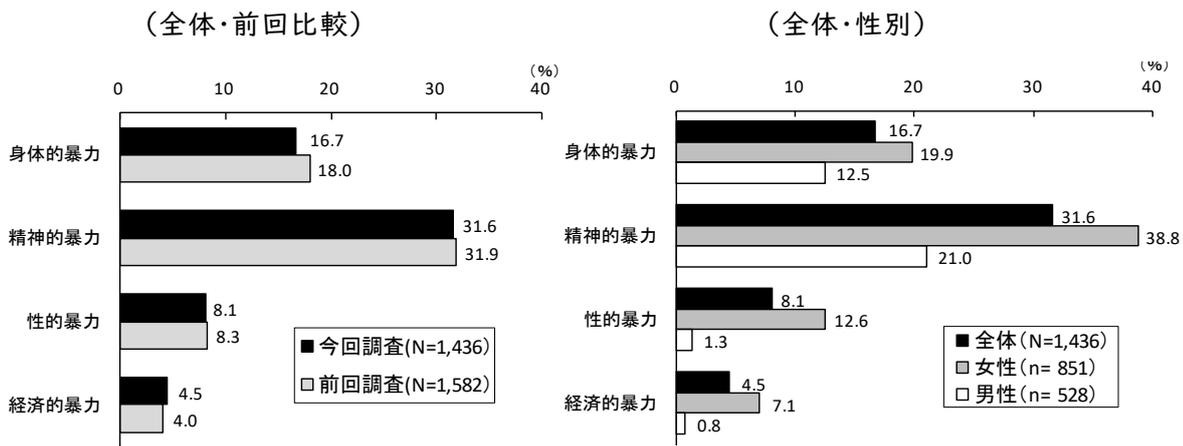


図表22-7 配偶者や恋人など親しい関係にある人からの暴力被害・加害経験の有無
「テ 生活費を渡さない、一方的に経済的負担を強いる」(性別・年代別)



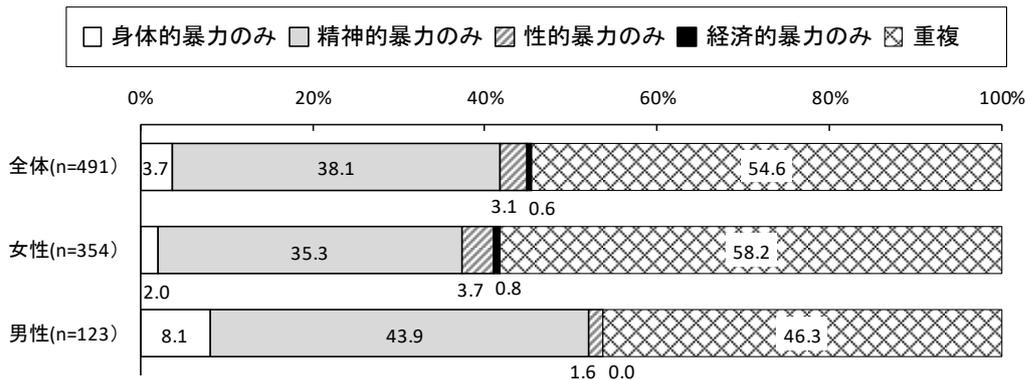
以上6項目(ア、カ、ク、セ、ソ、テ)について、すべての項目で、加害経験者の割合(「したことがある」と「被害・加害のどちらもある」を合わせた割合)は女性より男性の方が高く、被害経験者の割合(「されたことがある」と「被害・加害のどちらもある」を合わせた割合)は男性より女性の方が高くなっている。

図表22-8 4分類での被害経験



ア～テの19項目を、身体的暴力(ア～エ)、精神的暴力(オ～セ)、性的暴力(ソ～ツ)、経済的暴力(テ)の4つに分類して被害経験者の割合を前回調査と比較するも大きな差はない。性別で見ると、いずれの項目も女性の方が大幅に高くなっている。

図表22-9 被害経験の重複
(全体・性別)



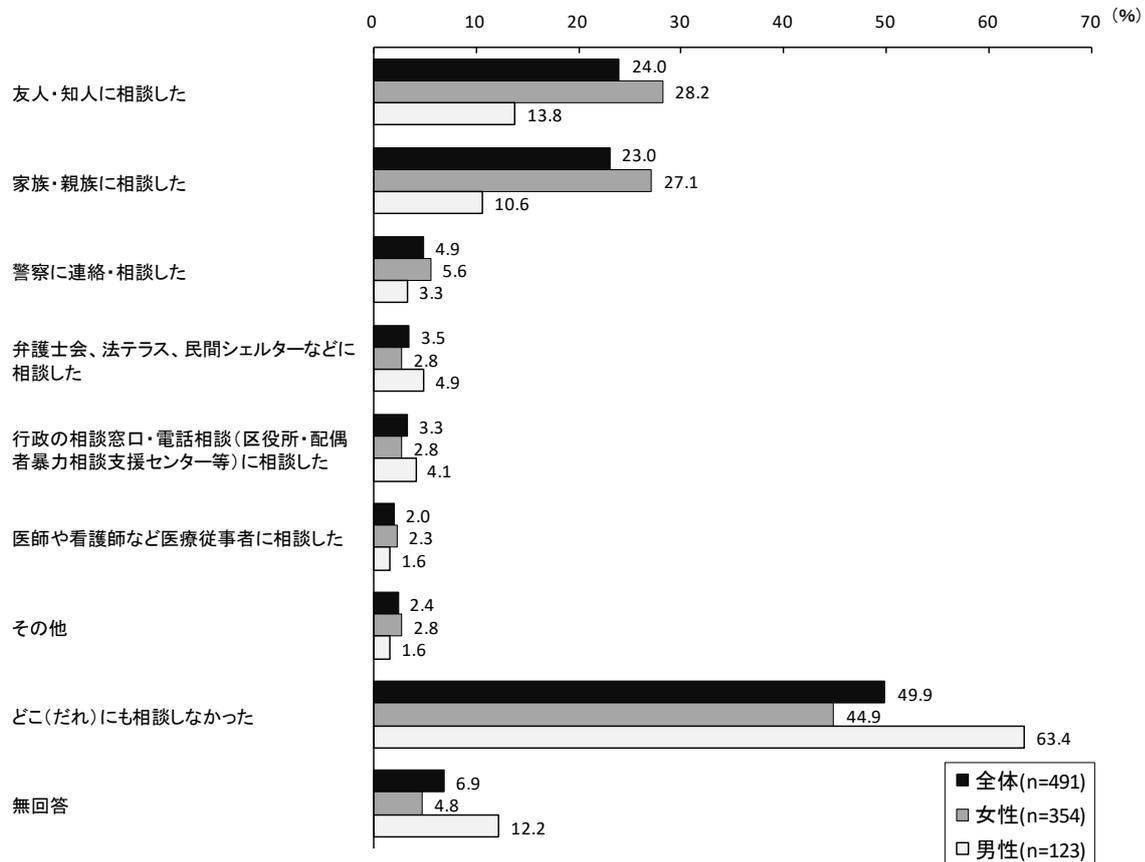
身体的暴力、精神的暴力、性的暴力、経済的暴力の4つの分類について、被害経験の重複を調べたところ、重複している人の割合は全体で54.6%、性別で見ると、女性58.2%、男性46.3%と、女性の方が11.9ポイント高い。

(3) 暴力被害にあった時の相談先 (問 23)

【問22の項目のうち、ひとつでも「2.されたことがある」または「3.被害・加害のどちらともある」と回答された方にお尋ねします】

問23 あなたはこれまで【問22】のような行為を受けたことについて、誰かに打ち明けたり、相談したりしましたか。(あてはまるもの全て選択)

図表23-1 暴力被害にあった時の相談先
(全体・性別)

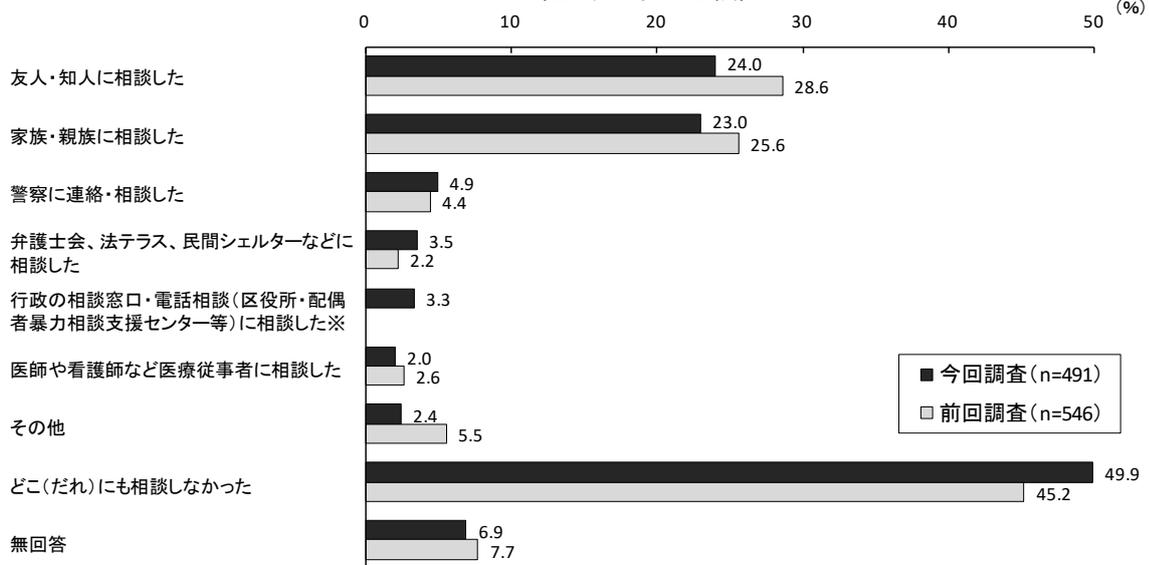


暴力被害にあった時の相談先については、「どこ(だれ)にも相談しなかった」が49.9%と半数近くを占めている。相談先としては、「友人・知人に相談した」(24.0%)と「家族・親族に相談した」(23.0%)の割合が高く、その他の回答割合は低い。

性別にみると、相談した割合は女性の方が高く、「どこ(だれ)にも相談しなかった」の割合は男性(63.4%)が、女性(44.9%)より18.5ポイント高くなっている。

図表23-2 暴力被害にあった時の相談先

(全体・前回比較)

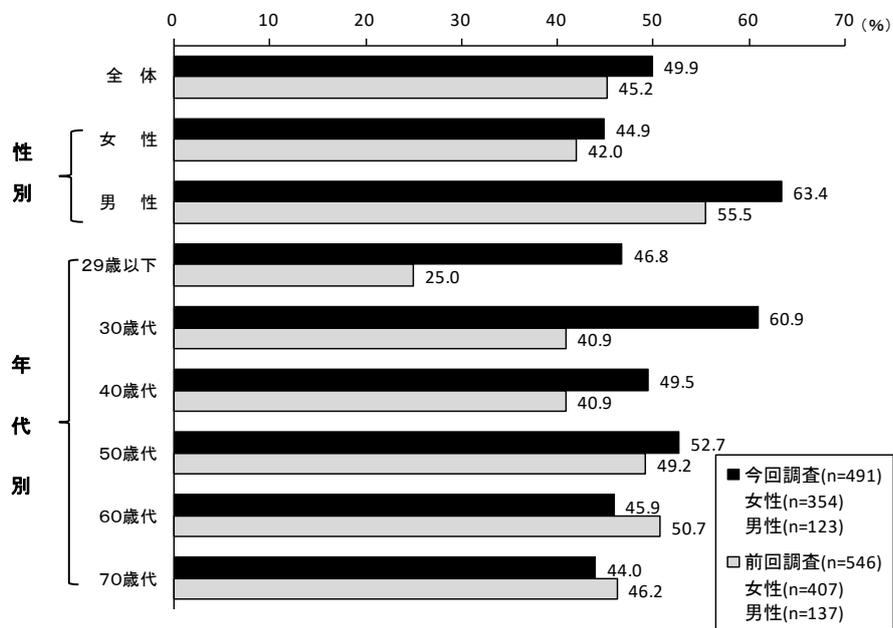


※前回調査では提示していない。

前回調査と比較すると、「どこにも相談しなかった」の割合が増加した一方、「友人・知人の相談した」「家族・親族に相談した」割合が低下している。

図表23-3 暴力被害にあった時の相談先「どこにも相談しなかった」

(前回比較)

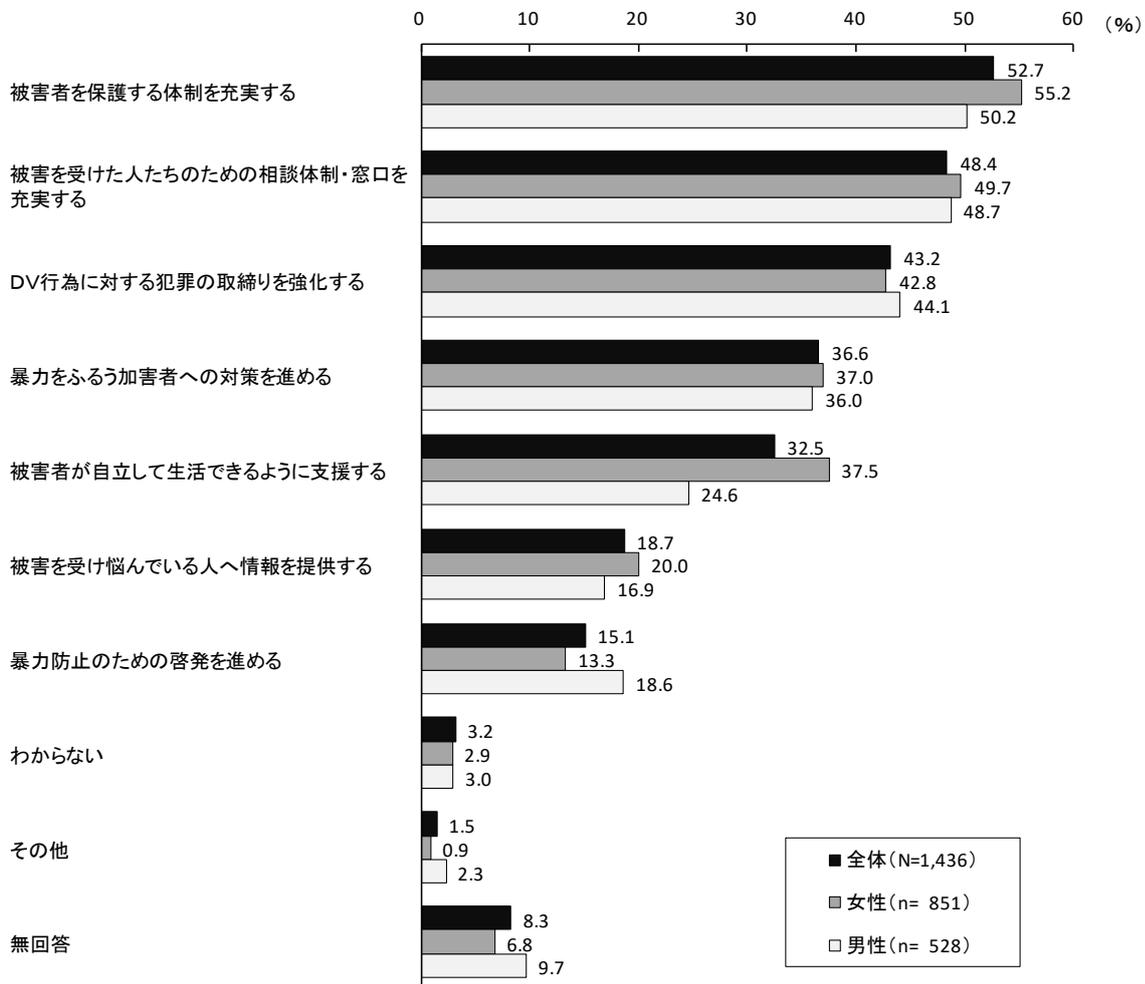


「どこにも相談しなかった」と回答したものを性別、年代別に前回調査と比較したところ、年代別で見ると、29歳以下(46.8%)は21.8ポイント、次いで30歳代(60.9%)が20ポイント増加している。

(4) ドメスティック・バイオレンスの防止対策 (問 24)

問24 DV防止のために、どのようなことを優先的に取り組むべきだと思いますか。(3つまで選択)

図表24-1 ドメスティック・バイオレンスの防止対策
(全体・性別)



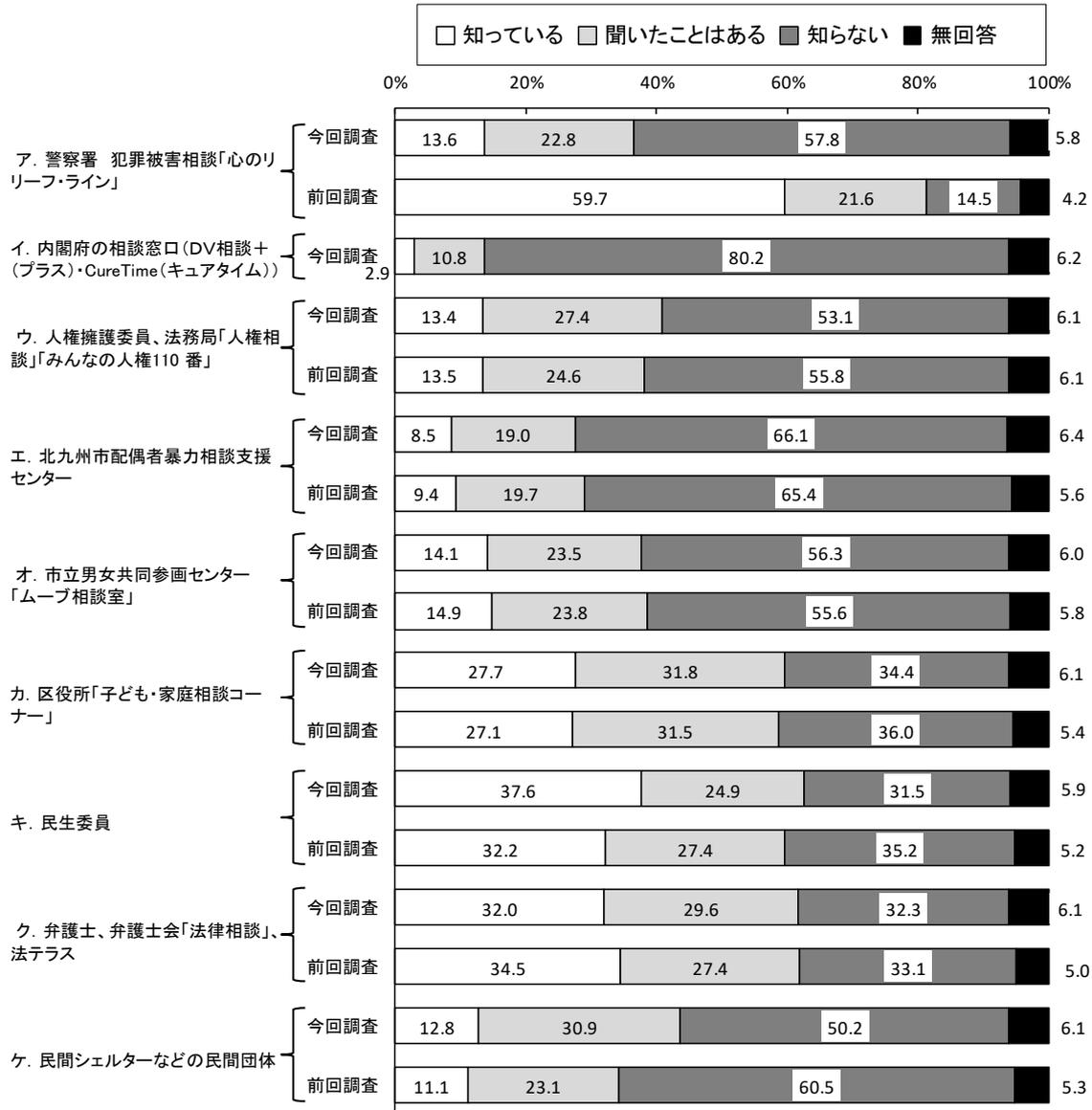
「被害者を保護する体制を充実する」の割合が 52.7%と最も高く、次いで「被害を受けた人たちのための相談体制・窓口を充実する」(48.4%)となっている。

性別で見ると、1 位から 4 位までは同じ項目となっており、順位に大きな差はみられない。男女の割合の差が比較的大きい項目は、「被害者が自立して生活できるように支援する」で、女性(37.5%)、男性(24.6%)と、女性が 12.9 ポイント高い。一方、「暴力防止のための啓発を進める」では、女性(13.3%)、男性(18.6%)と、男性が 5.3 ポイント高くなっている。

(5) 相談先、援助機関の認知状況 (問 25)

問25 配偶者や恋人など親しい関係にある人からの暴力などに対する相談先、援助機関として、あなたは次の機関、団体などが実施する相談・援助業務を知っていますか。
(ア～ケのそれぞれについて、あてはまるものを1つ選択)

図表25-1 相談先、援助機関の認知状況
(全体・前回比較)



(今回調査 : N=1,436、前回調査 : N=1,582)

配偶者や恋人など親しい関係にある人からの暴力などに関する 9 の相談先、援助機関の認知度について尋ねたところ、「知っている」の割合が最も高いのは「民生委員」(37.6%)、「弁護士、弁護士会「法律相談」法テラス」(32.0%)、区役所「子ども・家庭相談コーナー」(27.7%)の順となっている。

前回調査と比べると、前回調査では「警察署」のみの問となっていたところから、「警察署 犯罪被害相談「心のリリーフ・ライン」」に変更したところ割合が低下している。

図表25-2 相談先、援助機関の認知状況

(性別・年代別)

		ア. 警察署 犯罪被害相談「心のリリーフ・ライン」				イ. 内閣府の相談窓口(DV相談+「プラス」・CureTime(キュアタイム))				ウ. 人権擁護委員、法務局「人権相談」「みんなの人権110番」				
		サンプル数	知っている	聞いたことはある	知らない	無回答	知っている	聞いたことはある	知らない	無回答	知っている	聞いたことはある	知らない	無回答
全体		1436	13.6	22.8	57.8	5.8	2.9	10.8	80.2	6.2	13.4	27.4	53.1	6.1
性別	女性	851	12.6	23.6	58.8	5.1	2.4	10.5	81.9	5.3	12.9	28.6	53.6	4.9
	男性	528	16.1	22.3	55.5	6.1	3.8	11.9	77.5	6.8	14.8	26.5	51.7	7.0
性・年代別	女性・29歳以下	88	13.6	31.8	48.9	5.7	1.1	5.7	87.5	5.7	13.6	30.7	50.0	5.7
	女性・30歳代	136	8.8	22.1	63.2	5.9	0.7	8.1	85.3	5.9	8.8	19.9	65.4	5.9
	女性・40歳代	152	14.5	21.7	61.8	2.0	3.9	6.6	86.2	3.3	14.5	19.1	62.5	3.9
	女性・50歳代	173	9.8	19.1	67.1	4.0	2.3	10.4	82.7	4.6	9.2	35.3	53.2	2.3
	女性・60歳代	206	16.5	24.8	54.9	3.9	3.4	15.0	78.6	2.9	18.9	33.0	44.7	3.4
	女性・70歳代	89	10.1	25.8	52.8	11.2	-	14.6	73.0	12.4	9.0	31.5	48.3	11.2
	男性・29歳以下	65	13.8	27.7	49.2	9.2	3.1	6.2	81.5	9.2	16.9	21.5	52.3	9.2
	男性・30歳代	72	8.3	20.8	69.4	1.4	4.2	6.9	87.5	1.4	6.9	16.7	75.0	1.4
	男性・40歳代	79	13.9	22.8	59.5	3.8	3.8	7.6	83.5	5.1	15.2	21.5	57.0	6.3
	男性・50歳代	109	17.4	23.9	55.0	3.7	2.8	14.7	78.0	4.6	13.8	31.2	50.5	4.6
	男性・60歳代	140	20.0	20.0	54.3	5.7	5.0	15.7	73.6	5.7	17.1	32.9	43.6	6.4
	男性・70歳代	60	20.0	21.7	45.0	13.3	3.3	16.7	63.3	16.7	18.3	26.7	40.0	15.0

		エ. 北九州市配偶者暴力相談支援センター				オ. 市立男女共同参画センター「ムーブ相談室」				カ. 区役所「子ども・家庭相談コーナー」				
		サンプル数	知っている	聞いたことはある	知らない	無回答	知っている	聞いたことはある	知らない	無回答	知っている	聞いたことはある	知らない	無回答
全体		1436	8.5	19.0	66.1	6.4	14.1	23.5	56.3	6.0	27.7	31.8	34.4	6.1
性別	女性	851	7.9	19.7	67.0	5.4	15.9	24.7	54.4	5.1	31.7	31.5	31.5	5.3
	男性	528	9.3	18.6	64.8	7.4	11.0	22.5	59.7	6.8	22.2	33.3	37.9	6.6
性・年代別	女性・29歳以下	88	8.0	13.6	72.7	5.7	6.8	10.2	77.3	5.7	26.1	29.5	38.6	5.7
	女性・30歳代	136	3.7	17.6	72.8	5.9	10.3	18.4	65.4	5.9	36.8	25.7	31.6	5.9
	女性・40歳代	152	11.2	12.5	72.4	3.9	17.8	25.0	53.3	3.9	40.8	27.0	28.3	3.9
	女性・50歳代	173	6.9	21.4	67.6	4.0	20.2	29.5	48.0	2.3	28.9	37.0	30.1	4.0
	女性・60歳代	206	9.2	25.2	62.1	3.4	20.4	32.0	44.2	3.4	32.0	34.0	30.1	3.9
	女性・70歳代	89	6.7	24.7	56.2	12.4	10.1	21.3	56.2	12.4	19.1	33.7	37.1	10.1
	男性・29歳以下	65	10.8	18.5	60.0	10.8	6.2	12.3	72.3	9.2	20.0	27.7	43.1	9.2
	男性・30歳代	72	8.3	6.9	83.3	1.4	8.3	11.1	79.2	1.4	19.4	40.3	38.9	1.4
	男性・40歳代	79	10.1	20.3	64.6	5.1	7.6	21.5	65.8	5.1	25.3	29.1	40.5	5.1
	男性・50歳代	109	6.4	22.9	66.1	4.6	11.9	29.4	53.2	5.5	22.9	36.7	36.7	3.7
	男性・60歳代	140	11.4	19.3	62.9	6.4	13.6	27.9	52.9	5.7	22.9	33.6	37.1	6.4
	男性・70歳代	60	8.3	21.7	51.7	18.3	15.0	25.0	45.0	15.0	20.0	31.7	33.3	15.0

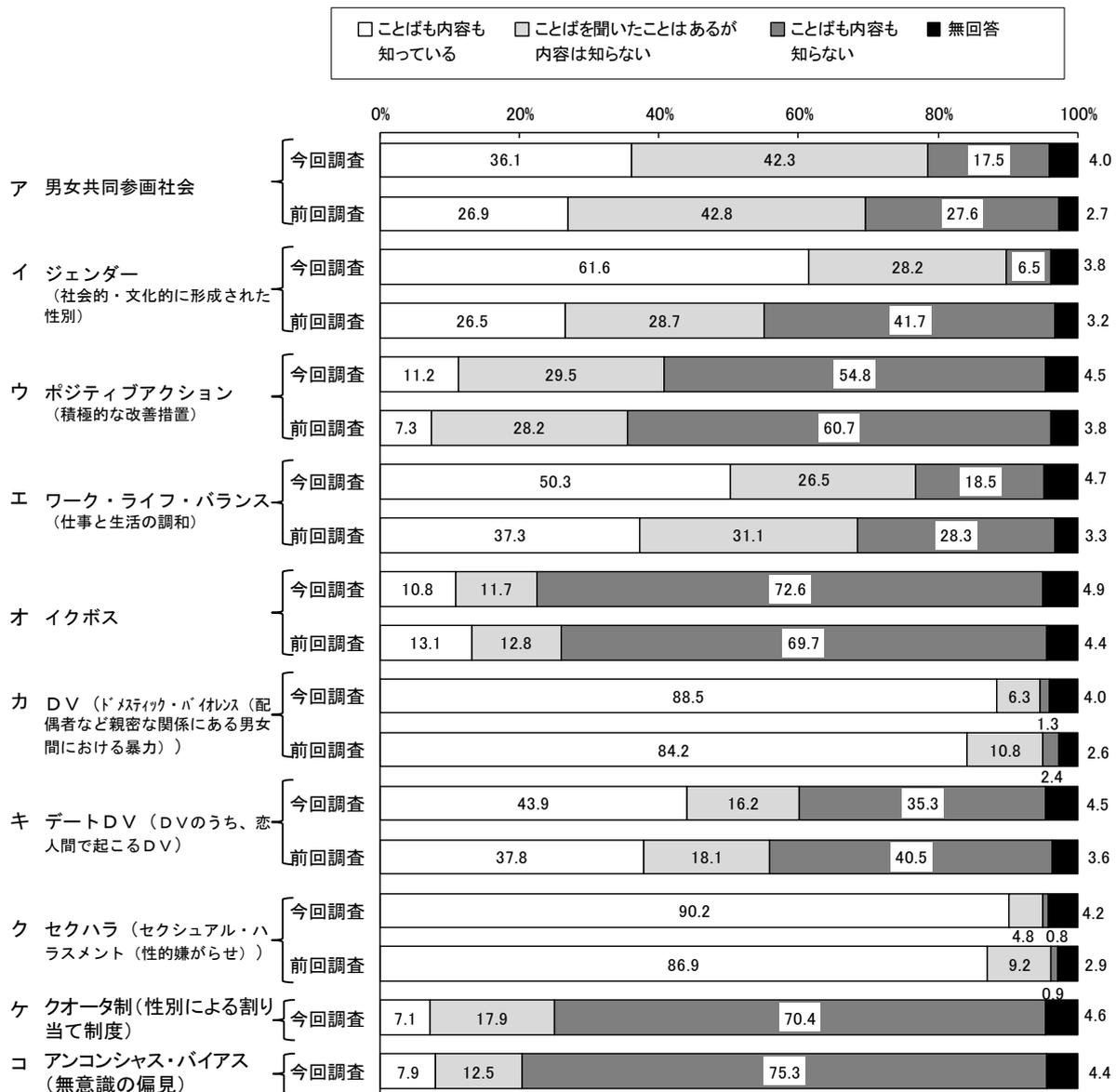
		キ. 民生委員				ク. 弁護士、弁護士会「法律相談」、法テラス				ケ. 民間シェルターなどの民間団体				
		サンプル数	知っている	聞いたことはある	知らない	無回答	知っている	聞いたことはある	知らない	無回答	知っている	聞いたことはある	知らない	無回答
全体		1436	37.6	24.9	31.5	5.9	32.0	29.6	32.3	6.1	12.8	30.9	50.2	6.1
性別	女性	851	39.7	25.0	30.1	5.2	33.7	29.8	31.1	5.3	16.1	34.1	44.9	4.9
	男性	528	35.8	25.2	32.8	6.3	29.9	30.1	33.5	6.4	8.5	26.5	58.1	6.8
性・年代別	女性・29歳以下	88	10.2	27.3	56.8	5.7	21.6	33.0	39.8	5.7	13.6	20.5	60.2	5.7
	女性・30歳代	136	27.2	26.5	39.7	6.6	23.5	30.9	39.7	5.9	14.0	29.4	50.7	5.9
	女性・40歳代	152	33.6	27.0	35.5	3.9	38.2	32.2	25.7	3.9	19.1	40.8	36.2	3.9
	女性・50歳代	173	47.4	27.7	20.8	4.0	38.7	29.5	28.3	3.5	13.3	45.1	38.7	2.9
	女性・60歳代	206	53.4	22.3	21.8	2.4	39.8	29.6	27.7	2.9	20.9	34.0	42.2	2.9
	女性・70歳代	89	53.9	18.0	16.9	11.2	31.5	21.3	33.7	13.5	11.2	22.5	55.1	11.2
	男性・29歳以下	65	20.0	21.5	49.2	9.2	24.6	30.8	33.8	10.8	9.2	10.8	70.8	9.2
	男性・30歳代	72	18.1	31.9	48.6	1.4	23.6	33.3	41.7	1.4	5.6	22.2	70.8	1.4
	男性・40歳代	79	22.8	25.3	45.6	6.3	36.7	27.8	30.4	5.1	6.3	26.6	62.0	5.1
	男性・50歳代	109	39.4	33.0	24.8	2.8	27.5	32.1	37.6	2.8	12.8	31.2	51.4	4.6
	男性・60歳代	140	50.0	20.7	23.6	5.7	32.9	28.6	32.1	6.4	10.0	29.3	55.0	5.7
	男性・70歳代	60	51.7	18.3	16.7	13.3	33.3	28.3	25.0	13.3	3.3	35.0	45.0	16.7

5 男女共同参画の推進について

(1) 言葉の認知度 (問 26)

問26 あなたは次にあげる言葉について知っていますか。
(ア～コのそれぞれについて、あてはまるものを1つ選択)

図表26-1 男女共同参画社会等に関する言葉の認知状況
(全体・前回比較)



(今回調査 N=1,436、前回調査 N=1,582)

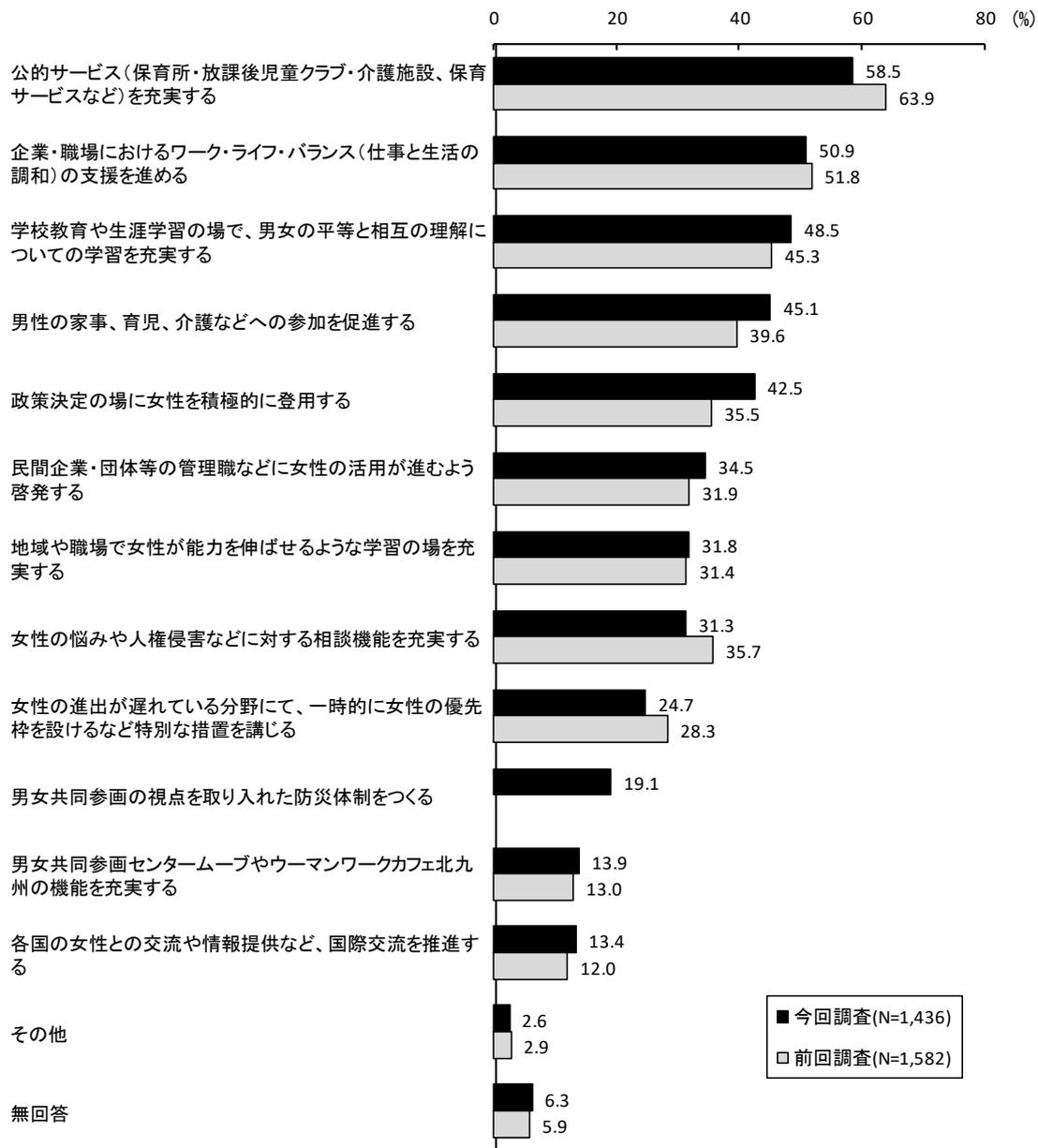
「ことばも内容も知っている」と「ことばを聞いたことはあるが内容は知らない」を合わせた割合をみると、最も高いのは「セクハラ」(95.0%)、次いで、「DV」(94.8%)、「ジェンダー」(89.8%)であり、「アンコンシャス・バイアス」(20.4%)が最も低くなっている。

概ねどの項目も増加しており、特に「ジェンダー」は 34.6 ポイントと大幅に増加した。

(2) 男女共同参画社会の実現のために市が推進すべき施策 (問 27)

問27 男女共同参画社会の実現のために、市はどのような施策を推進すべきだと思いますか。
(あてはまるもの全て選択)

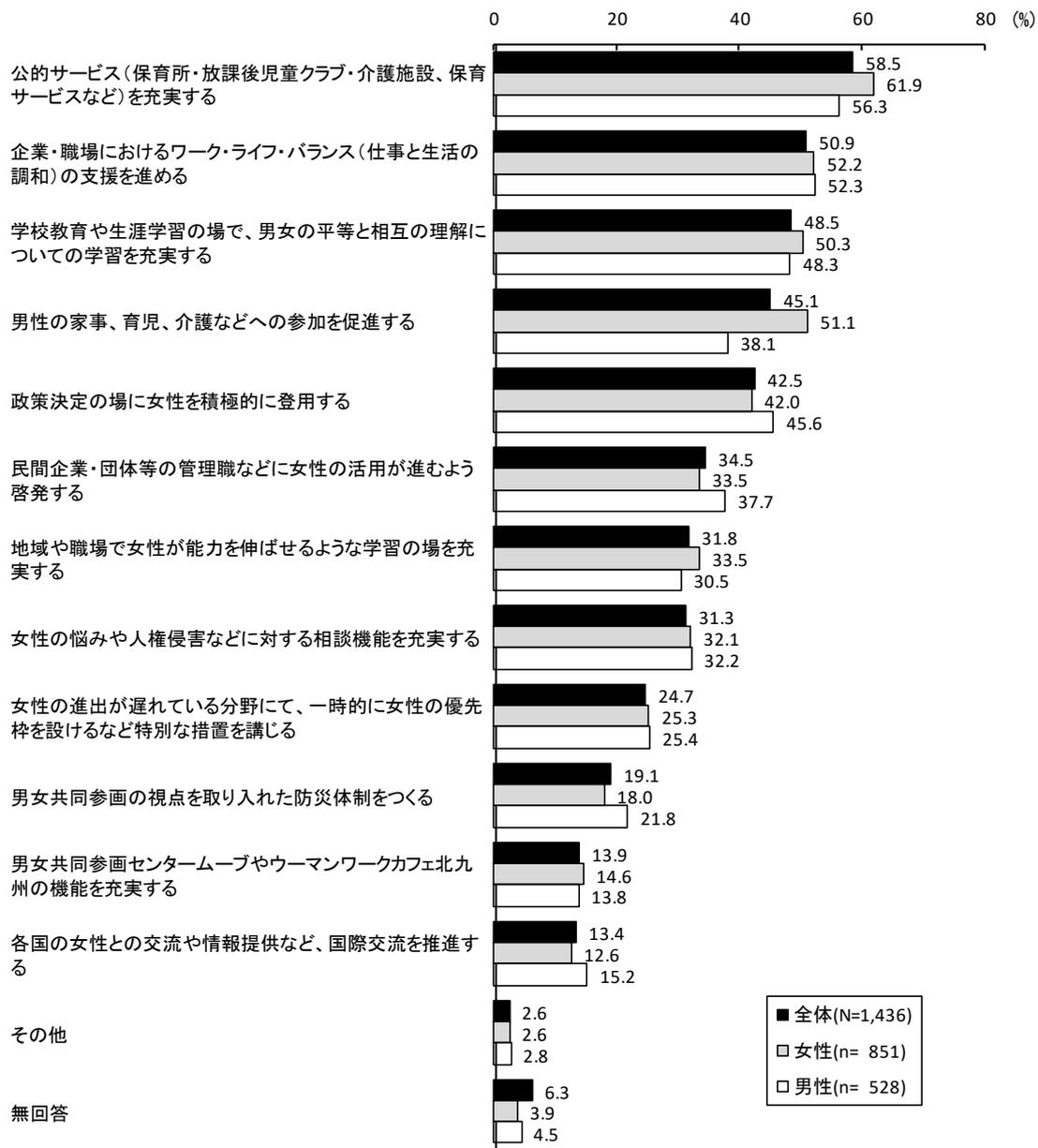
図表27-1 男女共同参画社会の実現のために市が推進すべき施策
(全体・前回比較)



男女共同参画社会の実現のために、市がどのような施策を推進すべきだと思うか尋ねたところ、「公的サービス(保育所・放課後児童クラブ・介護施設、保育サービスなど)を充実する」の割合が 58.5%で最も高く、次いで、「企業におけるワーク・ライフ・バランスの支援を進める」(50.9%)、「学校教育や社会教育・生涯学習の場で、男女の平等と相互の理解や協力についての学習を充実する」(48.5%)の順となっている。

前回調査と比較すると、順位にはほぼ変わりはない。

図表27-2 男女共同参画社会の実現のために市が推進すべき施策
(全体・性別)



性別で見ると、いずれの項目も大きな差はない。一番差が大きい項目は「男性の家事、育児、介護などへの参加を促進する」(女性 51.1%、男性 38.1%)で、女性が男性より 13 ポイント高くなっている。

図表27-3 男女共同参画社会の実現のために市が推進すべき施策

(性別・年代別)

		サンプル数	政策決定の場に女性を積極的に登用する	民間企業・団体等の管理職などに女性の活用が進むよう啓発する	女性の進出が遅れている分野にて、一時的に女性の優先を設けるなど特別な措置を講じる	地域や職場で女性が能力を伸ばせるような学習の場を充実する	学校教育や生涯学習の場で、男女の平等と相互の理解についての学習を充実する	企業・職場におけるワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）の支援を進める	保育サービス（保育所・放課後児童クラブ・介護施設、保育サービスなど）を充実する	公的サービス（保育所・放課後児童クラブ・介護施設、保育サービスなど）を充実する	男性の家事、育児、介護などへの参加を促進する	男女共同参画センターやウーマンワークカフェ北九州の機能を充実する	各国の女性との交流や情報提供など、国際交流を推進する	女性の悩みや人権侵害などに対する相談機能を充実する	男女共同参画の視点を取り入れた防災体制をつくる	その他	無回答
全体		1436	42.5	34.5	24.7	31.8	48.5	50.9	58.5	45.1	13.9	13.4	31.3	19.1	2.6	6.3	
性別	女性	851	42.0	33.5	25.3	33.5	50.3	52.2	61.9	51.1	14.6	12.6	32.1	18.0	2.6	3.9	
	男性	528	45.6	37.7	25.4	30.5	48.3	52.3	56.3	38.1	13.8	15.2	32.2	21.8	2.8	4.5	
性・年代別	女性・29歳以下	88	38.6	33.0	26.1	31.8	47.7	67.0	56.8	59.1	10.2	15.9	34.1	35.2	-	3.4	
	女性・30歳代	136	38.2	30.9	26.5	29.4	52.9	57.4	64.7	59.6	12.5	14.7	29.4	15.4	3.7	3.7	
	女性・40歳代	152	43.4	24.3	21.7	27.6	53.3	54.6	54.6	46.7	10.5	8.6	21.7	17.8	3.3	2.0	
	女性・50歳代	173	44.5	32.4	26.6	37.0	43.4	53.8	59.5	49.7	13.9	12.1	28.9	15.0	2.9	4.6	
	女性・60歳代	206	42.2	40.3	26.7	35.9	54.4	50.5	70.4	52.9	15.5	13.1	40.8	17.5	1.0	3.4	
	女性・70歳代	89	44.9	41.6	23.6	38.2	49.4	27.0	62.9	38.2	28.1	12.4	38.2	12.4	4.5	5.6	
	男性・29歳以下	65	35.4	24.6	21.5	32.3	55.4	63.1	67.7	56.9	9.2	15.4	29.2	26.2	1.5	6.2	
	男性・30歳代	72	40.3	33.3	25.0	23.6	48.6	52.8	52.8	43.1	13.9	18.1	23.6	20.8	4.2	5.6	
	男性・40歳代	79	41.8	38.0	27.8	31.6	49.4	59.5	50.6	38.0	16.5	17.7	43.0	29.1	1.3	3.8	
	男性・50歳代	109	35.8	33.9	20.2	22.9	43.1	47.7	52.3	28.4	14.7	7.3	25.7	22.0	5.5	2.8	
	男性・60歳代	140	57.9	44.3	28.6	35.7	47.1	48.6	59.3	38.6	13.6	20.0	37.1	16.4	2.1	3.6	
	男性・70歳代	60	58.3	48.3	30.0	36.7	53.3	48.3	58.3	28.3	15.0	11.7	33.3	21.7	1.7	5.0	